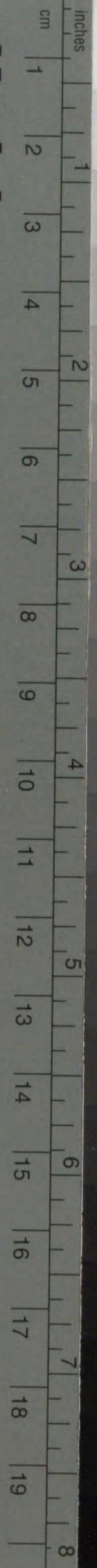


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



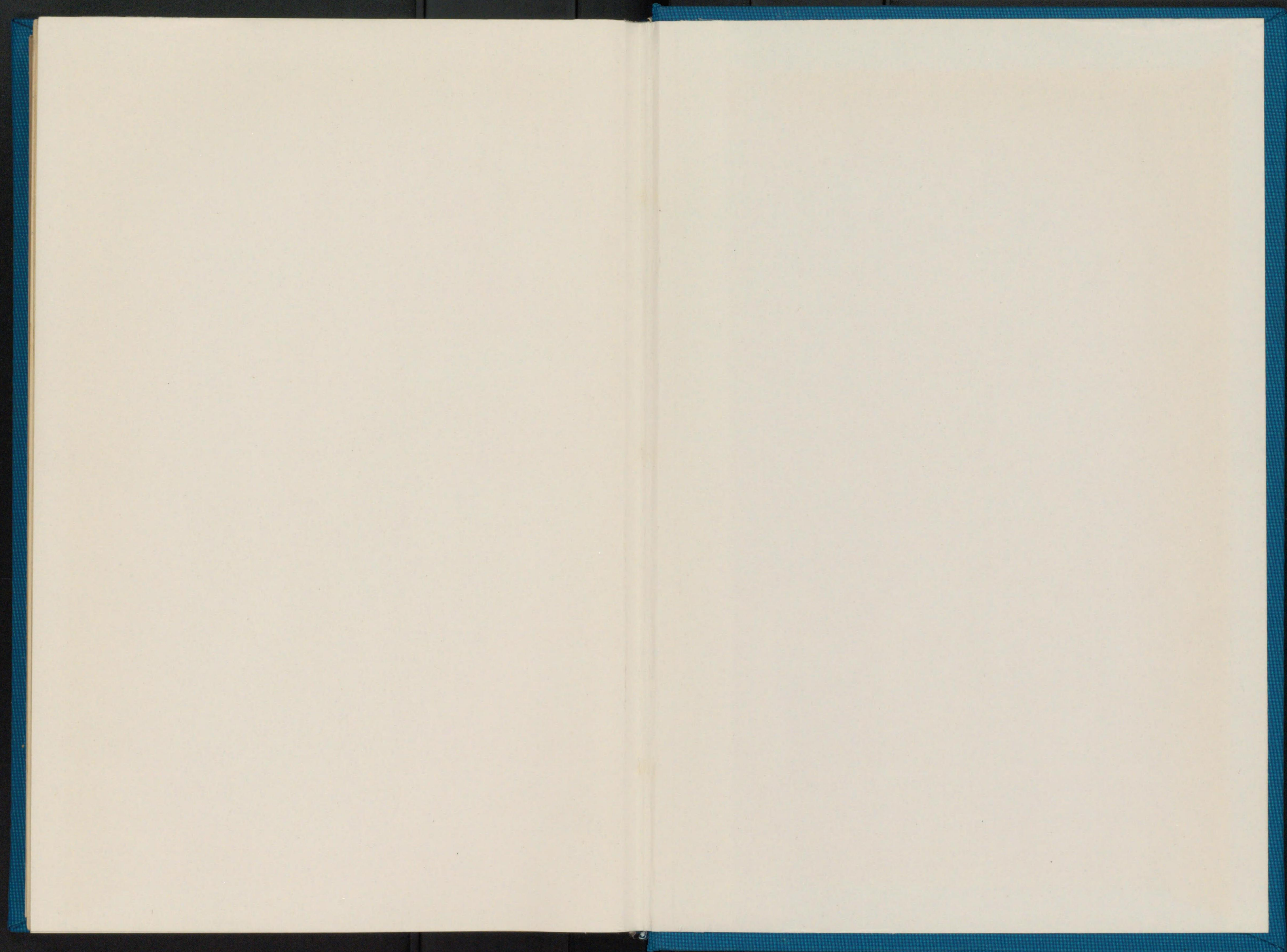
Kodak Color Control Patches

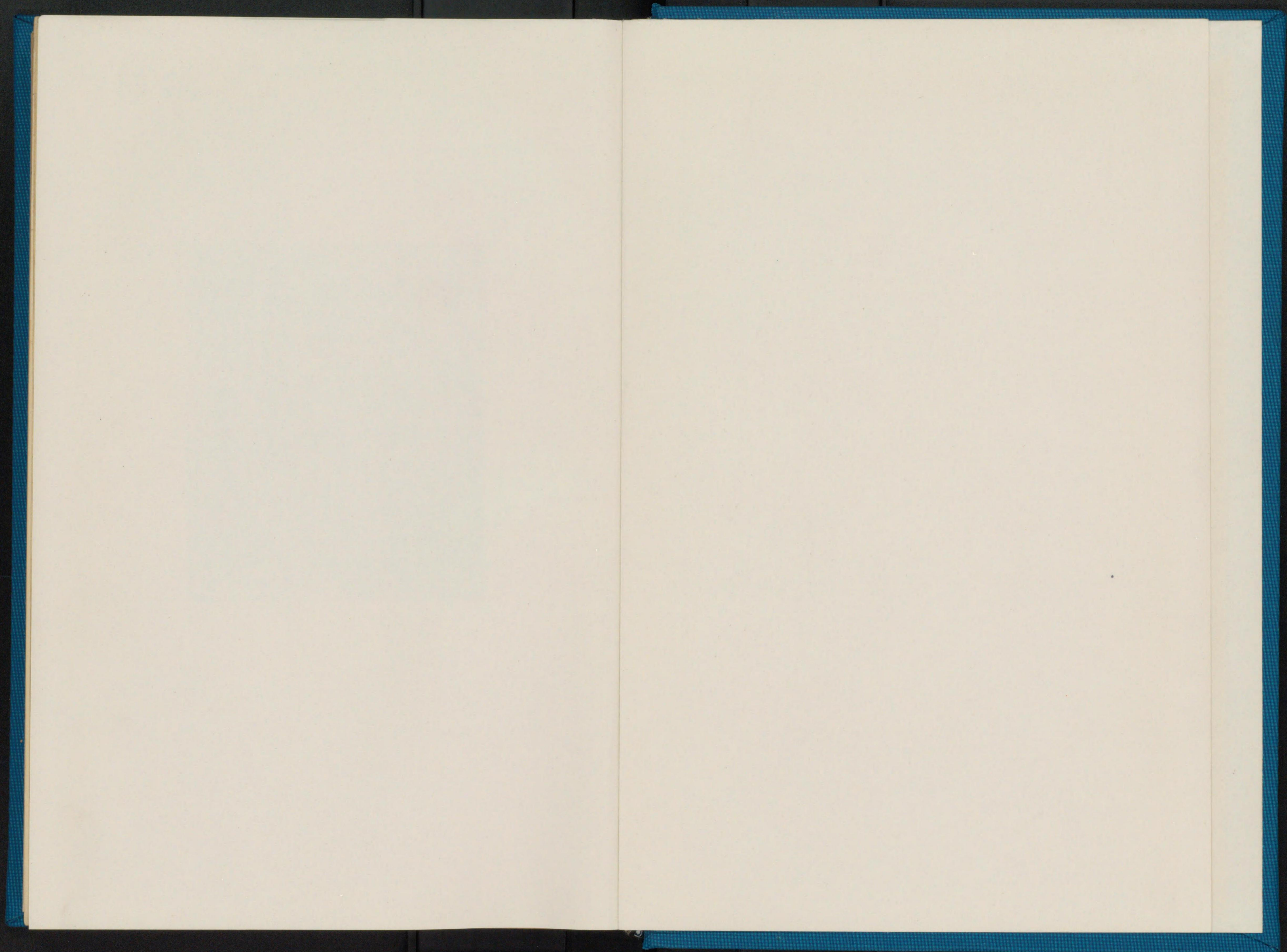
© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]
[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]	[Patch]

584

584-3
1200501523431





246

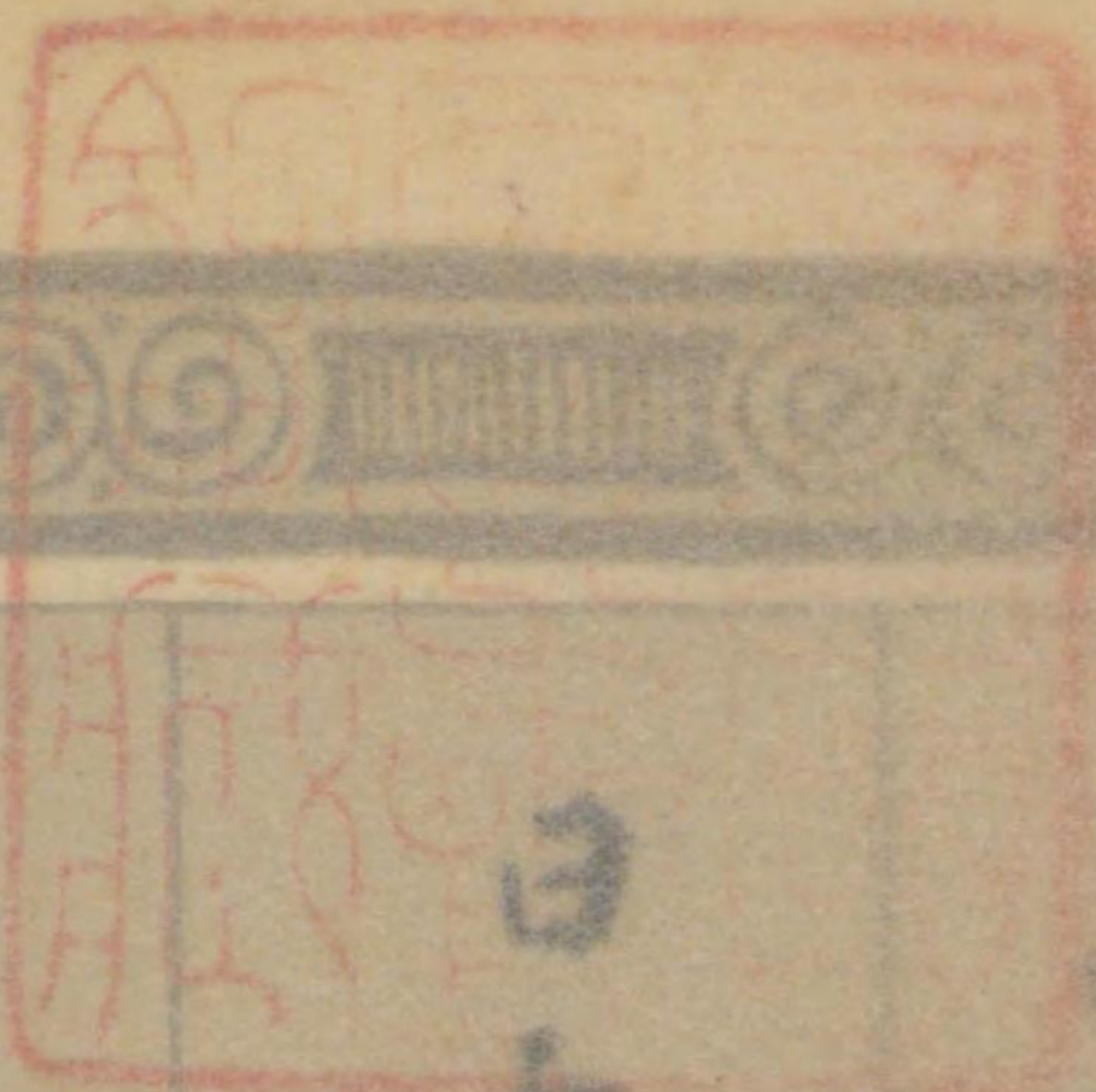
地蔵補和讃
 故命頂礼地蔵子
 釈迦の付處を念じ
 願ふ心也新の心
 宿世の善業を念ふ

高野辰之編

日本歌謡集成

卷四

春秋社版

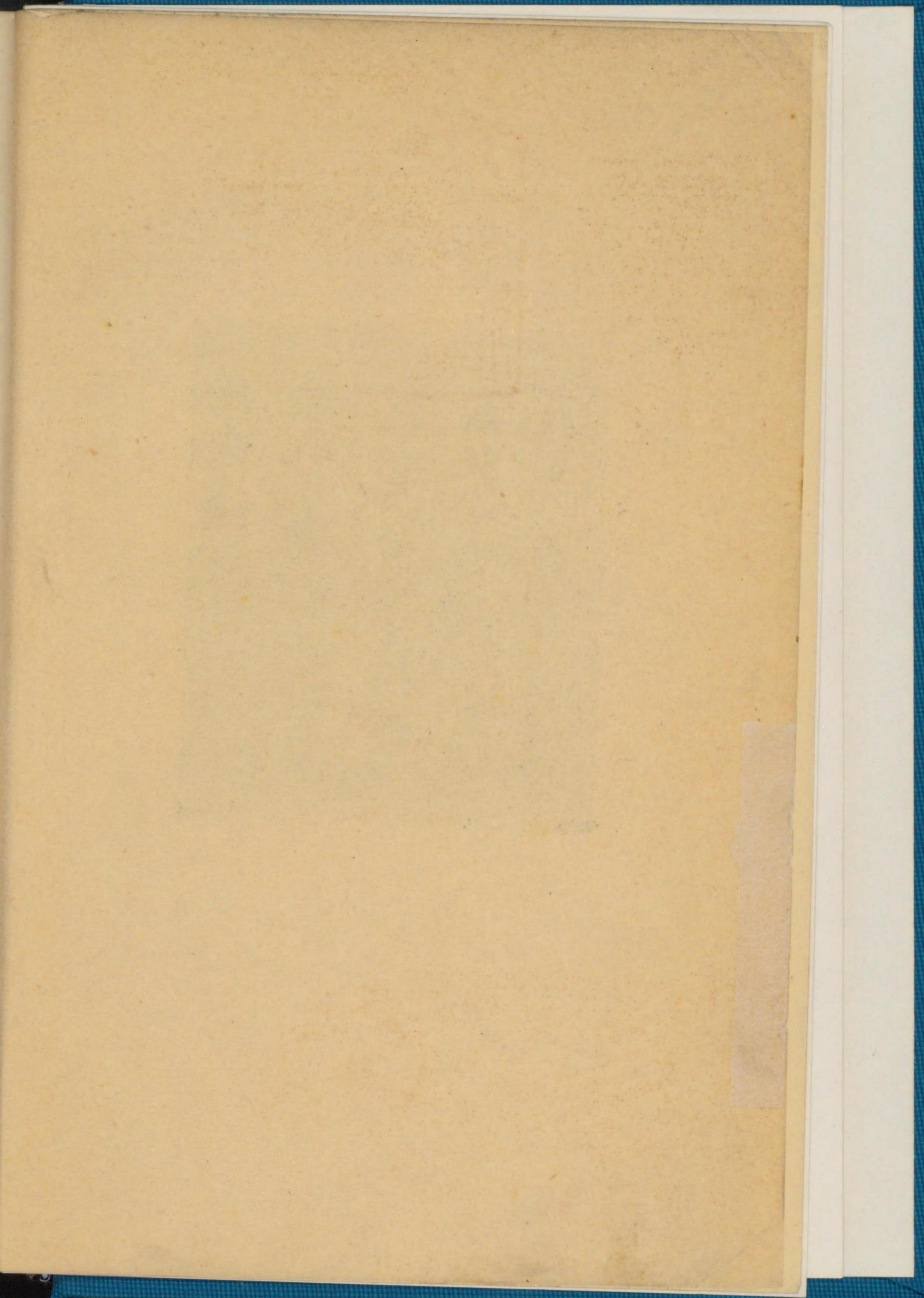
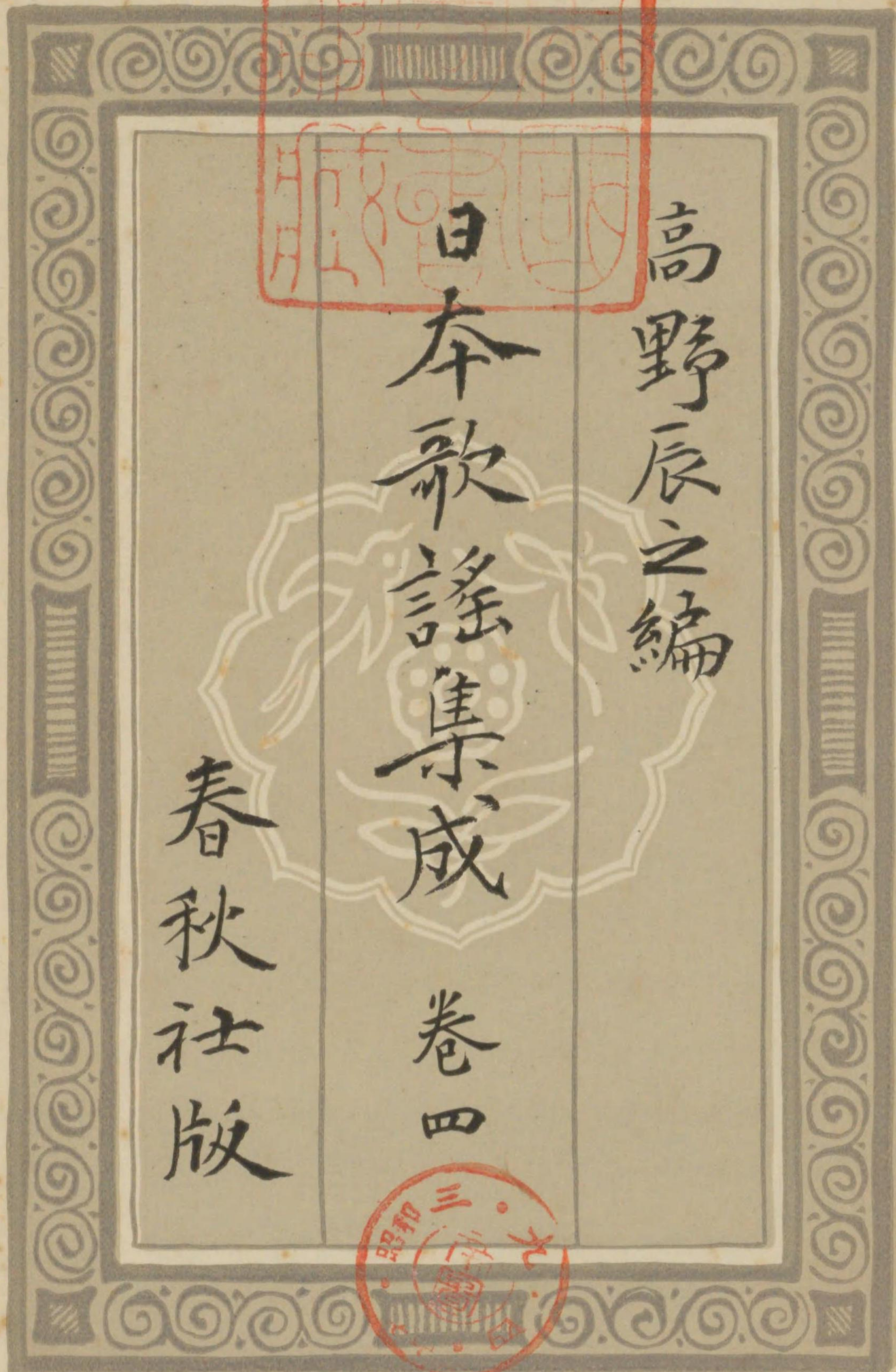


高野辰之編

日本歌謠集成

卷四

春秋社版





聖衆來迎圖

Handwritten text in vertical columns, likely a sutra or commentary, written in a cursive style. The text is arranged in several columns within a faint rectangular border.



聖衆來迎圖



聖衆來迎圖

584-3

日本歌謡集成 卷四

(佛會歌謡篇)

目次

(解說)

第一 古讚集……………二
 第二 教化……………五
 第三 訓伽陀……………八
 第四 講式・聲歌……………九
 第五 和讚雜集……………九
 第六 順禮歌……………一〇
 第七 補遺……………一〇

(本文)

第一 古讚集

一 百石讚歎……………二
 1 叡山所傳……………二
 2 高野山所傳附厚恩贊・報恩贊・師恩贊……………二
 3 三寶繪詞所載……………二
 4 拾遺和歌集所載……………二
 二 法華讚歎……………二
 三 舍利讚歎(慈覺大師)……………三
 四 註本覺讚(慈惠大師)……………四
 五 極樂國彌陀和讚(千觀阿闍梨)……………六
 六 天台大師和讚(惠心僧都)……………七
 七 天台智者大師畫讚(顏魯公)……………七
 八 極樂六時讚(惠心僧都)……………九

九 來迎讚(同)……………一三
 一〇 二十五菩薩和讚(同)……………一五
 一一 山王和讚(同)……………一六
 一二 彌陀如來和讚(覺超僧都)……………一七
 一三 舍利講式和讚(永觀律師)……………一九
 一四 菩提心讚(珍海已講)……………二〇
 一五 智證大師和讚(藤原通憲)……………二三
 一六 弘法大師和讚(藤原成範)……………二四
 一七 極樂願往生和讚(西念)……………二六
 一八 慈惠大師和讚(寶地房證真)……………二八
 一九 涅槃和讚(源空上人)……………三〇
 二〇 觀音和讚(解脫上人)……………三二
 二一 四座講法則……………三六
 二二 涅槃和讚(明惠上人)……………四〇
 二三 羅漢和讚(同)……………四二
 二四 遺跡和讚(同)……………四四
 二五 太子和讚(同)……………四六
 二六 文 讚(空阿彌陀佛)……………四八
 二七 善導大師和讚(稱光上人)……………五〇
 二八 淨土和讚(親鸞上人)……………五二
 二九 高僧和讚(同)……………五四
 三〇 正像末和讚(同)……………五五
 三一 疑惑讚(同)……………五九
 三二 皇太子聖德奉讚(同)……………六一
 三三 愚禿悲歎述懷(同)……………六二
 三四 善光寺如來和讚(同)……………六三
 三五 帖外和讚(同)……………六四

(卷上)

法華和讚 (日蓮上人)	八五
百利口語 (一遍上人)	八六
聖德太子讚 (思圓上人)	九〇
眞言安心和讚 (同)	九〇
光明眞言和讚 (同)	九二
淨業和讚	九三
晨朝讚 (惠心僧都)	九三
日中讚 (同)	九三
日沒讚 (同)	九七
初夜讚 (同)	九七
中夜讚 (同)	九八
後夜讚 (同)	一〇〇
補接	一〇〇
(已上極樂六時讚)	一〇一

(卷中)

來迎讚 (惠心僧都)	一一三
別願讚 (一遍上人)	一一四
往生讚 (他阿上人)	一一六
弘願讚 (中聖上人)	一一八
稱揚讚 (同)	一二〇
六道讚 (同)	一二三
實蓮讚 (託阿上人)	一二五
莊嚴讚 (同)	一二六
光陰讚 (同)	一二六
大和讚 (同)	一二八
二教讚	一三〇
拾要讚	一三一
小經讚	一三四

(卷下)

恩德讚小	一一五
恩德讚大	一一七
無常讚	一一七
滅罪讚	一一八
末法讚	一二四
釋迦讚	一二四
五緣讚	一二四
八相讚	一二四
涅槃讚	一二四
拾要讚	一二九
迎接讚	一三〇
極樂讚本	一三五
極樂讚末	一三五
光明讚	一三五
寶海讚	一三五
心品讚	一三五
本願讚	一三五
懺悔讚	一三〇
天台智者大師和讚荻原鈔	一三〇
三九 天台法華八講所用教化	一八〇
一〇 天台大師供次第教化	一八〇
二 沙彌戒導師教化 (眞喜律師)	一八〇
三 教化之文章色々 (懷空僧都)	一八一
四 法成寺金堂修正始夜	一八一
承保三年圓宗寺修正	一八一

第二教 化

康平四年民部卿大宮堂修二月	一九三
康平七年同人同堂修二月	一九三
延久三年中堂五番	一九四
延久四年中堂一番	一九五
同 年中堂五番	一九六
康平六年御佛名	一九七
康平六年春宮御佛名	一九八
同年皇太后御佛名	一九八
同年中宮御佛名	一九九
皇后宮佛名	一九九
康平六年大内結願	二〇〇
康平七年院御佛名	二〇一
同年內御佛名	二〇一
延久元年皇太后宮御佛名	二〇一
同年上東門院御佛名	二〇一
治曆三年內御佛名	二〇二
永保二年御佛名	二〇四
天喜二年皇太后宮金剛般若御導師	二〇四
康平二年大炊殿關白法花經供養	二〇五
康平七年關白殿御讀經	二〇六
東寺修正教化	二〇六
佛名導師作法教化	二〇八
修正作法裏書ノ教化	二〇九
往生講式教化	二〇九
御影供奉師教化 (譽饒上人)	二一〇
無常導師教化 (同)	二一〇
龍女教化 (同)	二一〇
塔供養諷誦導師教化	二二〇

佛名會教化	二二〇
建春門院御念佛結願教化	二二二
羅漢供次第教化	二二三
羅漢供教化	二二三
八祖銘ノ教化	二二七
弘法大師御影供表白教化	二二八
上清瀧論匠教化	二二八
仁和寺百部最勝經供養教化	二二八
修正教化	二二九
大秦廣隆寺所用教化	二二九
諸大師供教化	二二九
諸大師供教化	二二九
山門大會教化	二二九
聲明五音博士所載教化	二二九
錫杖教化	二二九
大師講法則所載教化	二二九
法隆寺々要日記所載教化	二二九
三寶院舊記所載教化	二二九
醍醐寺新要錄所載教化	二二九
部類表白集所載教化	二二九
延文四年結緣灌頂記所載教化	二二九
初夜導師教化 (播州法花山所有)	二二九
曼荼羅供教化	二二九
曼茶羅供教化	二二九
夏始表白教化	二二九
乞戒作法教化	二二九
同	二二九

三六	蓮花成院修正導師作法教化	三三
三七	修正導師作法教化	三三
三八	結緣灌頂大阿聲明次第所載教化	三三
三九	傳法灌頂誦經導師教化二十八種	三三
四〇	後柏原院一周聖忌御經供養教化	三三
四一	後奈良院三回聖忌御經供養教化	三三
四二	代々先皇法語集所載教化	三三
四三	灌頂會教化	三三

第三 訓伽陀

一	天台宗常用	二四
二	聲明要略集所載	二四
三	聲明口訣所載	二四
四	法隆寺所用	二四
五	佛名會法則所載	二四

第四 講式・聲歌

一	二十五三昧式	二四
二	六道講式	二五
三	順次往生講式	二六
四	極樂聲歌	二七
五	稱名寺所傳聲歌	二八
六	六座念佛式	二八

第五 和讚雜集

一	釋尊御誕生和讚	二九
二	釋迦牟尼如來和讚	二九

三三	歸命本願和讚	三五
三四	淨土生蓮和讚	三五
三五	攝取不捨和讚	三五
三六	無常和讚	三五
三七	無常和讚	三五
三八	無常和讚	三五
三九	無常和讚	三五
四〇	無常和讚	三五
四一	無常和讚	三五
四二	無常和讚	三五
四三	歡喜踊躍和讚	三五
四四	觀音和讚	三五
四五	觀音和讚	三五
四六	觀音和讚	三五
四七	觀音和讚	三五
四八	觀音和讚	三五
四九	因果和讚	三五
五〇	石女地獄和讚	三五
五一	女人往生和讚	三五
五二	曼荼羅供略和讚	三五
五三	賽の河原地藏和讚	三五
五四	賽の河原地藏和讚	三五
五五	中將姫號法如和讚	三五
五六	中將姫和讚	三五
五七	俊寛和讚	三五
五八	敦盛卿和讚	三五
五九	一の谷組打和讚	三五
六〇	道成寺清姫和讚	三五
六一	荆萱道心和讚	三五
六二	梅若丸和讚	三五

三	釋迦如來和讚	二九
四	佛生會和讚	二九
五	八相和讚	二九
六	因位和讚	二九
七	茶毘和讚	二九
八	舍利和讚	二九
九	釋迦彌陀恩德和讚	二九
一〇	釋迦彌陀恩德和讚	二九
一一	釋迦彌陀恩德和讚	二九
一二	阿彌陀和讚	二九
一三	阿彌陀和讚	二九
一四	阿彌陀いろは和讚	二九
一五	阿彌陀和讚	二九
一六	阿彌陀如來和讚	二九
一七	阿彌陀如來和讚	二九
一八	阿彌陀經和讚	二九
一九	掌中和讚	二九
二〇	淨土莊嚴和讚	二九
二一	西方和讚	二九
二二	淨土十樂和讚	二九
二三	大慈利益和讚	二九
二四	五種正行和讚	二九
二五	名號和讚	二九
二六	名號和讚	二九
二七	念佛和讚	二九
二八	念佛和讚	二九
二九	念佛和讚	二九
三〇	念佛和讚	二九
三一	本願決疑和讚	二九

第六 順禮歌 (御詠歌)

一	西國三十三番順禮歌	四五
二	四國八十八ヶ所御本尊御詠歌	四五
三	秩父靈場三十四ヶ所觀世音御詠歌	四五
四	阪東靈場三十三ヶ所觀世音御詠歌	四五
五	釋迦如來三十二相御詠歌	四五
六	地蔵大菩薩四十八體御詠歌	四五
七	信濃國善光寺御詠歌	四五
八	京都六阿彌陀御詠歌	四五
九	武州六阿彌陀御詠歌	四五
一〇	山城國六道地蔵尊六所御詠歌	四五
一一	諸佛御詠	四五
一二	弘法大師御詠歌	四五
一三	圓光大師二十五靈所御詠歌	四五

第七 補遺

一	寒念佛の讚	四八
二	丁春駒唄	四九
三	地藏和讚	五〇
四	善光寺如來和讚	五一
五	念佛和讚	五一

目次終

解 說

日本歌謡集成第四卷、收むる處は佛會に用ふる歌謡、時の上よりいへば奈良朝より近く江戸幕府時代の中期に至る迄の作に係るが、其の主要根幹を爲すものは平安朝時代から室町幕府時代末迄の間に成れるもので、中古篇と標記したのは實にこれが爲である。

佛會歌謡を用語の上より見ては、梵語のまゝの梵讚、漢語に成れる漢讚、及び我が國語を以て綴つた和讚の三種となすべきである。而して此の書に採録したものは専ら其の和讚に屬するものである。

和讚は通常七五調で綴つた、所謂今様歌の連接體に成れる長篇物として考へられるが、必ずしもそれに限らないのである。古いものには短歌の體もあり、五七調もあり、五七と七五、八六等の句の交雜してゐるものもある。あつてもそれ等は律語として考ふべきもので、決して散文に屬するものではない。然るに佛前で朗唱して衆生を化導しようとする文章即ち教化けうかに至つては、散文體を爲すものが古く、降つては七五調の作もあり短歌の體に成るものも綴り出された。さうして其の散文體のものも甚だ律語に近くて、四行又は八行十二行等、四の倍数より成るものが多い。これは或る固定した曲調の下に立つが爲で、之を聽聞すれば、之を歌謡扱にすべきことを感ぜしめられるものである。又一種訓伽陀くんだと呼ぶものがある。伽陀は梵語譯して頌又は諷頌、漢語より成るものも亦五言又は七言の四句より成るのであるが、其の曲調を用ひて我が國語で綴つたものを諷ふよりして訓伽陀と稱せられたものの如くである。これに今様體のものと散文より成るものとあり、朗詠の句も之に使用せられてゐる。

梵讚は到底常人に解し得られざるもの、暫く之を收めないこととしたが、漢讚に至つては其の二三四五を示したく、且つ漢讚和讚の類が如何やうに配次せられるかを告げたいが爲に、講式二三種を示すこととし、講式中の和讚に對し

て聲歌と題したのも二三之を附載することとした。即ち此の書の抱有するものは所謂和讃の他に教化・訓伽陀・講式・聲歌の四種と世に御詠歌と呼ぶ巡禮歌と合せては六種にわたるのである。

第一 古 讃 集

古讃集は私の假りに附した名で、奈良朝より鎌倉幕府時代末頃迄の間に成つた和讃を輯め録して、かう題したのである。分けて三十九項としてあるが、此の中には一項にして數十篇を含む、淨土・高僧・正像末の三帖和讃又は淨業和讃の如きもあつて、箇々に數へては百幾十篇にも達するのである。

もし此の多數の讃に對して一々來由曲調等を説かば、それは本文に幾倍することとなつて、到底我人共に其の繁冗に堪へられぬであらう。よつて拙著日本歌謡史中に説明した作は一切それに譲ることとして、特殊のものだけを此處に紹介することとする。

和讃の最も古きものは百石讃歎又は法華讃歎で、共に行基の作と傳へるものである、さうして其の百石讃には數種の所傳があり、又其の曲調に合せて諷ふ爲に歌詞を新作したものには高野山所傳の如きものがある。今併せて之を載せた。

舍利讃歎以下に注目すべき作の多いこと及び天台大師和讃が顔魯公作の書讃に憑ることは、此處に一言して置きたい。さうして特に其の書讃の全文を掲げたのは漢讃と和讃との間に存する本末關係を知るの一助に供したいと思つてに他ならぬ。

慧心院僧都の作は極樂六時讃を始めとして其の文辭の瑰麗なものは既に歌謡史の中にも述べたが、特に多少の疑をもつて擧ぐべきものに山王和讃がある。法宿華臺聖眞子とあるので、山王の讃歎であらうとは思ふが、それにしては

一篇中に山王關係の文字があまりに少い。何人か某和讃に加筆して山王和讃と題したのではあるまいか。

弘法大師和讃は高野山の所傳で、櫻町中納言藤原成範の作といふことになつてゐる。やゝ鄙調を帯びてゐて、源平時代の作としては多少首を傾けさせられぬでもないが、古傳に従つて配次登載のこととした。

觀音和讃これは解脱上人貞慶（建保元年寂）の作と稱せられる。作に氣品が乏しく、あれだけ特異な人の筆だとは思ひ難い。切に宗教家諸彦に鑒査を願ひたい。

四座講法則、四座講とは涅槃講・舍利講・遺跡講・羅漢講・以上四座の講會を指すのである。これに限つて和讃の文のみでなく、講會の次第即ち講式を擧げてある。當然後の講式の條下に配すべきであるが、此の法則にあつては和讃が最も重要地位を占めてゐることを感じて、特に古讃集中に收めて示すこととした。此の講式は明慧上人高辨（貞永元年寂）の製作で、何れも建保二三年の交に成つたらしいが、これに收めたのは此の四講式が眞言家に用ひられるに至つて作成されたもので、高辨の作其のまゝでは無い。四座の講會に諷はれる和讃はそれ々の名に負ふものであつて、舍利講に限つて舍利和讃の外に舍利讃歎をも用ひてゐる。前者は永觀作の舍利講式和讃であり、後者は慈覺作の初段だけを探つたものである。但他の三和讃は明慧の作であらう。（一説には解脱の作ともいふ）明慧が釋尊渴仰の念の痛切であつたことは、弟子喜海の傳記によつても知られる。其の景仰戀慕は發して特異の韻律をもつ和歌となり、莊嚴化しては此の講式の文となつたのである。涅槃の部には如來入滅の悲歎を叙べて佛在世に生を享けざりしを憾み、遺跡には佛の生處と没後とを思慕し、舍利の部には、舍利によつて佛の眞身にあへるが如くに歡喜し、羅漢條下には釋尊の付囑を受けたる十六尊者に稽首し、此の釋尊分身を通して佛に歸命し渴仰することを述べてある。文に多少の稚拙はあつても、其處に妙味があつて、熱情の充實に於ては佛會歌謡中に於ても稀に見る處の文字である。

文讃・善導大師讃又は三帖和讃乃至太子讃に就いては歌謡史に於て其の説くべきを説いてある。次に列ねた法華和

讚は日蓮上人の作として傳へるが確證は無いと聞く。佛一代五時の諸經中、法華の最第一なるを述べ、殊に本門久遠實成の眞實を開顯するものとして其の功德を稱へたものである。日蓮の作でないにしても、此の宗の碩徳の作であつたことには疑がないであらう。

百利口語は時宗の開祖一遍上人の作。三界六道にありとあるものに羨望すべきは無く、ただ六字の名號のみが此の身に過ぎた實だとして念佛を勧めたものである。佛會に用ひられたか否かは明でないが、和讚として見て差支ないと思ふ。一の懺悔文學として作者の主觀の著しく顯れてゐることと文の暢達とに於て注目すべく、時宗の行はれたのは開祖の文辭が重因をなしてゐたことを想像する。

眞言安心和讚は思圓（睿尊、正應三年寂）の作。眞言法によつてのみ即心成佛が出来る、眞言陀羅尼によらなければ、佛とはなり得ないとして、在家の者にも日夕眞言を唱ふべしと勧めたものである。後半は平俗、前半は難解の如くにも思はれるのは、凡俗の眼の見誤りであらうか。光明眞言和讚も亦思圓の作で、其の功德を説いたものである。

淨業和讚、時宗用の和讚集である。一遍上人が平生を臨終と心得、念佛を以て宗意となし、源信（慧心僧都）の六時讚並に來迎讚及び古聖の讚を月の日々に配して諷誦したのか、遂に此の宗の勤行の規則となつたのであつて、諸宗の中最も和讚を重んずるものとなつた。此等と讚集の版木が磨滅に及んだので、三十三祖が光明寺長順と共に新刊を謀つて完了せず、一道なる者が之を繼承して、善本に校合し遂に梓行するに至つたのが此の淨業和讚である。

天台大師和讚荻原鈔、古讚集の終に特に此の書を收めることとした。序文にあるが如く寶曆二年上總荻原郷上元寺の覺胤が天台大師別傳講義の間に、流布和讚の手爾波を改め、句毎に傳文を調合し、まゝ所見を加へて名づけて荻原鈔といつたのである。寶曆五年明脱が校定して梓行した。此の和讚の鈔には實海の作もあると聞くが、まだ見ない。荻原鈔は引用が廣汎であつても、此の種の書に於て陥り易い奇異の所説をなさず、眞に學問的である所が尊い。

第二 教化

こゝに古讚集の解説を了へて教化に入らんとして一事の記しおくべきがある。それは他でない。大正十五年七月九日の夜、東京驛構内しかも今し發車しようといふ急行列車の寢臺車に於て、見送人に挨拶すべく席を離れた二三分の間に、カバンを何人かに持去られたことであつた。絶えず不安定な生を送つてゐる私が、精巧な印刷を施した長方形の紙の幾ひらかを身から離してゐるよう筈はなく、勿論其のカバンの中にも無かつたのであるが、それに換へ難い貴重品が收めてあつたのである。それは大切なノート二冊で、其の一冊には永年かけて集めた佛會歌謡が記されてゐたのである。紀伊の熊野を訪ひ、高野山に上り、比叡の山を攀ぢて大原の聲明道場に分け入つて、其のノート収録の歌謡に再校合を爲さうとした其の門出に、此の厄難に遭逢したのである。大正の大震災を天譴として考へてゐた私は、これが一種重大な鑒戒であるべきを感じて、淋しい心を抱いて西に向つたのであつた。ボーイによつて車中のどこからか發見せらるべきを希ひ、車外に運び去られたにしても、ノートだけは人目につき易い地に投ぜられよかしく祈つたが、共にかひなき望に終つたのであつた。

けれども佛天の加護か人恵か、失つたものの過半は此の旅に於て獲得せられた。就中痛恨事とした懷空僧都の「教化之文章色々」が大原の祕庫の中より、近く天保十三年中に大原所住の覺秀によつて謄寫された一本が見出された時には、雀躍と抃舞とを禁じ得なかつた。懷空は平安朝時代の人（寛治二年寂）、御堂關白の法成寺でも導師を勤めた其の教化の文をば、人である。此の人によつて朗唱せられた教化の文はそれ〴〵年代が明記されてゐる。私は鎌倉の初世、元久三年三月廿八日の奥書のある横綴の冊子から抄録したのであつた。それは來迎院舊藏の貴重書であつた。此の尊むべき書は不可解の事情よりして行方不明となり、再び寓目しかねるものとして痛歎したのであつたが、それが

不十分ながらも謄寫されてゐたのであつた。死兒再生以上の歡喜で月餘の哀愁が一時に消え去つたのであつた。ノートの盜難に同情された東京上野東漸院筑土鈴寛さんは私の爲に此の冊子を影摹し更に東坂本の叡山文庫に就いて私の爲に多くの新材料を發見してくれられた。華王院の多紀道忍さんも所藏の歌謠を貸與してくれられた。高野山では親王院の水原堯榮僧正と大山公淳さんが私の爲に眞言家の讚と教化とを示してくれられた。こゝに失はれたものの大半は再び手に入つたのであつた。さうして私はそれを今活字版として世に提供することを身の幸慶とするのである。教化は前述の如く、四句が基本にして、此の形のものを片句といひ、四句二聯のものを諸句といふ。而して十二句又はそれ以上から成るものに對しては、別に何句と稱へざるもの如くである。基本の四句に就きて見るに、特に結句を長文ならしめて、聲調の上に莊重の趣を添へることに意を用ひてある。

教化の最も古きは天台宗法華八講所用の「昔ノ大王ハ……」で、行基の作だとして傳へてゐる。これに次いで天台大師供教化であり、教化集としては前記の教化之文章色々を擧ぐべきである。共に歌謠史の中に説き明かして、あれば改めて此處には述べないこととする。

沙彌戒導師教化は眞喜律師の詞として太上法皇御受戒記に載せてあるものである。東大寺に於て圓融法皇が御受戒になつた時の作だらうかといふ。すれば寛和二年三月の作といふことになる。

東寺修正作法教化は歌謠史の中にも略述したが、勸請の句は錫杖の誤りではないかと考へられる。佛名導師作法教化、修正作法裏書の教化、共に東寺寶菩提院藏であるが、前者の「船若ノ船……」云々は高貴に對して用ひるの料、後者はすべて修二會の教化らしい。

往生講式教化は禪林寺永觀の作、彌陀禮讚の法會に用ひたものである。承曆三年六月十日に始めたものらしく、講式第四段の念佛門が終つて後、來迎讚として朗唱したものである。第二「ミナヒトヲ」の歌は千載和歌集に「往生講

式かきはべりける時、教化の歌よみ侍りける」といふ詞書をして收めてあるもの。

御影供奉師教化、無常導師教化、龍女教化の三は覺鑊上人(康治二年寂)の作、龍女教化は殊に名高く、其の始めは今様形であつたものが、結句を延ばして教化體に改造されたものである。

佛名會教化は天台宗で用ひたものらしい。形の整然としてゐる所より見れば、永く佛名會に使用せられたものであらう。作の年代は明かでない。

建春門院御念佛結願教化、表白集(續群書類從所載)によれば、「安養遠ト雖モ」以下を缺き、次に事由として表白があり、次に六種といふ次序で、樹提後蘭云々の教化がある。それとこれと何れが古いか判じ難い。

羅漢供次第教化は蓮入坊湛智の作、文中「本願ノ遠忌」又は「先師ノ追善」とあれば、羅漢供を修して先師の追善作業とした時の作となすべきであらうか。

羅漢供教化、作者は不明。建久三年正月云々の奥書以下も筆跡が同一であるので、書寫した人が任意に書足したものであらうといふ。原本は大原蓮成院の藏。

八祖銘教化、壽永三年八月の奥書があつて、醍醐成賢自筆の文集中に載せてあるもの、龍猛・龍智・金剛智・不空・善無畏・一行・惠果・弘法の八祖に對する讚歎である。眞言列祖表白集に比べると、弘法の分だけが違ふので並べて擧げることとした。次の弘法大師御影供奉教化も亦成賢自筆の文集に見えるものである。

上清瀧論匠教化は醍醐(眞言宗)の恒例三十講論義に用ひたもので、宣詮と云ふ人が此の役に當つたらしいが此の人の年代が明かでない。表白集から推して鎌倉中期のものとするべきであらうか。

仁和寺百部最勝王經供奉教化、表白集によれば、仁和寺の座主(?)が釋迦の像を圖繪せしめ、一門の淨侶に百部千軸の眞文を書寫せしめた時のものらしく、鎌倉中期よりは少しく遡るものであらうか。次に配列した數篇には奥書が

あり、又作者らしき者の名が見えてゐるので敢てそれを解説中には加へないこととする。

大師講法則所載教化、大師は弘法を指すものであらう。朗詠要抄に

釋尊在世ノ昔、アハザルコトヲ鷲峰ノ雲ニウラムトイヘドモ、慈氏下生ノトキ速證ヲ龍華ノ月ニ期セント思フ。とあるを少しく改めたものである。通常の教化體の敘述でないことが、これによつて會得せられるであらう。

播州法華山所用初夜導師教化、七ケ日の間、日夜勤める修正會に、初夜と後夜との導師は別で、其の初夜の分のみを擧げたのがこれであるらしい。珍しい式法で、第一夜に導師が教化二種の句頭を取り、衆僧は次第音をとる。三種の目からは次座の者が句頭を取り、導師及び衆僧が次第音をとる。さて第二夜から第六夜に至る迄、導師先づ教化一種の句頭を取り、次は次座が句頭を取つて、第七夜には第一夜の如くにするものである。教化の文章にさしたる特長もないが、眞言祕密の言葉によそへて物をいふのが非常に面白い。二日の夜の分以下にある「眞言々々々々」は「眞言祕密ノ言ヲバ」であり、「七ケ夜々々々々」は「七ケ夜ヲ勤玉フ諸徳大法」である。

曼供誦經導師作法教化以下導師作法教化二十八種に至る迄の諸篇は、應永の前後より徳川の初世に至る間に作り出されたものらしく、何れも眞言宗の所用だが作者も時代も明かでない。次の後柏原院一周聖忌御經供養教化以下は括弧の中に示してあるが如く、年代が知られてゐる。

第三訓 伽陀

これに就いては特にいふべきこともない。たゞ聲明口訣所載の五首が全く今様形で、梁塵祕抄卷二に載せてある、法文歌の類と更に異らぬこと、及び法隆寺所用の「極樂淨土ノ東門ハ」の歌は同上書に極樂歌として載せた六首の一であることは述べて置きたい。又「雪ツキ氷解クル」は新選朗詠集の所載で、中書王自筆法華經願文中の句である。

現に曲調の遺存する朗詠の中では、これが最も古調を傳へてゐるはしまいか、佛前法樂の爲に用ひた朗詠が、爾後反復せられて、やはり訓伽陀の一つとなつたものと私は考へる。

第四講 式・聲 歌

之を加へた所以は既に説いた。此所には六道講式と順次往生講式に就いて少しく解説を下すだけに止めるであらう。天台の諸講式中最も注意すべきものは二五三昧式である。淨土宗の和讃の曲節も此の中の十二禮から生れたものらしいといふ。而して之を約めれば六道講式となるのである。六道講式は慧心僧都の作、地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六道の苦の相を敘したもので、文も曲も妙境に達して深く人を感動せしめるものである。

順次往生講式は長西目錄によれば叡山の眞源の作で、永久二年の奥書のあるものがあるといふことである。それを文治二年に信玄といふ人の寫したものが智恩院に傳はり、それを萬延元年に松影道人徹定の摹刻させたものが稀に世に傳つてゐる。これには専らそれによつた。式を九段に分けて段毎に舞樂や催馬樂の曲に欣求淨土の意の歌を合せて謡つてあり、歌謡史料としての價値は此處に存するのである。詳しくは日本歌謡史に就いて御覽を願ふ事にした。極樂聲歌は順次往生講式の中の和語の歌謡を抽出してかう名づけたのである。重複の嫌はあつても、かう題して一冊子となつて寶愛せられてゐるので特にそれを收めることにしたのである。稱名寺所傳教化も極樂聲歌の類で、これに酷似したものが大原にあつて、やはり魚山系統のものらしいとのことである。

六座念佛式は六座に分けて念佛を修し、西方往生を期するもので、第三座から第五座迄に和讃のある處が珍しい所である。空也集とあるが、勿論後世の作で、台徒の手に成つたものではないかと思ふ。全く参考の資に供するものである。

第五 和 讚 雜 集

諸種の和讃集に載せたもので、作者も時代も不明なもの、又は古讃集より後に作成されたやうに思はれるものを集めてかう題したのである。江戸時代の中世に作られたものも勿論あるが、或は古讃集に繰上ぐべきものがないとも限らないのである。總じては卑俗味に墮したものもあるが、佛生會又は涅槃會に用ひたと思はれる釋尊景慕の讃、淨土教主阿彌陀佛の讃、及び淨土教義に關する讃乃至は觀音・地藏等の菩薩に關するものなどを主として載せる事にした。右の外鉢扣和讃の系統に立つものとして考へたい讃、すなはち荆萱道心や中將姫、さては敦盛や葛の葉梅若丸松蟲鈴蟲道成寺、降つては八百屋お七等をうたつたものも輯めてある。幽玄妙寂の境から煩惱冥妄の心地迄取つて以て材としてある此の讃の上に、我等が感得すべきことは又二三四五に止まらぬであらう。

第六 順 禮 歌

順禮歌即ち御詠歌の最も古いものは西國三十三番順禮歌であるべく、その起原や歌の固定等に關しては既に日本歌謡史の中に述べた。これには他に四國八十八ヶ所以下のもの總計十三類を聚めて載せたが概ね作の年代も作者も明かでない。但御詠歌の曲節なるものは古今大差なきものの如く、歌詞よりも曲調が人を動かしたことは争へぬ事實だと思ふ。固より地方によつて少差は存する。例へば東北地方のは緩やかで尻下りで、長州地方のに類し、東京附近のは硬きに過ぎ、大阪のは軟くて陽氣で伊勢音頭でも聞くやうだと評する人もある。中部の名古屋地方のは硬軟の中間に立つて聞きよいと品評する人も尠くない。此等の評は其の人の好惡に基くので俄に定め難いが、近代世に喜ばれたものは香海節と稱するものである。これが分れて京都節・名古屋節・甲州節となつて居り、又半ば香海節に成れるものを半海節と呼んでゐる。而して香海の名は時宗の香海上人が創めた曲調を襲用するが爲であらうといふ説もある。此の人は嘉曆二年に入寂したのであれば、此の説に従ふ者は更に、遡つて平安朝時代の法文歌・神歌殊に靈驗所歌等が

民衆化いな外來曲が大和民族化せられて遂に彼の御詠歌ぶしなるものが出來したと考ふべきであらう。此の節の古きを守ることは否むべくもなく、伴信友等が早くよりさう考へ且つ記してゐるのである。

附けていふ御詠歌類には謠ひ訛りがあつて古形を見出すことは容易でない。殊に西國順禮歌がむづかしさうであるが、此處には享保三年の西國三十三番順禮縁起によつて掲げた。自然卷六の「淋敷座之慰」の所載とは一致しないが、あゝもかうも謠はれたのである。

第七 補 遺

原稿整理後に入手したものに對してかう名づけた。又寒念佛和讃以下は信州の飯島花月さんから提供して下されたもので、極めて世俗味に富む面白いものが多い。

本卷原稿の作製校合等は多く東京下谷上野東漸院筑土鈴寛さんが當つて下されたことを明にして置く。又終に臨んで、此の卷の成立に力を頒けて下された法隆寺管長佐伯定胤師、比叡山專修大學教授多紀道忍師、高野山親王院の水原堯榮師、紀州道成寺小野廣海師、故人になられたお方では天台座主梅谷孝成師、大原寶泉院の瀧本深達師、此の方々に對して、ここに深厚の謝意を表するものである。僧侶でない私が此の集をなし得たのも、半ばは上記の方々の御援助によつたのである。

昭和三年五月

高野辰之しるす



古

讚

集



古讚集 (新編)

一 百石讚歎

1 叡山所傳(奈良之同シ)
百石ニ八十石ソヘテ給ヒテシ、
乳房ノ報イ今日ゾワガスルヤ、今
ゾワガスヤ、
今日セデハ、何カハスベキ、
年モ經ヌベシ、サ代モ經ヌベシ。

2 高野山所傳

百石ニ付八十石ソエテ
タマイテシ、乳母ノ報
今日ゾ ワガスル
イマゾ 我 スル
今日セデハ 何カハスベキ
年ハ經ヌベシ 狭夜モヘヌベシ
返様(二反日ハ音頭計)
今日セデハ 何カハスベキ

年ハヘヌベシ 狭夜モヘヌベシ

附 厚恩贊

先考ノ恩ハ 高キ山彌
盧モ喩ニ ヒキキ報
今日ゾ我スル イマゾ我スル
今日セテハ 何カハスベキ
年ハ經ヌベシ 狭夜モヘヌベシ
返様(是ヨリ反音ハ百石讚ノゴ
トシ)

今日セデハ 何カハスベキ

年ハヘヌベシ 狭夜モヘヌベシ

報恩

荷恩之謝啓日夕ニ
臆ニ響キ盡モ間無キ報

師恩

師徳ノ謝難キハ付無數ノ
恆沙モ喩エ無キ報
此後ハ百石厚恩ノ如ク

今日ゾ我スルヨリ

3 三寶繪詞所載

百石に八十石添へて
給ひてし乳房の報い
今日せずばいつかわがせむ
年はをつさよは經につつ。

4 拾遺和歌集所載

百くさに八十くさそへて給ひてし
乳房のむくい今ぞわがする。

二 法華讚歎

法華經ヲ我ガ得シコトハ。薪コリ
菜ツミ。水汲ミ。仕ヘテゾ得シ。
仕ヘテゾ得シ。

法華經をわがえしことは薪こり菜つ
み水くみ仕へてぞ得し。(拾遺和歌集
三寶繪詞)

三 舍利讚歎

慈覺大師作

佛ノ御舍利ハ

同音 遇フコト難シヤ
敬フコト難シヤ。
一度モ遇ヒテ誠心ニ禮メバ
惡趣ヲゾ永ク離ルルヤ。
淨土ニゾ早く生ルルヤ。
無量劫ヲ經シカドモ
未曾ニモ遇ハザリキ。
今日ゾ我ガ遇ヘル。
今日ゾ禮ミ奉ル。
見ル人聞ク人悉ク
近モ遠モ諸共ニ、
佛ノ道ニ入りハテヌ。
聖ノ位ニ定マリヌ。
釋迦如來照シ給ヘ。

聖主世尊ノ誠

(初段)

同音 人ノ身得ルコト難シヤ。
佛ノ御法ヲ聞クコト希ナリヤ。
生レ難キ人ト生レテ
空シク過サムガ悲シサ。
遇ヒ難キ御法ニ末和比テ
徒ニ廢レムゾ悔シキ。
寶ノ山ニ昇ル人
手ヲ空シク歸ラジチヤ。
法ノ庭ニ遇ヘルモ
於保呂介ノ契ニハ非ジチヤ。
深キ智慧コソ巨カラメ
淺キ功德營マム。
筵篋ノ調べ笙ノ音
眞如ノ御法ニ違ヘジャ。
傾クル首擧グル袖
密印ノ教ニ合ヘムヤ。

香ノ煙ハ設ヒ細クトモ

法界ノ空ニ匂ハム。

花ノ色ハ縦ヒ淺クトモ

十方ノ菌ニウツサム。

一ツノ色一ツノ匂

何レカ中道ニ背カム。

龜キ詞軟キ詞

併勝義ニ改メム。

現在諸佛照シ給ヘ。

當來導師鑒ミ給ヘ。(中段)

六度ノ中ニ勝レタル

(同音) 布施波羅密勤メヤム。

智慧波羅密習ハムヤ。

衣ハ眼ノ前ノ色チヤ

財ハ身ノ後ノ助カハ

惜ミテ施サヌ輩

貧リテ貯フル類コソハ

樂ミ盡クル時ニハ

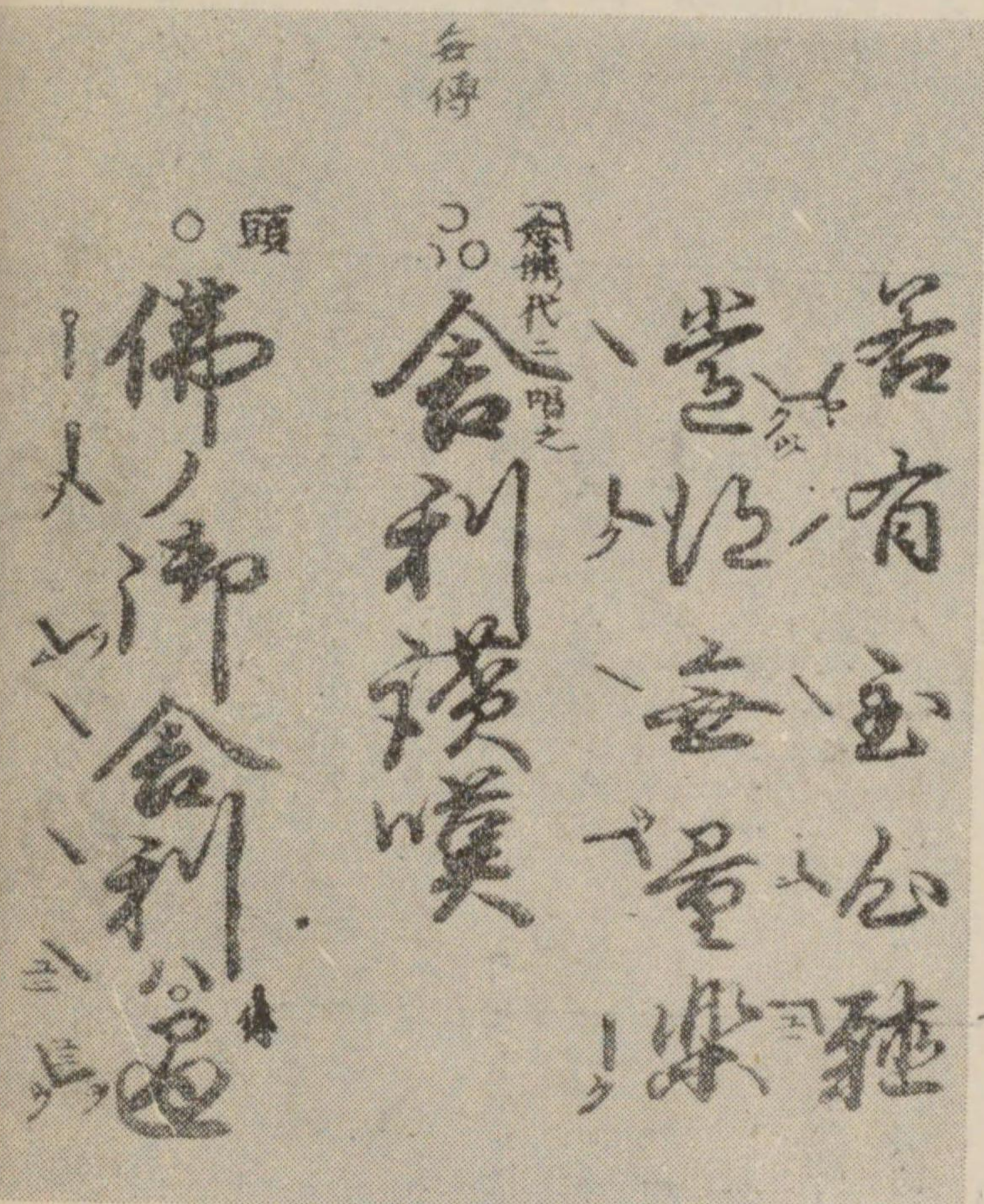
即ち苦ミ替ル者ヲヤ。
冷シト思ヒシ衣モ
熱鐵ノ服ト身ヲゾ燒ク。
甘シト思ヒシ味モ
熱鐵ノ丸ト舌ヲ燒ク
適 惡趣ヲ免レテ
纔ニ人ト生レテ
ハ
寒ク裸ナル形困
シヤ。
貧シク賤シキ宅
悲シヤ。
施シテ惜マヌ諸
人ハ
目ノ前往未相兼
ネテ
衣ハ夏冬妙ナリ
キ。

寶ハ内外ニ豐ケリヤ。
遂ニ凡身ヲ離レテ
永ク佛ノ位ニ登レバ
法身ノ瓔珞ハ際モナシ。
淨土ノ莊嚴盡キモセズ。
今日ゾ我が施ス。

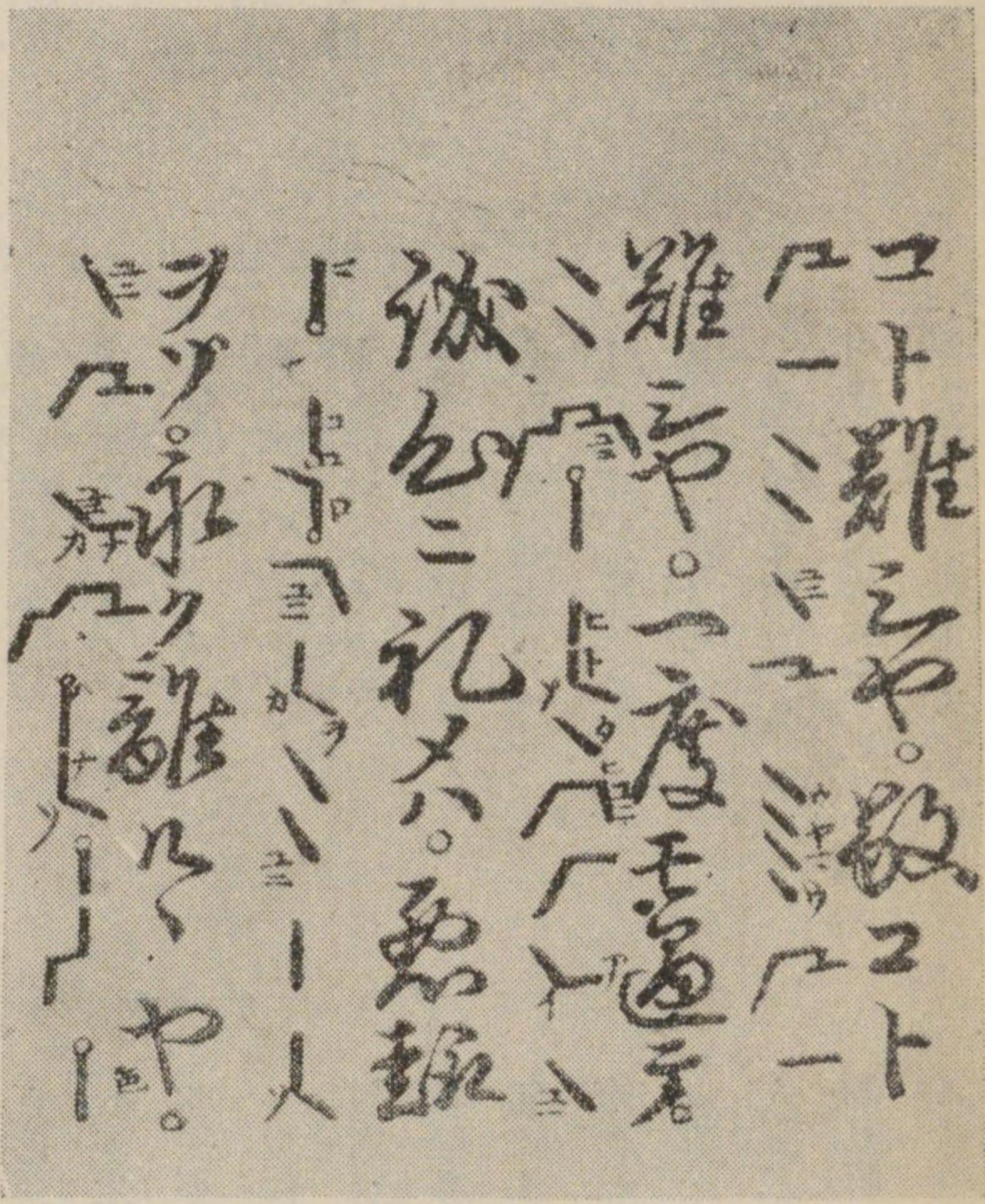
四
今日ゾ我が惜マヌ。
三世ノ如來照シ給ヘ。
十方ノ淨土收メ給ヘ。(後段)

四註本覺讚

歸命本覺眞法身
常住妙法心蓮臺
三身萬德備リテ
三十七尊住給フ
心法本ヨリ無レ形
内外處々ニ非ネドモ
胸間ノ方寸ニ
阿梨耶識ト名ケタル
流來生死ノ昔ヨリ
分段輪廻ノ今マデニ
介爾刹那ノ物ナデテ
綿綿タル事年久シ



是心即チ如來藏
恒沙ノ功德充滿リ
五道生死ニ回レドモ
無垢清淨無レ双
或ハ月ト觀ズレバ
五種ノ三昧成ズナリ
或ハ鏡ニ譬レバ
三諦相即顯レヌ
一念有ニ非ネドモ
三千性相分レタリ
又是無ニ非ネドモ
一法トシテ不レ可レ得
其性非有非無ニシテ
不レ動是中道ナリ
三千忘ジ存セルチ
假ニ名ケテ空假トス
内體三千空假中
毘盧遮那遍照智



迷ヘバ石木異ナレド
悟レバ氷水一ナリ
可レ知心性外ナクテ
萬法皆是法海
乃至一色一香モ
ナラザル中道一物ゾ無。

己界思ヘバ自ラ
佛界衆生不レ遠
一念實相不レ隔バ
三無差別可レ知
妙法蓮華ト云レ之
佛ノ出世ノ本意ナリ
衆生本有ノ理ヲ指テ
一佛乗ト説給ヘ
四味兼帶ノ前ノ教
雙林拈捨ノ後ノ教
一期ノ縱横苟クモ
己心中ニ納メタリ
我身ハ薄福底下ニテ
浮囊破レテ海深シ
佛乘緣ヲ不レ結バ
何ヲカ出離ノ本トセム
圓融妙境暫クモ
心ヲ發ス緣有バ

阿鼻ノ炎ノ中ニテモ
佛ノ種トハ萌テム
己身ノ佛願クバ
無縁ノ大悲ヲ垂給ヘ
若人欲了知
三世一切佛
應當如是觀
心造諸如來。

五 極樂國彌陀和讚

千觀阿闍梨作

娑婆世界ノ西ノ方
十萬億ノ國スギテ
淨土ハアリツ極樂界
佛ハキマス彌陀尊
七重行樹カゲ清ク
八功德水池スミテ
苦空無我ノ波唱ヘ

彌陀ニハツカヘ奉レ
望ノ位春ノ夢
樂シミサカエ水ノ泡
ハシリ求メテナス程ニ
我身三途ニ落チヌベシ
三途ニ入りト入りヌレバ
無量劫ニモ出デガタシ
適々人ノ身ヲ受ケテ
榮花ノ望マタフカシ
凡ソ輪廻ノ際無キハ
此事一ツニヨリテ也
彌陀ノ誓ノ無カリセバ
我等ハ浮ム時ナケン
釋迦牟尼佛此由ヲ
説キ置キ給ハズナルナラバ
多クノ生死過シキテ
長夜ノ闇ニ迷ヒナム
歸命頂禮釋迦尊

常樂我淨ノ風吹キテ
天ノ音樂雲ニウツ
黃金ノ沙地ニシキテ
晝夜六時ニ迎ヘツツ
寶ノ蓮雨フリテ
孔雀鸚鵡聲々ニ
妙法門ヲトナフレバ
衆生聞クモノオノヅカラ
佛法僧ヲ念ズナリ
佛ノ光キハモナク
聖ノ壽ハカギリナシ
誓ハ四十八大願
心一子ノ大悲悲ハ
十惡五逆謗法等
極重最下ノ罪人モ
一タビ南無ト唱フレバ
引接サダメテ疑ハズ
淨土十方オホケレド

五濁惡世ノ能化ノ主
大悲我等ヲ捨テズシテ
三途ノ苦ミヌキ給フ
歸命頂禮彌陀尊
極樂界會ノ能化ノ主
タトヘ罪業重クトモ
引攝カナラズ垂レ給ヘ

六 天台大師和讚

惠心僧都作

歸命頂禮大唐國
天台大師ハ能化ノ主
佛ノ使ト世ニ出テ
一乘妙法宣給フ
眉ハ八字ニ相分レ
目ニハ重瞳相浮ミ
妙慧深禪身ヲ嚴リ
佛ニ殆ト近カリキ

極樂ワレラ縁フカシ
佛三世ニ在セド
彌陀ハ我等ニ契アリ
一日二日ノ眞心ニ
彌陀ノ御名ヲシ唱フレバ
大悲ノ誓アヤマタズ
九品蓮臺サダマレリ
生レ生ルル人ハミナ
菩提不退ノ菩薩衆ハ
一生補處ノ其中ニ
算數モ算ヘ知りガタシ
我等ガ此身樂シマム
彌陀ノ誓ニ救ハレテ
來世ハ蓮ノ上ニシテ
此身ハ聖ヲ友トシテ
人身フタタビ受ケ難シ
佛教値フ事稀ナルニ
ミナ人心ヒトツニテ

嬰兒ノ間ノ瑞相モ
人ヨリ異ニ御座テ
臥テハ必ズ合掌シ
居テハ定テ西ニ向ク
生年七歳ナリシ時
好デ寺ニ詣ヅレバ
諸僧口ニ授ケシニ
普門品ヲゾ以テセシ
一度聞コト得テシカバ
永ク不レ忘成ニケリ
殘リハ教人無クテ
獨リ暗ニゾ悟リニキ
長沙ノ佛ノ御前ニテ
大弘願ヲ發シテゾ
比丘ト成テハ正法ヲ
荷負セムトハ誓テシ
佛ヲ禮拜セシ程ニ
風ニ夢ノ如クニテ

定光菩薩招テゾ
向後變テ教ケル
年は十八ナリシ時
果願寺ニテ出家シ
二十歳ニ至リテゾ
具足戒ヲ受給フ
禪慧心ニ深ク染ミ
師友ヲ尋ネ訪フト
大蘇山ニ攀登リ
南岳大師ニ見シニ
昔ハ靈山淨土ニテ
同ク法華ヲ聞シカバ
宿緣朽チセズ此ニ又
來レル也ト宣給フ
即チ普賢行法ヲ
教テ令レ修セ給ヒシニ
二七日ニ至リテ
法華三昧得給ヒシ

一 一回リテ見給フニ
昔ノ夢ニ異ナラズ
即チ定光菩薩ノ
室ヨリ北ニ地ヲ占テ
木ヲ植エ菴ヲ造テゾ
初テ安坐シ給ヒシ
其後華頂峰ニシテ
後夜ニ座禪シ給フニ
天魔ハ種種惱セド
降伏シ給ヒ終リニキ
明星漸ク出ル程
胡僧形ヲ現ジテゾ
自行化他ニ今ヨリハ
影向セントハ誓テシ
其時菜色相現ジ
僧衆縁ニ隨ヘバ
宣帝是ヲ聞召シ
勅命俄ニ降リテ

受法ノ大師ニ相代リ
金字ノ大品講ゼシニ
三三昧ト三觀智
是計ヲゾ問受シ
文字ノ法師百千萬
力ヲ合テ尋ヌトモ
辯才海ハ盡モセズ
說法最モ第一ナリ
晝夜ニ流瀉シ給ヒテ
瓦官寺ニシテ八箇年
法華ヲ弘宣シ給フニ
梁陳舊徳皆ナ來ル
一日朝儀ヲ止テゾ
王侯相將集リテ
語默ノ益ヲ蒙者
濟濟トシテ有シカド
徒衆轉々多クシテ
自行ニ障ヲ成シカバ

始豊縣ノ貢ヲバ
衆ノ費ニ充テ給フ
兩戸ノ民ヲ除テゾ
薪水ニ役シ給ヒケル
淨名經ヲ講ゼシニ
砌ノ前ニ山現ジ
峰ニハ瑠璃映徹リ
谷ニハ琳瑯敷キ滿リ
梵僧數十手毎ニ
香爐擎テ出來ル
子雄奔林ナリシカバ
山ノ麓ノ巨海ニ
黎民漁繁ケレハ
髓骨積リテ岳トナル
蠅蛆ノ鳴聲雷同シ
水性哀ム而已ナラズ
船人危ミ多ケレバ
慈悲ヲ回シ給ヒテ

陳ノ大建七年ニ
生年三十八ニシテ
宣帝留メ給ヘドモ
天台山ニ入給フ
其山嶮ク高クシテ
一萬八千丈餘ナリ
回リハ八百餘里ニシテ
八重一ガ如ナリ
東ハ蒼海遙ニテ
蓬萊方丈遠カラズ
西ニハ長山連テ
人無キ境ニ入給フ
石橋度テ虹ノ如ク
瀧水落テ布ヲ引ク
鳳鳥鸞鳥飛翔リ
銀地金地ニ分レタリ
白道猷ガ古キ室
王子晉ガ本ノ跡

衣物ヲ拾テ買取シ
滿潮瓦リテ三百里
簞築合テ六十所
一時ニ法流ト成テコソ
流水品ヲバ講ゼシニ
財施法施ノ功德ノ
限り有事無ケレバ
昔ノ野生池ヨリモ
是ヲゾ勝テ覺シケル
陳ノ太子永陽王
獵シテ馬ヨリ落給フ
殆ド絶ニ及程
觀音懺ヲ行ゼシニ
梵僧眼ニ見エシカバ
痛ム處モ息ニケリ
因レ茲テ生生ニ
大師ニ仕ムトハ云シ
大極殿ノ裏ニシテ

仁王般若ヲ講ゼシニ
諸僧勅ヲ蒙リテゾ
激難鋒ヲバ競ヒケル
論議ハ冬ノ氷ニテ
峨峨ト結テ堅ケレド
解コト夏ノ日ニ似テゾ
赫赫トシテ消ニケル
主上讚啼シ給ヒテ
起居ニ三度ゾ禮シケル
大師ノ名譽ハ是ヨリゾ
彌彌天下ニ充滿リ
隋帝齋會ヲ設テゾ
菩薩戒ヲバ受給フ
美名ヲ大師ニ奉ル
智者トハ是ヨリ申ナリ
所有ノ施物六十種
一ツモ留メ給ハズテ
悲田敬田ニツニゾ

分テ還シ給ヒケル
生年五十七ニシテ
摩訶止觀ヲ説キ終リ
一夏ノ間ニ敷揚シ
朝暮ニ時ニ慈注ス
止觀一部ハ大師ノ
己心中ノ法ナレハ
法華ヲ人ニ知セムト
名字ヲ替テ説ルナリ
大師ハ素ヨリ泉石ヲ
好テ隱居シ給ヘド
陳隋ニ帝相續キ
請ジ下シ奉ル
凡ソ十二年ヲ經テ
舊居ニ歸リ給フ程
人跡久ク絶テコソ
竹樹林トハ成ニケル
山ノ半ニ到ル程

俄ニ沙門相逢リ
眉髮髭モ白クシテ
逡巡テゾ隱レニキ
一時月ノ夜靜ニテ
人ト語フ氣色アリ
胡僧ニ度現ジテ
終ヲ告ルニ成ニケリ
隋帝頻リニ請ゼシニ
山ヨリ下リ給フ程
石城寺ニ到リテゾ
遷化ノ庭トハ宣給フ
最後ノ說法シ給フニ
辯才常ヨリ妙ニシテ
聽者涙ヲ流シテゾ
憂ノ海ニハ沈ミケル
十二不生十法界
四教三觀四悉檀
四諦六度十二緣

一一法門相攝ス

智朗禪師ガ問シカバ
位ハ第五品ニシテ
觀音來迎シ給ヘバ
淨土ヘ往トゾ宣給フ
其年生年六十歳
隋ノ開皇十七年
中冬二十四日ノ
未ノ刻ニゾ失給フ
其時風雲相騒ギ
艸木低レ水咽ビ
沙羅雙樹ノ昔ニモ
相劣ラジトゾ悲シ
龕ヨリ外ノ十日ハ
道俗拜ミ奉ル
容顏變ズル事無クテ
身ヨリ汗ヲゾ流シケル
遠忌ニ至ル時毎ニ

龕ヲ開テ拜スレバ

堯眉舜目美シク
髭髮生テゾ御座キ
齋ノ庭ニテ數フレバ
千ニ獨ゾ餘リニキ
名字ヲ呼テ點ズレバ
本ノ數ニ異ナラズ
凡ソ大師ノ一生ノ
所作ノ行業多ケレド
多クノ功德ノ其中ニ
少ノ功德ヲ是言ヘバ
造レル寺ハ三十五
寫セル經ハ十五藏
金檀畫像十萬軀
度セル僧衆ハ四千人
傳教學士ハ三十人
修禪學士ハ充滿リ
凡ソ五十餘州ノ

道俗其數知リ難シ

大師ノ德行量リ無シ
一言讚ルヲ縁トシテ
三會ニ必ズ值遇セン
七 天台大師畫讚 顏魯公文
天台大師俗姓陳
其名智顛花容人
隋煬皇帝崇ニ明因
號爲ニ智者ニ誠敬申
師初孕育靈異頻
綵烟浮レ空光照レ隣
堯眉舜目觀若レ春
禪慧悲智嚴ニ其身ニ
長沙佛前發ニ弘誓ニ
定光菩薩示ニ冥契ニ
悅如ニ登レ山臨ニ海際ニ
上指ニ伽藍ニ畢ニ身世ニ
東謁ニ大蘇ニ求ニ眞諦ニ

智同_二靈山聽法偈_一
得_二宿命通_一辨無礙
旋陀羅尼華三昧
居常向_レ西化在_レ東
八載瓦官閣_二玄風_一
敷_二演智度_一發_二禪蒙_一
梁陳舊德皆仰宗
遂入_二天台華頂中_一
因見_二定光_一符_二昔夢_一
降魔制_レ敵爲_二法雄_一
胡僧開_レ道精感通
又有_二聖賢垂_二秘旨_一
時平國清即名_レ寺
贖得魚梁五百里
其中放生講_二流水_一
後主_二三禮形庭裏_一
請爲_二菩薩戒弟子_一
煬皇出鎮臨_二江溪_一

金城說_レ會求_二制止_一
香火事訖迺西旋
渚宮聽衆踰_二五千_一
建_二立精舍_一名_二玉泉_一
橫_二瓦萬里_一皆稟緣
煬皇啓請回_二法船_一
非_レ禪不_レ智求_二弘宣_一
遂著_二淨名_一精義傳
因令_二徐柳參_二其玄_一
帝既西朝趨_二象魏_一
師因東還遂_二初志_一
半山忽與_二沙門_一遇
俄頃遂巡復_レ翰秘
一時月夜如_二論議_一
初夢_二塔壤_一胡僧至
又爲_二南嶽_一說_二三智_一
自言必當_レ終_二此地_一
帝十七年歸_二江都_一

遣_レ使奉_レ迎師北徂
山下規畫爲_二寺圖_一
王家所_レ辨事不_レ孤
石城天台西門樞
正好_二修觀_一形勝殊
像前羯磨依_二昔符_一
寄_二帝如意華香爐_一
第五法師階位絕
觀音下迎彰_二記荊_一
萬行千宗最後說
跏趺不_レ動歸_二寂滅_一
天雲泱泱風慘烈
草木低垂水嗚咽
十日容顏殊不_レ別
遍身流_レ汗彰_二異節_一
欲_レ歸_二佛華西南峰_一
泥濘載_レ塗那可_レ從
門人灑懇祝_二辟容_一

應_レ手雲開山翠濃
于嗟此地瘞_二僧龍_一
空餘_二白塔_一間_二青松_一
每_レ至_二忌辰_一國命重
何時僧俗不_二懂懂_一
歲歲開_レ龕儼_二容質_一
最後如何忽_レ亡失
齋場數_レ僧千賸_一
呼_レ名點之又如_レ實
受_レ殮行_レ嘯還復溢
迺知神靈_二叵_一談悉_一
千變萬化難_レ致_レ詰
若欲_レ書_レ之無_二終畢_一
止觀大師名法源
親事_二左溪_一弘度門
二威灌頂誦_二師言_一
同稟_二思文_一龍樹尊
寫照隨形殊好存

源公瞻禮心益敦
俾_二余讚述斯討論_一
庶幾億載垂_二後昆_一
(天台霞標)

八 極樂六時讚

(後出淨業和讚卷上を見よ)

九 來迎和讚
惠心僧都作

攝取不捨ノ光明ハ
念ズル處ヲ照スナリ
觀音勢至ノ來迎ハ
聲ヲ尋テ迎フナリ
娑婆ヲバ可_レ厭
厭ハバ苦海ヲ渡ナム
安養界ヲバ可_レ欣_{ナガフ}
願ハバ淨土ニ可_レ生

草ノ菴_{イホリ}ノ靜ニテ
八功德池ニ心澄
夕ノ嵐無_レ音テ
七重行樹ニ渡ナリ
臨命終ノ時至リ
正念不_レ違テ向_レ西
傾_{カクベ}頭ケ合_レ手セ
彌ヨ淨土ヲ欣求セム
聞ハ西方界ノ空_{ソラ}
伎樂歌詠風カナリ
見バ綠ノ山端ニ
光雲遙ニ輝ケリ
是時心安クシテ
念佛三昧現前シ
毫光我身ヲ照シツツ
無始ノ罪障消滅ス
光雲漸ク近付テ
瞻仰スレバ彌陀如來_{セシガク}

相好圓滿シ給ヒテ
金山王ノ如クナリ
鳥瑟高ク顯レテ
晴シ空ニ綠ナリ
白毫右ニ旋テ
眉ノ間ニ輝ケリ
管絃歌舞ノ菩薩ハ
雲ニ袖ヲ翻シ
持旛供華ノ莊嚴ハ
信風テ亂レタリ
觀音勢至諸薩埵
光ノ中ニ充滿リ
各々威德顯レテ
聲聲行者ヲ贊給フ
眼ニ滿ル慈悲ノ色
落ル涙モ不レ止
耳ニ聞ユル法ノ聲
歡喜ノ心幾ソ

六通三明悟得テ
心ノ如ク自在ナリ
上ハ有頂ノ雲ノ上
下ハ無間ノ底マデモ
苦海ノ群類悉ク
利益普ク施セリ
願クバ彌陀觀世音
行者ノ誓ヲ愍念シ
大悲誓願誤ラズ
來迎引接垂給ヘ
願クバ此ノ功德ヲ
普ク衆生ニ施シテ
同ク心ヲ發シツツ
安養國ニ往生セム
上來功德
回施法界
自他平等
減罪生善

即チ紫雲變變テ
柴ノ宿ニ起旋リ
恒沙ノ衆會諸共ニ
前後左右ニ下給フ
菴ノ上ニハ諸化佛
星ヲ連ネテ影向シ
苔ノ庭ニハ諸聖衆
光ヲ竝テ長跪セリ
伎樂ノ菩薩モ是時ニ
踊躍歡喜安カラズ
絲竹ノ調雲ヲ分
徘徊妝地ヲ照ス
時ニ大悲觀世音
漸ク歩ミ近ヅキテ
紫磨金ノ軀ヲ曲テ
蓮臺傾寄給フ
次ニ勢至大薩埵
聖衆同時ニ讚嘆シ

臨命終時
面見彼佛
共生極樂
速證菩提

(天台覆經)

一〇二十五菩薩和讚

惠心僧都作

歸命頂禮極樂ノ
五五ノ菩薩ノ御誓
念佛受持ノ輩ヲ
臨命終ニ至テゾ
音樂異香ノ瑞ヲ爲
迎給ゾ頼モシヤ
觀音薩埵ノ蓮臺ハ
我等衆生ヲ乘給フ
勢至菩薩ノ合掌ハ
定慧不二ノ表示ナリ

大乘智慧ノ手ヲ伸テ
行者ノ頭ヲ摩給フ
輪回生死ノ舊里
是時永ク隔リヌ
即チ金蓮臺ニ乘リ
佛ノ後ニ隨ヒテ
須臾ノ間ヲ經程ニ
安養淨土ニ往生ス
昔ハ大悲ノ利益ヲ
纒ニ傳聞シカバ
今ハ彌陀ノ引接ヲ
心末末ニ蒙レリ
然ルニ彌陀ノ淨土ハ
快樂不退ノ處ニテ
壽命無量ニ長ケレバ
樂盡ル事ゾ無キ
三十二相具リテ
莊嚴端正殊妙ナリ

藥王菩薩ノ幢旛ハ
不老不死ト翻ガヘス
藥上菩薩ノ玉旛ハ
住行向地ノ階位アリ
普賢菩薩ノ幡蓋ハ
恒順衆生ト指掛ル
法自在王ノ華鬘ハ
攝取不捨ノ功德アリ
師子吼菩薩ノ亂拍子
下化衆生ト踏給フ
陀羅尼菩薩ノ舞ノ袖
上求菩提ヲ勸ナリ
虛空藏ノ腰鼓
能滿福智ノ音高シ
德藏菩薩ノ笙ノ音
十八不共ノ響アリ
寶藏菩薩ノ笛ノ聲
三解脱門ノ風冷シ

金藏菩薩ノ等ノ琴
三十七尊現前ス
金剛藏ノ琴ノ絃
十界一如ト響ナリ
光明王ノ琵琶ノ撥
無明ノ迷ヲ驚カス
山海慧ノ筵蔭ノ緒
寂靜眞如ノ理ヲ示ス
華嚴王ノ鈺ノ音
唯心法界澄ワタリ
衆寶王ノ擊饒ハ
一佛乘ヲ讚歎ス
月光王ノ振鼓ハ
十方世界ヲ響カセリ
日照王ノ羯鼓ハ
四土寂光ト打鳴ス
三昧王ノ天華ハ
虛空海會ニ散亂ス

冬寒氷ヲ結ドモ
溫和ノ春ハ水トナル
無明ノ法味異ナレド
悟レバ其體一ナリ
谷ヨリ流ル春ノ水
峰ヨリ下ス秋ノ風
叢茂ル草木モ
毘盧ノ身土ニ不異
嶮ヲ疊ル巖石モ
常寂光土ニ無レ隔
黃金白銀淨土ニモ
釋迦ノ分身御座ト
諦緣生ヲ法トシテ
不レ説ニ法華一國ナレバ
三世ノ諸佛ノ淨土ニモ
一乘教迹弘レル
此山勝レテ覺エタリ
阿閼佛土ハ歡喜國

定自在王ノ太鼓ハ
平等大會ノ響アリ
大自在王ノ華幢ハ
畢竟空ト指聳ユ
白象王ノ寶幢ハ
第一義天翻ヘス
大威徳王ノ曼珠ニハ
無漏說法圓ナリ
無邊身ノ燒香ハ
如來ニ供養シ奉ル
唯願クバ彌陀如來
弘誓ノ中ノ我等ナリ
五濁惡世ニ罪深シ
憐レ超世ノ悲願ニテ
臨終正念親タリ
來迎引接ナシ給ヘ
其佛本願力
聞名欲往生

淨土ノ莊嚴妙ナレド
男女ト俱ナル國ナレバ
此ノ山彼土ニ勝タリ
知足天ニハ慈氏尊ノ
可度ノ衆生ヲ調テ
逗機說法多ケレド
一乘一味ノ色ナラズ
補陀落山ニハ觀自在
平等大會ノ室ナレバ
三八大河岸回リ
凡類輒ク難レ攀
清涼山ニハ一萬ノ
菩薩眷屬圍饒シテ
文殊ノ說法妙ナレバ
凡下ノ見ヲ隔ケル
但シ我等ノ大權現
一乘法華ヲ擁護シテ
末代惡世ニ弘レル

皆悉到彼岸
自致不退轉

(天台露標)

一一 山王和讚

惠心僧都作

法宿華臺聖眞子
三聖一如ノ山ニ棲ム
三身即チ一身ノ
佛也トゾ示シケル
東西楞嚴三ツノ山
僧徒ハ三千常ニ住ム
身佛衆生三ノ法
界如三千具ヘタリ
緣ノ空ニ月澄ハ
中道諦觀圓ナリ
大虛ニ霞鏡變ハ
眞如ノ觀慧靜ナリ

大悲方便難レ値
歸命頂禮大權現
今日ヨリ不レ捨ニ我等一テ
生生世世ニ擁護シテ
阿耨菩提ト成給ヘ

(天台露標)

一二 彌陀如來和讚

覺超僧都作

歸命頂禮彌陀如來
此界有緣ノ佛ナリ
今西方ニ御座テ
衆生ヲ攝取シ給ヘリ
本願慈悲ノ深キ故
三界流轉ノ衆生ヲバ
深ク憐ミ給ヒテゾ
四十八願誓タテ
本願光明無レ限ク

普ク世界ヲ照ツツ
 念佛衆生ヲ攝取シテ
 不レ捨誓ゾ難レ有
 情ヲ思ヒ連ヌルニ
 我等モ佛性具足シテ
 佛ニ不レ別身ナレドモ
 隨緣眞如ノ波起テ
 三界生死ノ阿羅海ニ
 果シ無レ際キ浮沈
 末法濁世ノ衆生故
 三毒熾盛ノ業ノ火ハ
 日日夜夜ニホコリツツ
 火宅ノ焰ニ焦レ身ス
 慳貪邪見ノ山高ク
 煩惱業苦ノ海深シ
 皆是三塗ノ業ノ種
 哀レ拙キ我等カナ
 人人我身ヲ思カシ

正ク魂獨行キ
 猛火ニ入ム悲サヨ
 劍ノ林暗シテ
 心ノ鬼ニ引レ行
 況ヤ地獄ノ數々ハ
 叫喚焦熱無間獄
 八寒八熱奈落伽
 一百三十六地獄
 責ヤ苦患ノ有サマハ
 具ニ説バ血ヲ吐ム
 月日壽命ノ長キ事
 人間世界ノ年月デ
 一十四億四萬歲
 地獄ノ一日一夜ナリ
 積レ之デニ千歲
 衆合地獄ノ壽命ゾヤ
 阿鼻ニ至リテ一中劫
 罪狀受苦ハ千倍ゾ

此世限ノ我身カヨ
 此世ガ有バ未來アリ
 佛ニ成モ我身ナリ
 地獄ニ落モ我身ゾヤ
 心一ノ所爲ニテ
 苦ニモ樂ニモ逢身ゾヤ
 一念慈悲ヲ生ズレバ
 其身其ママ神佛
 一念邪見ノ起時
 其身其ママ夜叉羅刹
 胸ノモユルハ地獄ナリ
 貪欲愚痴ハ餓鬼畜生
 阿鼻ノ依生モ極聖モ
 四聖六凡悉ク
 此一念ノ所造ナリ
 是ヲ唯心造トハ云
 情ヲ無常ヲ觀ズレバ
 世界モ我身モ無常ナリ

カカル苦患ヲ思ヒ遣
 菩提ノ道ニ進ベシ
 心留ルナ娑婆穢土ニ
 偏ニ淨土ヲ願フベシ
 常ニ阿彌陀ヲ念ズレバ
 無量ノ罪ヲ滅ツツ
 此世モ安ク後ノ世ハ
 必ズ淨土ニ生ルルゾ
 其臨終ノタニハ
 空ニ音樂奏シ連
 超世願王彌陀如來
 五五ノ聖衆ト諸共ニ
 光ヲ放テ迎ヘ給フ
 刹那ヲ不レ隔生レ行
 既ニ彼土ニ生レテハ
 漸ク如來ノ授記ヲ受
 即チ此土ニ歸來テ
 苦海ノ衆ヲ可レ救

羊ノ步死ゾ近シ
 無常ノ風ノ誘ナヘバ
 今宵ヨリモ明日ヨリモ
 何ナル病引受テ
 前後東西不レ辨
 熱病苦痛身ニ逼リ
 正念忽カキクレテ
 顛倒錯亂身ヲモダヘ
 其ママ命ヲ終ナバ
 如何往生可レ遂ヤ
 定テ惡趣ニ沈ナム
 不思苦キ旅路ゾヤ
 三塗ノ大河ニ溺身ノ
 四出ノ山路ニ向フ時
 恩愛深キ父母モ
 昵ビ親キ妻モ子モ
 慳ミ積リシ財寶モ
 一モ隨フ物アラズ

廣ク甘露ノ門開キ
 無上ノ法輪轉ジテハ
 四聖六凡諸共ニ
 彌陀ノ御國ヘ可レ歸
 虚空法界盡ルトモ
 我此願ハ盡セマジ
 十方三世ノ佛法僧
 俱ニ證明ナシ給ヘ
 (天台霞標)

一三 舍利講式和讚
 永觀律師作

娑羅林中圓寂塔
 三世の諸佛悉く
 非滅なれども滅ありと
 示現し給ふ處なり
 拘尸那城には西北方
 拔提河には西のきし

娑羅双樹の間にて
純陀が供養を受たまふ
菩薩賢聖天人衆
十方界より飛び來り
供養海雲みちみちて
十二由旬隙もなし
世間本より常なくて
是をぞ生死の法といふ
生をも滅をも滅しをへ
寂滅なるをぞ樂とする
一切衆生ことごとく
常住佛性備はれり
佛は常に世にゐます
實には變易ましまさず
二月十五の朝より
是等の妙法説きをへて
漸く中夜に至る程
頭を北にて伏し給ふ

精進波羅密帆ヲアゲテ
妙吉祥尊楫ヲ取り
解脱ノ風ニゾマカスベキ
無明住地ノ長キ夜ニ
妄想顛倒夢フカシ
發心菩提ノアカツキチ
イヅレノ程トカ思フベキ
一念剎那ノイサギヨキ
心ワヅカニ發スニゾ
法性眞如ノ山ノ端ニ
毗廬ノ光リハ見エ給フ
金銀瑠璃ノ寶塔ヲ
恒沙ノ數マデ立テナメテ
鈴鐸幡蓋カザルトモ
終ニハ塵トゾ成リヌベキ
無上菩提ノ心ヲシ
須臾剎那モ發セレバ
月日カサネテ終リニハ

娑婆の一化は此時に
永く隔たり給ひにき
梅檀煙盡をへて
舍利を分ちて去りにき
惠日已に暮をへて
生死の長夜は暗ふかし
いかなる便を得てしかば
輪廻の里を離るべき
如來證涅槃
永斷於生死
若有至心聽
常住無量樂 (四座講法則)
一四 菩提心讚
珍海已講

佛ノ悟リトナリヌナリ
皆人ハゲミテシバラクモ
無上道心オコスベシ
此タビハカナク過シナバ
イヅレノ時トカ思フベキ
無數ノ劫ヲバ送レドモ
佛ノ御法ハキキガタシ
此世ニアヘルハアサマシキ
浮木ノ龜トゾオモフベキ
五道生死ノ間ニハ
思ヒ捨ベキ人モナシ
鐵城泥犁ノ底ニシテ
猛火ノ焰ニ身ヲ焦シ
阿防羅刹ノ前ニ伏シ
答ノ下ニテナキサケブ
寒氷地獄ノ谷ノ底
ハゲシキ氷ニ閉ラレテ
溫和ノアタタカナル空モ

皆是文殊教化力
聞ケバワレラガ身ノ内ニ
眞如佛性ソナハレリ
大聖文殊ノヲシヘニテ
心ノハチスタ開クヘシ
善財童子ノ遊ビシモ
覺城娑羅ノ林ニテ
文殊ノヲシヘテ聞キテコソ
初メテ心ハオコイシカ
安養下品ノハチスニテ
觀音大悲ノ聲ヲ聞キ
無上道心オコセルモ
ナホコレ文殊ノ力ナリ
オモヘバ生死ノ海フカク
煩惱惡業波タカシ
泥洹道ノカノ岸ニ
イカニシテカハ到ルベキ
妙法蓮華ノ船ニノリ

寒ク悲シキメテゾ見ル
飢饉餓鬼ノ城ニシテ
久シク飯食名モキカズ
畜生互爲殘害モ
オボロケナラネバ免レス
オホヨソ人中天上モ
生老病死ゾ充滿ル
コレラノ多ノ苦シミチ
受クルハムカシノ親子也
イカニモ方便メダラシテ
生死ヲ度サント思フベシ
ワレラハ底下ノ身ナレドモ
大悲心ヲココロトセン
著提心トハコレヲイフ
瞿支ガカキコノ鳴ケル聲
佛ノチカヒトコレヲイフ
龍子ノ七日ニオコス雲
發心畢竟ニ無別

如是一心先心離
自未得度光度他
是故我禮初發心

願以此功德
普及於一切
我等與衆生
皆共成佛道

大治三年歲次戊申八月六日 沙門

珍海書記

文永五年戊辰五月十九日 校合畢

(菩提心集)

一五 智證大師和讃

少納言藤原通憲作

歸命頂禮前入唐
智證大師贈法印
清和光孝陽成ノ
三朝ノ國師ナリ
悉達太子ノ蹤ヲ追

勅宣下リテ弘マリキ
爾時大師奏聞シ
三井ニ唐坊建給フ
百六十年行ヘル
生身彌勒ノ付囑得テ
園城寺ニテハ勅ニ依リ
宗叡僧正灌頂シ
仁壽殿ニハ詔ヲ承ケ
王臣入壇初リキ
金光明ノ齋會ニハ
身子迦旃ヲ拉シキ
清涼殿ノ決疑ニハ
護法清辨物トセズ
熊野山ヲ攀シ時
道路迷ヒテ不知程
八咫ノ鳥飛來リ
道ヲ示スゾ奇特ナル
權現三所ノ實前ニ

十九出家シ給ヒテ

檀特山ノ風傳ヘ

山林苦行十二年

承和五年冬ノ月

大聖明 王感見シ

嘉祥三年春ノ夢

山王渡唐ヲ告給フ

文德天皇宣下シテ

入唐求法被レ許キ

唐ノ大中七年ニ

嶺南道ニ着ニケリ

天台山ニ登テハ

大師ノ聖跡禮拜シ

清涼ニ望テハ

文殊ノ靈地ヲ巡禮シ

長安洛陽廻ツツ

勝地名跡場ヲ蹈ミ

西天唐土ノ師ニ遇テ

一乘八講修セシカバ

松蠟扇ヲ押披キ

神感實ニ甚シ

財施ノ幣帛ノ妙ノ色

醍醐ノ妙味ノ稀ノ聲

和尚ノ恩德不レ限ラ

門弟必ズ憐ママム

西山松尾大明神

詞ヲ通ジ問答ヘ

東門中心天王寺

最勝講ヲゾ始メ置ク

陽成天皇敬ヒテ

法眼和尚ニ令レ敍セ

亭子天子貴ヒテ

天台第五ノ座主トシテ

二十餘年戒授ケ

園城第二ノ貫主ニテ

三十二年法弘ム

梵文漢語ヲ究タリ

良諤和尚ノ開元寺

一乘心蓮華開ケ

法全閣梨ノ青龍寺

五瓶智水雨灑ク

南嶽天台送身塔

無畏不空影像院

石像石橋見ハタシテ

銀地金地モ修行シキ

顯教密教學トテ

在唐凡ソ六箇年

自宗他宗昔無キ

經論章疏千餘軸

歸朝ノ波ニハ新羅國

權化ノ善神影嚮ス

清和天皇元年ニ

大師歸朝シ給テ

新渡ノ法門千餘軸

一切經論三箇遍

大乘小乘鏡ミ瑩ク

諸尊傳法二百人

三部三密珠孳リ

五百餘人髮ヲ剃リ

三千餘人戒授ケ

王臣道俗歸敬シテ

德行天下ニ充滿ル

千里萬里ハ掌ロ

門弟怪ミ問シカバ

金剛薩埵ノ告ト演フ

良諤ノ遷化ヲ遠ク見テ

鐘ヲ鳴シテ諷誦シキ

元璋禪師ガ去シ日ハ

聲ヲ擧テゾ悲泣スル

圓載入唐セシ剋ハ

涙ヲ流シテ悲シビキ

特ニ此等ヲ聞シ人

驚キ怪ビ疑ヒキ

後ノ日宋人告シニヅ

一事モ不違信ヲ取ル

寛平三年冬ノ天

生年七十八ニシテ

十月二十九日ニヅ

大涅槃ニハ入給フ

其時十方世界ノ

菩薩聖衆室ニ滿チ

天ノ音樂雲響キ

定印結テ滅ニ入ル

圓寂ノ後第二日

三衣ノ枕ヲ替シカバ

大師頭ヲ擡ゲシニ

門弟涙ヲ流ケル

延長五年冬ノ季

靜觀僧正奏聞シ

天皇勅宣シ給テ

必ズ汝ガ弟子タラン

大師此詞肝ニソミ

喜ビ悲シミ交ハリテ

胸ヲサクガゴトクナリ

此事銘ニ記シ置キ

歸朝傳持ノ始メニハ

即身成佛諍ヘバ

遮那ノ莊嚴現前シ

威光遙カニ耀ヤケリ

六天無尋ノ法門ハ

意ノ内ニ明ラカニ

四萬不離ノ實相モ

眼ノ前ニアラハレヌ

此時萬乘禮ヲナシ

諸宗旗ヲナビカシテ

兩部祕密ノ教行ハ

一朝ニコソハ滿ニケレ

明神擁護シタマヘバ

大師號ヲ被レ下キ (天台霞標)

一六 弘法大師和讚

櫻町中納言(藤原成範)作

大師ハ遮那ノ應化ニテ

内證位高ケレド

遍照御名ヲ示現シ

名用十方ニミチノテ

鷲峰在世ノハジメニハ

釋尊所説ノ法ヲキキ

鶴林涅槃ノ後ヨリハ

舍利ヲ傳ヘテ生ヲ度ス

或ハ薩埵ニ隨ヒテ

三密瑜珈ノ教ヲ受ケ

或ハ普賢ノ願ヲナシ

萬應化度ノ誓ヒアリ

懷妊其日ハ天竺ノ

聖人ナリト夢ニツゲ

三鉢ヲ松ノ上ニミル

古佛ノ靈地ナルユエニ

五尺ノ寶劍堀出ス

ヤマ高ク空ハレテ

月輪觀モ修シ安シ

峰ハ八葉ニ分レタリ

花臺ノ聖衆影向シ

此故庵ヲ結ヒツツ

金剛峰寺ヲ草創シ

佛法漸ク弘マリテ

禪行ノ床靜カナリ

承和二廻ノ春ノソラ

三月三五ノ日ヲ迎ヘ

門徒ノ人々集メツツ

宣フ事コソ哀ナレ

今ハ深ク定ニイリ

其ホド兜率天ニユキ

慈尊出世ノ曉キニ

幼稚ノ時ノ遊ビニハ

四王現ジテ蓋ヲサス

出家受學ノハジメニハ

三乘五乘ノ法ヲ幾々

後ニハ不二ノ理ヲタヅネ

遮那ノ秘傳ヲ得給ヘリ

大唐青龍寺ニ至リ

傳法瀉瓶ヲハリテヅ

和尚スナハチ入滅ス

爾時示シテノ給ハク

汝知レルヤ昔ヨリ

我トチギリノフカクシテ

五ニ師資トナリシコト

唯一兩度ノミナラズ

宿緣限リ有ケレバ

密藏底ヲ極メテキ

此故前ニ世ヲ去リヌ

今ハ東土ニ生レユキ

昔ノ跡ヲ訪ハン

我ガ恩徳ヲ忘レズバ

衆生利濟ノ願ヲナシ

密教常ニ傳持シテ

努々歎ク事ナカレ

此遺戒ヲキク人ノ

イカニ別レテ惜ケン

末ニテ想像タニモ

涙モ更ニセキアヘズ

其後二十一日ノ

曉深ク定ニイリ

奥ノ院ノ苔ノ下

石ノ室ニゾ入タマフ

三密加持ノチカラニテ

分段身ヲアラタメズ

顔色昔ノゴトクニテ

金剛其體アラタナリ

我等宿運拙ナクテ

末ノ世ニシモ生來テ
其粧ヲ徒ラニ
拜見セザル事ゾウキ
但シ妄想雲アツク
應化ノ影ヲ隔
ツトモ
心想空ノ清ケ
レバ
法身月ノ常ニ
スム
死字不生ノ妙
體ハ
煩惱菩提異ナ
ラス
眞言究竟ノ極
説ハ
凡夫賢聖一ツ
ナリ

思ヘバ我等ガイニシヘニ
何ナル契リヲ結ビテカ
大師ノ法流授カリテ
過去ノ宿善クチセズバ
三密觀行オコタラズ

二六
來世ハ淨土ニ往詣シ
一切衆生ヲ利益セン
若人專念遍照尊
一度參詣高野山
無始罪障道消滅
隨願即得諸佛土。

敬白
極樂願往生歌

いもろの花を摘みては西方
の彌陀に供へて露の身を悔い
ロクロクニメクリアフトモノ
リノミチヲエテオコナヘサカ
ノコロコロ

一七 極樂願往生歌

敬白
極樂願往生歌
イロイロノ花ヲツミテハ西方
ノミチニツナヘテツユノミチ
クイ
いろいろの花を摘みては西方
の彌陀に供へて露の身を悔い
ロクロクニメクリアフトモノ
リノミチヲエテオコナヘサカ
ノコロコロ

ろくろくに廻
り遇ふとも法
の道絶えて行
へ釋迦のこの
ころ
ハカナシヤコノ
ヨノコトナイソ
クトテミノリノ
ミチヲシラヌワ
カミハ

はかなしや此
世の事を急ぐ
とて御法の道
を知らぬ我身
は

ニハカニモチコ
ナヒタツトアタナラシタタコクラ
ノコトヲオモフニ

にはかにも行ひ立つと徒ならじ只極
樂の事を思ふに
ホトモナクヨルヒルミルニアカヌカ

いもろの花を摘みては西方
の彌陀に供へて露の身を悔い
ロクロクニメクリアフトモノ
リノミチヲエテオコナヘサカ
ノコロコロ

ナチテモサメテモサカミタノカホ
ほどもな 夜晝見るに飽かぬかな寢
ても覺めても釋迦彌陀の顔

ヘシトサハアタナルツユノヨロツヨ
チコノミチステテノリヲコソオモヘ
經しとさは徒なる露の萬代を此の身

彌陀頼まるゝなり
利を知りて念ふ願の違はずば一念阿

ヌルコトハタタコクラクノコヒシサ
ニユメニミムトテチキモアカラヌ

寝る事は只極樂の戀ひしさに夢に見
むとて起きも上がらぬ

ルリノタマカケテカカヤクコクラク
ノホトケノスカタユメニノミミル

瑠璃の玉懸けて輝く極樂の佛の姿夢
にのみ見る

ヲトニキキココ^回ヲツクスコクラク
ノチカヒタカフナツユノワカミチ

音に聞き心を盡す極樂の願違ふな露
の我身を

ワタツミノソコノイロクツミナナカ
ラスクハムコトヲチカフアミタワ

綿津見の底のいろくづ皆ながら救は
むことを願ふ阿彌陀わ

カスカナルトコロトキケトコクラク
ヲチカフワカミハチカクイタルカ

幽かなる處と聞けど極樂を願ふ我身

ウシヤウシイトヘヤイトヘカリソメ

ノカリノヤトリタイツカワカレウ
憂しや憂し厭へや厭へ假初の假の宿
をいつか別かれう

キテモタチワカミチステテコクラク
ノカタトオモヘハミチヲノミトキ

居ても立ち我が身を捨て、極樂の方
と思へば道をのみ問ふ

ノトカニハサラニオモフナウロノヤ
トイソキテユカムアマタフノミノ

長閑には更に思ふな有漏の宿急ぎて
行かむ阿彌陀佛のみの

オモヒテモナキフルサトソサカミタ
モコタヒナミセソフルノスミカオ

思ひ出も無き古里ぞ釋迦彌陀もこた
ひな見せそ古の住處お

クラケレトサカノヒカリノアカリニ
テノリノミチニハマトハテソユク

つれもなき人の心を見るからに厭ふ
我身も露に譬へつ

チテモマタチキテハニシニムカヒキ
テコクラクチカフワレカシノヒチ

寝ても又起きては西に向ひ居て極樂
願ふ我が忍音

ナニコトモイハレサリケリツミノミ
ハツユノワカミチナケクワサカナ

何事も言はれざりけり罪の身は露の
我が身を歎く業かな

ラセチ鬼ノヲソレハワレニアラシカ
シサカノミマヘニイソクココ、ラ

羅刹鬼の恐れは我にあらじかし釋迦
の御前に急ぐ心ら

ムラサキノクモノタナヒクオホソラ
ニサムカクスルハタレムカフラム

紫の雲の柳引く大空に散樂するは誰
れ迎ふらむ

見ゆやとぞ問ふ

コクラクハココロカラニテキラハレ
スクチニアミタフタツナフシトコ

極樂は心からにてきははれず口に阿
彌陀佛絶つなふしとこ(臥床か)

エラフトモミニハフサウソナハレハ
ツヒニハタレモホトケトソミエ

選ぶとも身にはふさう(此の句一字
脱せり)備はれば遂には誰も佛とぞ
見え

テチスリテニシニムカヘハサカミタ
モイソキテヨトソユメトシメシテ

手を摩りて西に向へば釋迦彌陀も急
ぎてよとぞ夢と示し

アチキナキヨトハシラスヤカリノヤ
トナカキスミカトアタニオモフア

あぢきなき世とは知らずや假の宿永
き住處と徒におもふあ

サツキヤミクラキホトタニワヒシキ
ニマシテヨミチヲオモフカナシサ

五月闇暗き程だに侘しきにまして冥
土を思ふ哀しさ

キキシヨリノリノミチコソワスラレ
ネオモフアマリニワレヒトリナキ

聞きしより法の道こそ忘れぬ思ふ
餘りに我れ獨泣き

ユメニタニミマクホシサニコクラク
ノヨルヒルヌレハマトロメハミユ

夢にだに見まく欲しさに極樂の夜晝
寝ればまどろめば見ゆ

メモアハスカリノヤトリヲウチステ
テイツチユカムツケヨカシユメ

目も合はず假の宿を打捨て、何處へ
行かん告げよかし夢

ミラステテノリヲモトムルトモカラ
ハツヒニハミタノコクラクニスミ

終入滅△△仰願者安置隨身若干佛
經王等之中△□□三千佛九萬七千

八十九基銀塔同法花□典仁王經等各
不誤本撰願而極園淨因令往生給數年

之佛經供養之目錄前△々記別畢然則
閻魔之應善法△△記札文置相違哉乎

敬白
康治元年壬戌六月廿一日壬午日

一八 慈慧大師和讃

寶池房證眞作

歸命頂禮比叡山

慈慧大師ハ降魔ノ主

圓宗弘通ノ大士ニテ

論議決擇新ナリ

慈覺智證ノ兩門ニ

顯密學ニ秀タル

高僧多キ其中ニ

身を捨て、法を求むる輩は遂には彌
陀の極樂に住み

シテノヤマナケキテコユトキケトミ
ナメニミヌヒトノコ、ロチロカシ

死出の山歎きて越ゆと聞けど皆目に
見ぬ人の心愚かし

エニウツシチカヘヤチカヘホトケタ
チニシヘヤニシヘアケヨナモコエ

繪に寫し願へや願へ佛たら西へや西
へあげよ南誤聲

ヒスカシノコ、ロチロカノヒトハミ
ナタタコクラクチノチノヨニコヒ

歪かしの心愚かの人ば皆只極樂を後
の世に乞ひ

モユルヒチアツシトオモフヒトハミ
ナムナシキカラハハヒトナルミモ

燃ゆる火を熱しと思ふ人は皆空しき
骸は灰となる身も

大師ニ過タル人ゾ無キ
母儀祈請ノ夢アリテ

天ト空ト仰ツツ
日光懐ト見玉ヒテ

胎内ニハ宿玉ヒニキ
竹馬ノ幼稚ノ當初ハ

田野ニ遊タマヒシニ
天蓋現ジテ指掩ヒ

瑞相殊ニ不思議ナリ
生年十二ノ初登山

理仙供奉ノ室ニ入
螢雪窓ヲ占テコソ

本覺院ニハ住タマフ
幼學ナリシ稟承ニ

一ヲ示ニ十ヲ知
神童ノ名ヲ得給ヒテ

才智殊ニ勝タリ
三密一乘諸トモニ

セチニタタコクラクチカフワレナレ
ハチハラムトキハホトケキタラセ

切に只極樂願ふ我なれば終らむ時は
佛來らせ

スヘテミナホトケノコトヲオモフヒ
トツヒニハノリノミチニマトハス

すべて皆佛の事を思ふ人遂には法の
道に惑はず

別和歌
ヒマモナクココロニカクルコクラク

ノナナイソカシキミチチシラヘ□
隙もなく心に懸くる極樂の尙急がし

き道をしらべ
敬白

極樂願往生和歌序云
蓋聞和歌者佛神道衰後世菩提叶給道

也其三十一字之和歌數四十八行注連
偏後世菩提懸意家中往生之地穴諸命

稽古ノ珠ヲ磨ツツ
三千學侶ノ其中ニ

法燈トコソ仰ガルル
基増已講ト云シ人

維摩ノ講師ヲ遂ケルニ
左中辨ノ勅使ニテ

論議ヲ番ヒ行フニ
大衆ノ中ヨリ選マレテ

南都ノ義昭ト番ツツ
彼ハ耆年ノ宿學

大師ハ八臘二十四
義昭モ一雙痛ケリ

衆徒モ是ヲ憤リ
論議ノ場ニ臨ム時

惡僧器杖ヲ帶シテゾ
出仕ノ道ヲ遮ギリシ

所作訛謬若有バ
杖罰加ムトゾ云シ

大師ハ更ニ不レ怖シテ
義昭ト鋒ヲ争フニ
言ハ泉流ノ如クニテ
智慧辯才無窮ナリ
大會ノ讚歎聲々ニ
天地モ動ズル計ナリ
惡僧器杖ヲ抛テ
過テ悔テゾ歸伏セシ
決擇底ヲ窮ムレバ
義昭モ色ヲ失ヘリ
是ヨリ彌名ヲ揚テ
北京南都ニ獨歩セリ
清涼殿ノ内ニシテ
法藏無性ノ義ヲ成ズ
大師問者ニ替リツツ
皆成佛トゾ述タマフ
法藏理窟極マリテ
後日ノ論談明セシニ

三塔九院ノ講演モ
此時多ク始マレリ
廣學堅義ノ大業モ
其跡今ニ不レ絶シテ
朝家ノ勅使ニ及マデ
大師ノ興行トコソ聞
戒光口ヨリ出シカバ
慧心ノ僧都ノ驚キシ
冥官權者ト告シカバ
明普阿闍梨モ給仕セシ
慈悲ノ利物厚シテ
一山老少悉ク
達近親疎ノ無レ隔
惠テ施シ給ヒケル
化縁ノ薪盡シカバ
生年七十四歳ニテ
寛和元年正月ノ
第三日ニゾ失タマフ

大師其日ノ講師ニテ
論說更ニ無窮ナリ
御修法ノ中檀大阿闍梨
龍顏近就玉ヒシニ
正ク不動ノ御體トゾ
圓融院ハ御覽セシ
本地ヲ聞バ觀世音
苦海ヲ渡ス船師ナリ
弘誓深如海ト説
金言誰カ疑ハム
日光天子ト顯レテ
下界ノ迷暗除ケリ
八大龍ノ其一ツ
一味ノ雨ヲ降シケル
大師ハ義昭ト法藏ト
右丞相ノ歸依ノ體
三光天子ノ化現トゾ
人ノ夢ニハ見タリシ

興法寺ノ禪房ニ
紫雲早ク變改シテ
來迎引接アリシカバ
淨土ニ赴キ玉ヒニキ
法燈光納マリテ
彌迷徒ハ悲ミシ
天子ハ德ヲ崇テゾ
慈悲ノ謚ヲ贈ラレシ
忌日ヲ迎ヘ毎月ニ
門徒ハ昔ヲ慕ヒツ、
横川ノ聖跡ウチ掃ヒ
報恩講ヲゾ始ケル
滅後ノ應驗新ニテ
墳墓ヲ御廟ト名ケル
三千學徒ノ譽ルコト
末代彌盛ナリ
信力深キ類ニハ
加護ノ巨益ヲ施シキ

師檀ノ契深カリキ
權者互ニ談ジテゾ
三昧院ヲバ建ラレキ
二百餘歳ニ絶タリシ
官位ハ至極ノ大僧正
行基菩薩ノ古ノ
權化ノ跡ヲ踏玉フ
法務兼帶多ケレド
大僧正ニハ初ナリ
輦車ハ希代ノ重事ニテ
祖師遍昭ノ跡トカヤ
興法利生六十年
率土ニ法水潤ヘリ
治山紹隆十九歳
佛法此時盛ナリ
堂舍社壇ノ造營モ
此代上古ニ超過セリ

魔海ノ障礙ヲ祈ニハ
降魔ノ勝利新タナリ
一山三塔而已ナラズ
洛中洛外邊土マデ
面面影ヲ寫シテゾ
門門毎ニ安置セリ
内證位ヲ尋ヌレバ
十信具足ノ初隨喜
滅後ノ威勢ヲ振テゾ
護法ノ大將トハ成シ
大師一期ノ德行ハ
其數既ニ多ケレバ
言語争カ及ブベキ
來世ノ値遇ヲ頼ベシ
今日和光ノ結縁ニ
因ル我等ハ悉ク
八相成道ノ砌ニハ
必ズ一處ニ至ルベシ (天台霞標)

一九 涅槃和讚

源空上人作

歸命頂禮釋迦尊
 十方恆沙諸世尊
 兼併對帶諸法門
 菩薩聲聞諸大衆
 五十二類啼泣等
 我等甘心ヲ哀ミテ
 所作ノ功德ヲ増給ヘ
 心ヲシヅメテ往昔ノ
 儀式ヲ思ゾ哀ナル
 如來五濁ニ出給フ
 難化ノ衆生ヲ誘キテ
 機縁薪盡ヌレバ
 漸ク滅ヲ告給フ
 跋提河ノ西ノ岸
 沙羅雙樹ノ下ニシテ

種々ノ御法ヲ説ツレド
 末代惡世ノ衆生ノ
 不信ノ身コソ悲ケレ
 紫金ノ胸ヲ顯シテ
 重テ大衆ニ告給フ
 汝等心ヲ治ツツ
 最後我身ヲ見ベシト
 大衆涙ヲ押ヘツツ
 合掌恭敬尊重シ
 目暫モ不レ捨シテ
 最後ノ妝ヒ拜見シ
 今ヲ限ト思フニゾ
 一會ノ心ハ久禮ニケル
 爾時世尊順逆ニ
 超越三昧シ給ヘリ
 自ラ金ノ棺ニ入り
 滅盡三昧修シ給フ
 面ヲ西ニムカヘツツ

紫金ノ妝 阿志岐ナク
 頭北面西シ給ヘリ
 時ニ人天悲歎シテ
 佛ニ白テ言サク
 如來滅シ給ヒナバ
 我等ハ長夜ヲ如何ニセム
 如來大衆ニ告給フ
 我コソ滅ヲ唱フトモ
 法界等流ノ教法ハ
 生死ノ長夜ヲ照スベシ
 滅度ヲ 悲事ナカレ
 常在靈山ナルベシト
 漸ク初夜ニナリシカバ
 萬億恆沙ノ諸大衆
 狗尸那城ニ充滿テ
 十二由旬猶セバシ
 大衆各悲シミテ
 心ニ思ヒロニイハク

右ノ御手ヲ敷給フ
 青蓮華眼閉ヂ
 面門光衰ヘテ
 即チ眠ルガ如クシテ
 終ニ入滅シ給ヘリ
 釋迦念佛
 時ニ廬頭大尊者
 悲歎ノ聲ヲ舉ツツ
 十二由旬ニ充滿ル
 衆會ニ告テ悲シマク
 大覺世尊ハ只今ゾ
 事切ハテ給ヒヌト
 大衆尊者ノ音ヲ聞
 各各大地ニ倒レ臥
 或ハ金ノ棺ヲ見テ
 佛ノ御前ニ消入ヌ
 或ハ大河ニ身ヲ投テ
 波ニ交ハル人モアリ

我等ガ宿緣深シテ
 佛ニ相ルヲ悦ビテ
 兼テ別ヲ思ニゾ
 宿緣還リテ恨ナル
 梵音聲ヲ聞ク事モ
 三十二相ヲ見ル事モ
 今夜ヲ限ト思ニゾ
 涙隔テ物見エズ
 釋迦念佛

漏刻シツツ押移リ
 漸ク中夜ニ成シカバ
 如來牀ヨリ立給フ
 普ク大衆ヲミソハナシ
 青蓮華ノ眼ヨリ
 慈悲ノ涙ヲ流シツツ
 跋提雙樹ニ充滿ル
 衆會ニ告テ言ハク
 我世ニ出デテ化ヲシメテ

或ハ衣ヲ佐岐捨テ
 威儀ヲ忘ルル人モ有
 或ハ手ニ手ヲ合セツツ
 大地ニ倒ルル人モ有
 或ハ聲ヲアゲツツ
 佛ヲ呼ブ人モアリ
 或ハ多布佐ヲ拔ステテ
 虚空ニ奈久流人モ有
 或ハ音モ不レ出シテ
 坐禪ノ牀ノ如クナリ
 或ハ涙モ不レ落シテ
 醉ル者ノ如クナリ
 或ハ自ラ手ヲ爾伎利
 合掌踞跪ノ如クナリ
 或ハ叫デ山ニ入り
 或ハ泣泣野邊ニ出
 羅睺羅ハ佛ノ後ニテ
 解脫ノ袂ヲ志保流事

則手母ニ別レタル
 少奈岐者ノ如クナリ
 阿難尊者ハ地ニ伏シテ
 死タル者ノ如クナリ
 六恆河沙ノ國王ハ
 國ノ位ヲ忘ニキ
 七恆河沙ノ夫人ハ
 金ノ多麻岐ヲ拔捨テテ
 大梵王ノ泣淚
 亂波ノ雨ニモ勝タリ
 天帝釋ノ叫聲
 雷震喩ニ猶不レ足
 二月十五ノ夜ノ雲
 月ノ御影ヲ立隱ス
 沙羅雙樹林ノ木下ニ
 青蓮笑ヲ止給フ
 惡業如何ナル雲ナレバ
 佛ノ月輪陰スラム

生死如何ナル里ナレバ
 如來ノ住事無ルラム
 五十二種ノ泪ニハ
 大地モ色コソ變リケレ
 又早晚ハト思フニゾ
 待レヌ月日ハ憂リケル
 説置給ヒシ教法ハ
 耳ノ底ニテ忘ラレズ
 拜シ四八ノ相好ハ
 見奉ルガ如クナリ
 虎狼毒蛇モ花喰ヘ
 人ヲ舐リテ悲シメリ
 惡象獅子ノ強キ者
 人ヲ誤ツ事ゾナキ
 跋提河ノ波ノ音
 生者必死ヲ唱ヘツツ
 沙羅雙樹ノ風ノ聲
 會者定離ヲ調ブナリ

祇園ノ鐘モ今更ニ
 諸行無常ト響カセリ
 無常ノ聲ヲ思フニゾ
 實ニ是生滅法ナル
 佛ハ生滅滅已シテ
 寂滅已樂ヲ證シ給フ
 南無釋迦牟尼佛
 即チ轉輪聖王ノ
 闍維ノ法ニ准ヘテ
 牛頭梅檀ノ香木ニ
 金棺自ラ入り給フ
 大衆各各火ヲ持テ
 梅檀薪ニ進ムレバ
 其火即チ消ハテテ
 更ニ付事無リケリ
 次ニ諸天火ヲ持テ
 薪ニ投ルニ尙消ヌ
 次ハ龍火ヲ放テドモ

龍火モ又コソ消ニケレ
 迦葉尊者ハ山ヲ出
 來リケルヲゾ待給フ
 尊者ハ道ニテ人毎ニ
 佛ハ如何ト問給フ
 人人泪ヲ流シツツ
 佛ハ已ニト答ヘケリ
 迦葉ハ五百御弟子ト
 聲ヲ舉テゾ叫ケル
 怒カ道ニモ消ズシテ
 泣泣狗尸那國ニ入
 大衆迦葉ノ入ヲ見テ
 金ノ棺ニゾ近付シ
 佛迦葉ヲ哀ミテ
 最後ノ姿ヲ見セ給フ
 須臾ノ間ヲ經テ後ニ
 本ノ棺ニゾ入給フ
 迦葉佛ヲ拜ミツツ

良久テ活レリ
 泣泣偈ヲ唱ケル
 世尊滅度一何速
 大悲不能持留我
 令我見佛涅槃
 不發一言相教告
 時ニ力士火ヲ持テ
 牛頭梅檀ニ移セシニ
 烟即チ絶ハテテ
 先ノ如クニ消ニケリ
 南無釋迦牟尼佛
 終ニ佛ノ御胸ノ
 中ヨリ慈悲ノ火ヲ出シ
 漸ク薪ニ移シテゾ
 七日七夜ニ燒給フ
 荼毘ノ烟ハ空ニ滿
 衆會ノ涙ハ地ニ流ル
 七日七夜叫ブ聲

遂ニ間コソ無リケレ
 佛此夜滅度
 如薪盡火滅
 分布諸舍利
 而起無量塔
 後ニハ舍利ヲ分チツツ
 五天竺ニゾ崇ケル
 或ハ舍利ノ雲ノ上
 或ハ龍宮ノ浪ノ下
 漸ク星霜經シ程ニ
 跡佐鼻志久曾成ニケル
 恆沙ノ聖衆モ散ハテテ
 一夜ノ夢ニゾ成ニケル
 迦葉尊者ハ身ヲ投テ
 恒沙ニ入テ復見エズ
 南那和須ノ賢モ
 御法ト共ニ隱ニキ
 舍利弗尊者ハ佛ヨリ

前ニ滅度ヲ刀氣給フ
我等五濁ニ生ヲ得テ
佛ノ在世ニ漏タレド
聖教ニ合ヒ舍利ニ値
知ルベシ契不レ朽ト
思ヘバ悲歎限り無
但シ釋迦大悲尊
五十二類啼泣等
我等ガ心ヲ鑿ミツツ
加念忘ルル事ナカレ
願共諸衆生
一供結緣者
臨終住正念
往生安樂國
(天台覆標)

二〇 觀音和讚

解脫上人作

稽首歸命觀自在

誓願ごとく勝れたり
衆生界苦つくさずば
誓て正覺とらじとぞ
淨土になりては無量壽
穢土にのぞめば觀自在
其體又これ法にして
一乘妙法蓮華なり
衆生歸念退せねば
臨命終のゆふべには
心蓮臺をあらはして
自ら行者を迎ふなり
三世諸佛大慈悲
皆集一體觀世音
八寒八熱那落迦
大悲一人代受苦

二一 四座講法則

第一古讚集

大慈大悲代受苦
娑婆世界施無畏
五濁惡世能救護
名利の心すてがたく
戒珠光りくもりつゝ
惡業おもき罪人に
悲願殊にすぐれたり
三因佛性具せる身の
空く五趣にさすらひて
生死の闇に迷ふには
無垢の光ぞ照しける
名を聞き形を禮すれば
萬の苦みをそれなし
三毒重きともがらも
念に應じて滅すなり
二世の悲願悉く
思ひに任せみて玉ふ
我墮虛妄罪過中

○勸請 役者進テ正面ニ踞ス、次頭句
出テ衆僧頭ノ句ヲ聞テ踞ス

○頭立 居助
○一心奉請 ○娑羅林中

涅槃教主釋迦善逝
文殊彌勒兩大菩薩
唯願降臨道場受我
供養

○頭立 居助
○一心奉請 ○護持遺法

十六羅漢眷屬一萬
七千二百諸大羅漢
衆僧立 居
唯願降臨道場受我
供養

○頭立 居助
○一心奉請 ○雙林集會

五十二類親見遺跡
諸大祖師唯願降臨
居
道場受我供養

○能禮所禮性空寂

不還本覺捨大悲
三十三身自在にて
六趣に遍せる其中に
大悲誓ひ深ければ
自ら奈落の苦に代る
大定知悲の身なれば
炎魔獄卒は、からず
青蓮慈悲の眼より
落る涙は雨のごとく
はかなく罪業造りつゝ
等覺無垢の肌にや
須臾の間も痛はしく
重苦にかはらせ奉る
抑も月日の光りをば
何の恩とか思べき
知るべし大光普照の
迷の闇を照すなり
中にも大悲闡提の

感應道交難思議
我此道場如帝珠

十方諸佛影現中

我身影現諸佛前

頭面接足歸命禮

南無大恩教主釋迦如來

南無護持遺法十六羅漢

南無雙林提河人天大會

○傳 供 本座ニテ勤ム鉢三段

○四智梵語

○頭 唵縛曰羅薩怛縛

蘇薩羅賀縛日羅

羅怛曩摩覩怛覽

縛曰羅達摩訶夜

那縛曰羅羯麼迦

嚧婆縛

○心略梵語

薩縛尾也比婆縛

訖羅訖哩也素藥

多地鉢帝亦曩怛

賴馱親迦磨訶覽

佐尾嚕左曩々漢

率覩帝

○金剛業

○縛曰羅羯磨蘇縛曰

羅訖羅羯磨縛曰羅

蘇薩縛識縛曰羅謨

伽磨呼娜哩耶縛曰

羅尾濕縛囊謨々々々

○祭文 進正面讀之但無三禮

○涅槃惣禮

○拘尸那城跋提河

在娑羅林雙樹下

頭北面西右脇臥

貳月十五夜半滅

○如來唄 ○ン如來

妙色

身世

○散華

○願我在道場

香華供養佛

○釋迦

○天地此界多聞空

逝宮天處十方無

丈夫牛王大沙門

尋地山林遍無等

香華供養佛

○願以此功德

普○及於一切

我等與衆生

皆共成佛道

香華供養佛

○對揚

○南無法界道場三密

居教主舍那尊

四方四佛 證誠密教

天衆地類 倍增法樂

當所權現 倍增法樂

弘法大師 倍增法樂

貴賤靈等 皆成佛道

聖朝安穩 國家豐樂

伽藍安穩 興隆佛法

法性無漏 甚深妙典

所願成辦 金剛手菩薩

○梵音

○十方所有勝妙華

普散十方諸國土

是以供養釋迦尊

○次往涅槃處

感佛最後身

於此雙林下

利益群生類

○如來涅槃諸功德

甚深廣大不可量

衆生有感無不應

究竟令得大菩提

廻向 廻向ノ句ノ内ニ式師六種

廻向 廻向ノ金六丁下禮 着本座

○涅槃和讚

(明惠上人作)

頭 如來化導事をへて

助 娑羅林樹に隠れしに

衆生の明眼消はて

長夜の闇ぞいと深き

阿難の七夢を顯して

生死の苦相現前す

四一

是以供養諸如來

○出生無量寶蓮華

其華色相皆殊妙

是以供養大乘經

是以供養諸菩薩

○三條錫杖

頭 手執錫杖 當願衆生

付 設大施會 示如實道

供養三寶 設大施會

二振 示如實道 供養三寶

頭 以清淨心 供養三寶

發清淨心 供養三寶

二振 願清淨心 供養三寶

頭 三世諸佛 執持錫杖

皆成佛 故我稽首

執持錫杖 供養三寶

故我稽首 執持錫杖

乞願はくは無上尊
我等を捨る事なかれ
冥より冥に入ぬれば
佛法僧に逢がたし
釋尊大利を施して
今度苦しみ抜たまへ
如來在世の當初は
人天大會ごとごとく
生死の牢獄捨て、
解脱の宮にぞ遊びける
我等其時しらざりき
いかなる惡難に沈みてか
廣大慈悲の利益にも
漏てはひとり留るらん
罪業いかなる雲なれば
佛の月輪かたもなく
生死はいかなる里なれば
如來住事なかるらん

僧伽梨衣を脱去て
紫磨の色身みせしより
三千界の地の上に
八十種好かくれにき
恨めしき哉わがこゝろ
などは過去の佛世にて
佛語に従ひ修行して
大利を得る事なかりけむ
過去過去とてさて過去ぬ
未來は未來遙かなり
現在にはけむ事なくば
生死の出期なかるべし
我等は生死の凡夫にて
一句一偈の縁あれど
解脱の道を隔てつゝ
かへりて三途に入ぬべし
但し心に頼むべし
釋迦の名號聞つれば

いまだ發心せざれども
菩薩種姓に定まりぬ
釋迦の讚嘆聞人は
壽應の時に至るには
佛みづから現前し
淨土の道をぞ教へける
今はかへりて願樂し
老を生死の終とし
安養界に往生し
彌陀の聖化に漏ざらん
如來涅槃諸功德
甚深廣大不可量
衆生有感無不應
究竟令得大菩提
釋迦念佛
△十五遍時初二三二初已上五反頭人
出レ之

初重
南無釋迦牟尼佛
三重
南無釋迦牟尼佛

南無釋迦牟尼佛

二重
南無釋迦牟尼佛

南無釋迦牟尼佛

南無釋迦牟尼佛

一導師登禮盤 前方便神分ニテ
念佛止聲

○金剛界

○一切恭敬禮常住三寶

唵娑婆縛林馱

○薩縛達麼

○娑縛婆縛林度憾

○唵薩縛怛他蘂多

○憍那滿那囊迦嚕旃

○歸命十方一切佛

最勝妙法菩提衆

以身口意清淨業

慇懃合掌恭敬禮

歸命頂禮大

(悲毘盧遮那佛)

○菩無始輪廻諸有中

身口意業所生罪

如佛菩薩所懺悔

我今陳懺亦如是

歸命頂禮大

(悲毘盧舍那佛)

○我今深發○歡喜心

隨喜一切福智聚

諸佛菩薩行願中

金剛三業所生福

緣覺聲聞及有情

所集善根盡隨喜

歸命頂禮大

(悲毘盧舍那佛)

○一切世燈○坐道場

覺眼開敷照三有

我今踰跪先勸請

轉於無上妙法輪

所有如來三界生

臨般無餘涅槃者

我皆勸請令久住

不捨悲願救世間

歸命頂禮大

(悲毘盧遮那佛)

懺悔隨喜勸請福

願我不失菩提心

諸佛菩薩妙衆中

常爲善友不厭捨

離於八難生無難

宿命住智莊嚴身

遠離愚迷具悲智

悉能滿足波羅密

富樂豐饒生勝族

眷屬廣多恒熾盛

四無尊弁十自在

六通諸禪悉圓滿

如金剛幢及普賢

願讚廻向亦如是

歸命頂禮大悲毘盧舍那佛

助 唵冒地質多母怛

波那野弭

助 唵三昧耶薩怛鑿

勸請取呂 歸命摩訶毗盧舍那佛

四方四智波羅密

十六八供四攝智

入句 教令輪者降三世

兩部界會諸如來

外金剛部威德天

不越本誓三昧耶

降臨壇場受妙供

弘法大師增法樂

三國傳燈諸阿闍梨

入句 護持大眾除不祥

○文殊

○文殊菩薩出化清

涼神通力以現他

方眞座金毛師子

徽放殊光衆生仰

持寶蓋絕名香我

今發願處誠歸命

不求富貴不戀榮

華願當來世生淨

土法王家願當來

世生淨土法王家

○吉慶漢語

○諸佛都史○下生時

釋梵龍神隨侍衛

種種勝妙吉祥事

願汝今時盡能得

○滅罪○生善成大願

天下法界同利益

五大願 衆生無邊誓願度

○福智○無邊誓願集

○法門無邊誓願覺

○如來無邊誓願事

○菩提無上誓願證

前讚下座出之四智心略南方

讚或ハ文殊寶珠等任心鉢三段了

唵阿漢伽布惹麼拏

跋納麼縛曰枳怛他

蘊多尾路枳帝三滿

多鉢羅薩羅吽

後供 以我功德力 如來加持力

及以法界力 普供報而住

取珠呂 金一丁次供養法下座念佛

出之從振鈴行道初重二重三重

二重初重此導師一字ヲ金一丁

○迦毘羅衛○誕釋宮

龍王注沐甘露水

諸天供養吉祥事

願汝灌頂亦如是

○合 殺

一 釋迦牟尼佛

二 釋迦牟尼佛

三 釋迦牟尼佛

四 釋迦牟尼佛

五 釋迦牟尼佛

六 釋迦牟尼佛

七 釋迦牟尼佛

八 釋迦牟尼佛

九 釋迦牟尼佛

十 釋迦牟尼佛

十一 釋迦牟尼佛

○哭佛讚

○說夢以不祥○波離

(止) 正聲次後鈴後讚出之

○四智漢語

○金剛薩埵攝受故

得爲無上金剛寶

金剛言詞歌詠故

願成金剛承仕業

○心略漢語

○一切善生主

妙用體無導

三界如大王

遍照我頂禮

○佛 語

摩訶迦嚕拏建龕食

捨婆多藍薩縛吠

南本女那地寔那

馱藍鉢羅摩弭

怛他薩擔

忽來悲傷報言我

佛化身亡慈母落

金床痛閉物語斷

悲腸淚垂天上衣

裳惣皆垂淚下天

堂光我法 中王

懺悔隨喜

○羅漢惣禮

○我此道場如帝珠

十六大聖影現中

△此時式師座登禮盤

我等於彼大聖前

○頭面攝足歸命禮

○報身多在十六處

隨緣應現三千界

內祕普賢廣大行

外現聲聞利衆生

○我所說諸法

則是汝等師

頂戴加守護

修習勿廢忘

○世界若無佛

及衆賢聖人

世間衆生類

無有一切樂

○心如大海空容受

志若須彌不動搖

共坐如來解脫床

哀愍衆生如一子

△局ヲ羅漢ニ用ニ此廻向ヲ

願我生々見聖衆

世々恒聞深妙典

恒修不退菩薩行

疾證無上大菩提

たのみし能仁世を去ぬ

母なき憤に異ならず

爾時末世の衆生をば

誰かはあはれみ助くべき

禪定室にしづまりて

利生の床に休みつゝ

本誓悲願還念て

神通壽をぞ延てける

佛は我等を付囑して

旨受聲を聞しがは

無餘に遊ぶおもひなし

争か遺勅誤らむ

凡遺戒重きゆゑ

又は悲願深ければ

戀慕の室には影やどし

恭敬の苑には色現す

法性空の満月は

清く晴て高けれど

○羅漢和讃 伽陀師頭ヲ出ス

○歸命頂禮大羅漢

助 十六尊者は大福田

釋迦の付囑を受けてこそ

世間に現住したまへ

東西南北このみにて

示すに處を定めつゝ

天上人中普ねくも

人法守る誓ひあり

佛婆羅に入しかば

世間もやみに成にけり

法音提河に咽びてぞ

衆生の潤盡にける

金口の遺勅受しとき

滅後の御法を預りて

永く減度をとらじとそ

各々ちかひて去り給ふ

聲高

稽首十六大羅漢

我此一句の稱讚に

三明果德顯して

いよいよ利生を添給へ

一文一句を受持するも

皆是弘經の數ぞかし

況や一代聖教を

讀誦解義の力をや

願我生々見聖衆

世々恒聞深妙典

恒修不退菩薩行

疾證無上大菩提

重初

○釋迦念佛

三甲一乙三井寺
妙觀上人之様

初ハ浮キ乙ハ沈ムト可得意也

初重 甲南無釋迦牟尼佛

三重 甲南無釋迦牟尼佛

甲南無釋迦牟尼佛

○御前頌金

先二丁
後一丁

助 ○頭 我於无量無數劫

恭敬供養釋迦尊

恭敬供養諸如來

堅持禁戒趣菩提

求證法身安樂處

求證法身安樂處

△次式師讀出也 次或 次式師

○其樹奮大光

遍照東方刹

其數如恒沙

諸佛之國土

○淨飯王宮生處塔

菩提樹下成佛塔

鹿野苑中法輪塔

給孤獨苑名稱塔

△八塔二頭ニスル

時此已下三字ニ終

ノ博士ヲ付也

○曲如城邊寶階塔

耆闍崛山般若塔

庵羅衛林維摩塔

娑羅林中圓寂塔

○見聞供養聖遺跡

所得功德不可量

於有爲中終不盡

要滅煩惱離衆苦

我子所愛子

謂善諸比丘

見佛所遊方

昔曾安土處

我說誠實言

安慰如是輩

彼雖不見佛

而與見佛同

廻向

○遺跡和讚(頭伽陀師出之)

頭○生滅常の理はりは

助 凡聖共にまぬかれず

中にも殊に悲しきは

能仁世尊の涅槃也

濟度利生の儀まはひは

西土の塵にまじへつ

つ

說法儀式の貌ばせは

鷲峰の雲に隱にき

凡四十餘年の

教けもん文其數多けれど

皆是利生の

法なれば

衆生の得脫

一つなり

然に化縁盡

はて、

衆生の濕ひ

たえしかは

萬德尊の貌

はせば

金棺永くへ

たてたり

時に其會の人天等

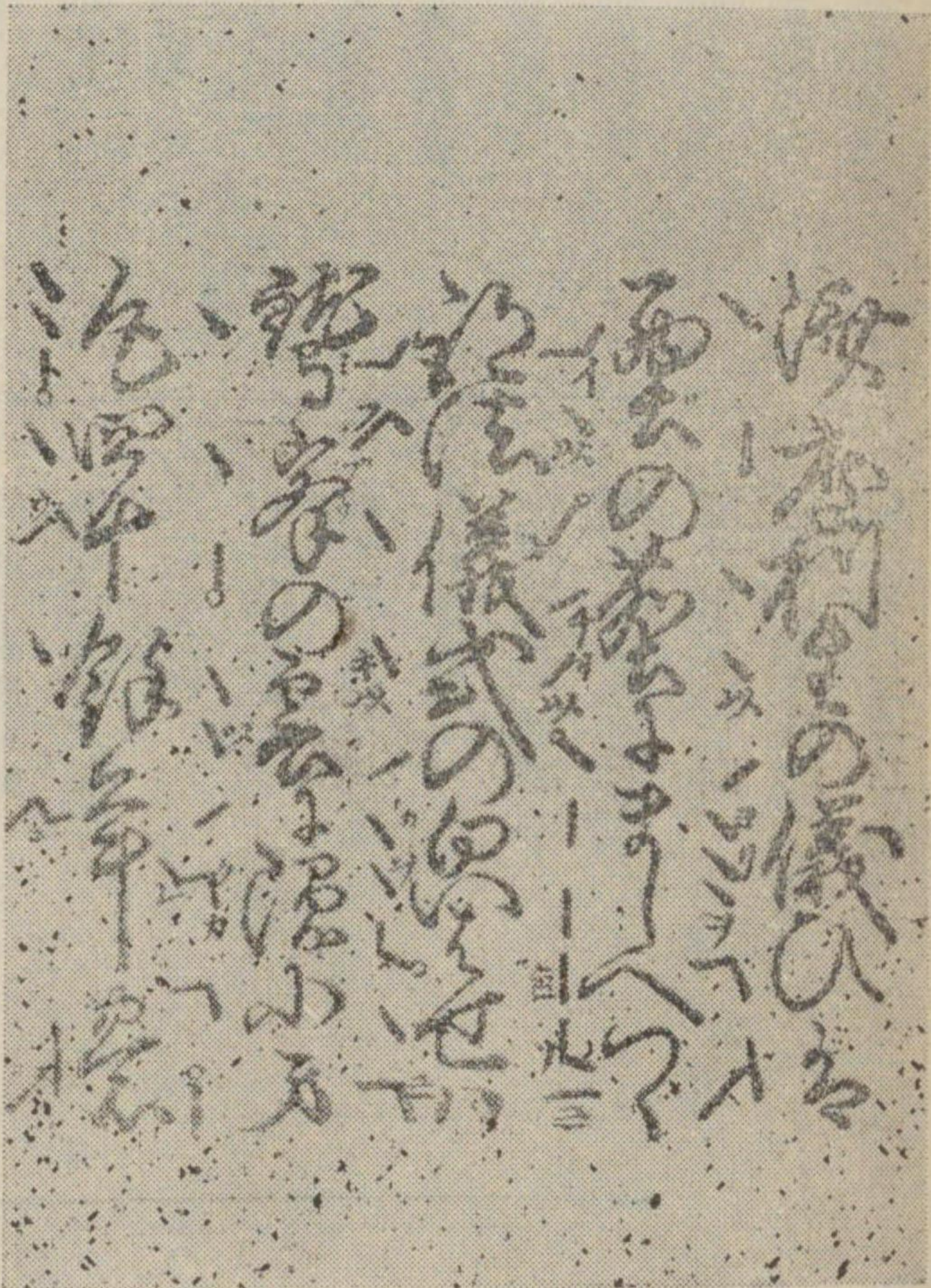
如來の涅槃を悲しみて

悲涙を抑へ地に伏して

愁歎せしこれ哀れなれ

或は雙樹の下にして

眼をとつる者もあり



或は提河の邊にて

浪に漂ふ者もあり

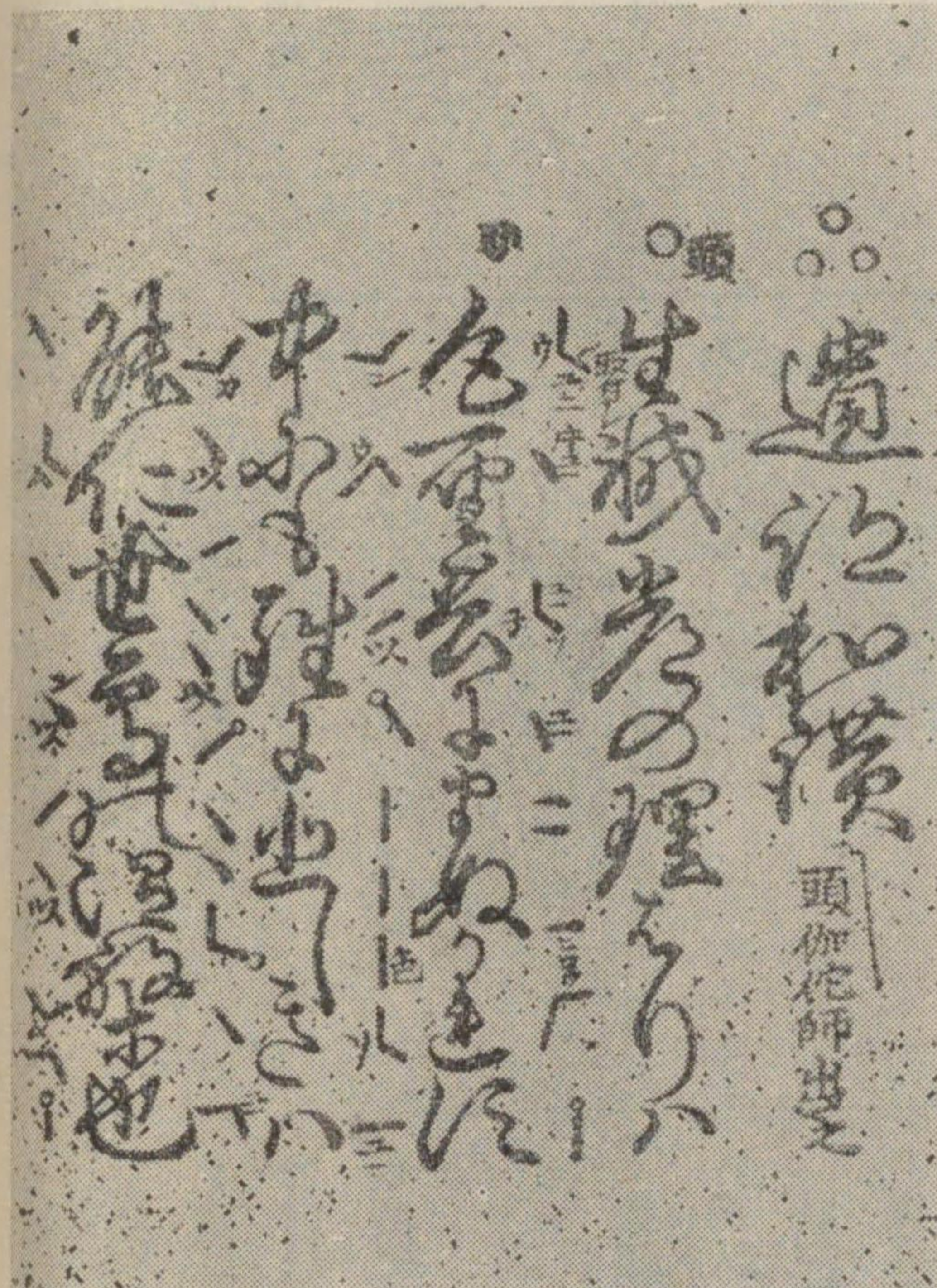
されとも荼毘の時至り

柩檀薪を積しかは

自から胸より火を出し

霞と共に成りたまふ

其時大衆もろともに



煙り漸くたえしかは

泣々涙を抑へつ、

舍利を分て還にき

釋尊滅後二千餘

我等か悲しみ深きかな

如來在世のいにしへを

纔に聞こそ悲しけれ

生死の道をいかにして

誰を知邊と頼むらん

金口の詞を仰きつ、

長夜のしるへと憑かな

いかなる五十二類たに

花を捨てまいるらん

いかなる我等か人身の

劣て其縁なかるらん

雙樹の青き葉の色は

白く變せる枝ことに

戀慕の姿あらはせる

木々の梢も哀れなり
去て佛にあはざるは
恨の中の恨みなり

されとも滅後の此比は

飽まで法をあひみつゝ

月氏の遺跡思ひやり

涅槃の像に向ひつゝ

焼香散花禮拜し

恭敬供養いと深し

如來最後の詞にも

滅後の形像供養せば

如來在世の生身を

供養するにも異ならず

三千法王世を去りぬ

涅槃の跡に留まれる

我等をすす乎みて

哀愍納受垂たまへ

如初 我如初生之嬰兒

失母不久必當死
世尊如何見放捨
獨出三界受安樂

○舍利伽陀 次念佛アリ二甲

○敬禮天人大覺尊

恒沙福智皆圓滿

因圓果滿成正覺

住壽凝然無去來

○於如來舍利

一興供養者

盡生死煩惱

畢竟得涅槃

○舍利神變不思議

見聞隨喜得利益

超於生身住世間

爲迷正路作明燈

○願於來世恒沙劫

念々不捨天人師

如影隨形不暫離

晝夜勤修於種智

○願以此功德

普及於一切

我等與衆生

皆共成佛道

○舍利和讚 (舍利講式和讚ヲ見ヨ)

念佛ノ代ニ唱之

○舍利讚歎 (初段) (舍利讚歎ヲ見ヨ)

○舍利禮 役者進ニ正面ニ蹲踞頭ヲ出

大衆モ蹲踞ノ一禮拜ス讚

文學ヲ首ヲ地ニ付禮ス

△七遍時 初二三二初已上五反頭

人出之 或ハ七反ナカラ頭人出

之 亦ハ十五遍隨レ宜

一心頂禮 助 萬德圓滿

釋迦如來 眞身舍利

本地法身 法界婆娑

我等禮敬 爲我現身

入我我入 佛加持故

我證菩提 以佛神力

利益衆生 發菩提心

修菩薩行 同入圓寂

平等大智 今證頂禮

○奉送 役者進ニ正面ニ蹲踞頭ヲ

出商聲ニ唱レ之ヲ

○唯願本師諸聖衆

還著本所利群生

遙護此苑興正法

令諸衆生入佛道

○願以此功德

普及於一切

我等與衆生

皆共成佛道

助 頭 ○南無大恩教主釋迦如來

同○南無遺身舍利生々世々

同○南無自他法界同利益

此句終テ大衆 同ニ首ヲ地ニ付禮ス

右一帖流行于世者

博士等往々有不委

故令改焉

寶永二年乙酉孟夏旦

二二 太子和讚

明惠上人作

敬禮太子上宮王

本體救世觀世音

大悲救誓深クシテ

蒼溟海ノ如クナリ

娑婆有緣ノ聖ナレハ

現身說法種々ニ

救護衆生ノ徳アリテ

施無畏者ト名ツケタリ

佛日輝ク朝ニハ

覺山高ク照ラセリキ

法水流ルゝ夕ヘニハ

權跡影ヲゾ浮ヘケル

母胎ニ宿ルシルシニハ

家ヲツクルニ西方界

三寶興スル奇瑞ニハ

詞ノ始ハ南無佛

掌ニハ舍利ヲモチ

御身妙ナル馥アリ

遊戲レコトノク

擧テ化儀ノ思アリ

佛法崇ル願ヲタテ

四天ノ像ヲ戴キテ

守屋カ軍ヲ討テ後

精舎ヲ所々ニ建テ玉フ

勝鬘維摩妙法華

三經弘メテ疏ヲ製ス

近事男女大僧尼

四部ノ弟子ノ名ヲエタリ
興法利生ノコ、ロサシ
心モ詞モオヨハレス
三學八宗皆ナカラ
其恩徳ヲ報スヘシ
況塔寺ノ御名ヲ聞キ
一花ノ供養スル人モ
順次往生疑ハス
一佛淨土ニ生ルヘシ
願我命終時
盡除諸障礙
面見阿彌陀
往生安樂國
南無觀音化身上宮太子 十二反

二三 文 讚

空阿彌陀佛作

此界一人念佛名

こゝろの中におもふらく
機教相應しらすして
要行さだめがたからん
たゞし釋迦大悲尊
一切經卷その中に
有縁の法を撰びつゝ
われらにあたへたまふべし
すなはち大藏中に入り
至心にして經を取り
信手に觀經得し時ぞ
專修の門には入にける
玄冬のあらし荒くふき
落葉あとを埋めども
もつばら念佛し給ふに
おほえずあまたの日を送る
夜の霜をいとほねば
木の葉の中にうづもれて、
數返の紅うつろひて

西方便有一蓮生
但使一生常不退
此花還到此間迎
娑婆に念佛つとむれば
淨土に蓮ぞ生ずなる
一生常に退せねば
此花かへりて迎ふなり
一生の勤修は須臾の程
衆事をなけ棄て願ふべし
願はば必ず生れなん
ゆめ／＼怠る事なかれ
光明 遍照十方世界
念佛衆生攝取不捨
釋迦の淨教弘通する
論師入師は多けれど

二四 善導大師和讚

聖光上人作

鷓鴣の背にことならず
合掌しては西にむき
踞跪しては聲をあけ
氷をたたく冬の夜も
汗をながして名をとなふ
悟真寺にこもり居て
餘多の年をこえざるに
觀想疲をわすれつゝ
三昧開發したまへり
淨土の行業滿しかば
京師に出てものを利す
勸化のつねのことばには
無常の道理を示しける
從使千年受五欲
增長地獄苦因緣
貪瞋十惡相續起
豈是解脫涅槃因
彌陀名號相續念

正雜二行の分別は
京師大師にはじまれり
西土の本地をたづぬれば
四十八願これ深し
東土の垂迹とぶらへば
三時開發亦重し
嬰兒の行に形どりて
朱司の家に生れては
生死の境をいとひつゝ
菩提の道にぞ入りにける
變相拜してねがふらく
如何にしてか姿をば
花のうてなに託せしめ
神淨土に栖しめん
翠の髪を剃おろし
戒香其身にうけてこそ
比丘の像となりたまふ
法華維摩誦せしに

化佛菩薩現前行
或與華臺或授手
須臾命盡佛迎接
高爐山にのほりて
惠遠大師のあとをみて
東林境しづかにて
西土に心も澄わたる
瓦に松生ひ苔むして
碑の文ばかりぞのこりける
此寺遺範みるときぞ
いよいよこゝろも進みける
須臾の間の行相も
利益ならざることぞなし
うつせる經卷數萬卷
變相書事數しれず
破壊の堂塔修造し
四種の供養は僧にあり
釋迦の分衛を學びつゝ

淨命自活したまへり
比丘とともに遊行せず
沙彌の禮をも受ざりき
睡眠せずして三十年
愛欲なくして一期生
そもそも遺身往生は
瑞相まことに勝れたり
彌陀觀音來迎し
音樂異香著し
善導大師の徳行を
高宗皇帝貴みて
すなはち所居の伽藍をば
光明寺と額を書く
たゞし遺身往生は
われらが爲には過分なり
畢命爲期の誓約は
たのみてもなほ頼むべし

二五 淨土和讃

親鸞上人作

彌陀の名號となへつゝ
信心まことにうるひとは
憶念の心つねにして
佛恩報ずるおもひあり
誓願不思議をうたがひて
御名を稱する往生は
宮殿のうちに五百歳
むなしくすぐとぞきたまふ
讚阿彌陀佛偈曰
曇鸞御造
南無阿彌陀佛
釋名ニ無量壽傍經ニ
奉レ讚亦曰ニ安養ニ
成佛已來歷ニ十劫ニ
壽命方將無レ有レ量

法身光輪徧法界
照三世眞實故頂禮
又號ニ無量光眞實明
又號ニ無邊光平等覺
又號ニ無碍光難思議
又號ニ無對光畢竟依
又號ニ光炎王大應供
又號ニ清淨光又號ニ歡喜光
大安 慰又號ニ智慧光
又號ニ不斷光又號ニ難思光
又號ニ無稱光又號ニ超日月光
無 等 等 廣 大 會
大 心 海 無 上 尊
平 等 力 大 心 力
無 稱 佛 婆 伽 婆
講 堂 清淨大攝受
不 可 思 議 尊 道 場 樹
眞 無 量 清 淨 樂

本願功德聚 清淨勳
功 德 藏 無 極 尊
南無不可思議光 已上略鈔也
十住毘婆娑論曰
自在人 我 清淨人命
無量德 稱 已上
讚阿彌陀佛偈和讃

愚禿親鸞作

南無彌陀佛
彌陀成佛のこのかたは
いまに十劫をへたまへり
法身の光輪きはもなく
世の眞實をてらすなり
智慧の光明はかりなし
有量の諸相ことごとく
光暎かふらぬものはなし
眞實明に歸命せよ

解脱の光輪きはもなし

光觸かふるものはみな
有無をはなるとのべたまふ
平等覺に歸命せよ
光雲無碍如虚空
一切の有碍にさはりなし
光澤かふらぬものぞなき
難思議を歸命せよ
清淨光明ならびなし
遇斯光のゆるなれば
一切の業繫ものぞこりぬ
畢竟依に歸命せよ
佛光照曜最第一
光炎王佛となづけたり
三塗の黒闇ひらくなり
大應供を歸命せよ
道光明朗超絶せり
清淨光佛とまうすなり

ひとたび光照かふるもの

業垢をのぞき解脱をう
慈光はるかにかふらしめ
ひかりのいたるところには
法喜をうとぞのべたまふ
大安慰を歸命せよ
無明の闇を破するゆる
智慧光佛となづけたり
一切諸佛三乘衆
ともに嘆譽したまへり
光明てらしてたえざれば
不斷光佛となづけたり
聞光力のゆるなれば
心不斷にて往生す
佛光測量なきゆるに
難思光佛となづけたり
諸佛は往生嘆じつゝ
彌陀の功德を稱せしむ

神光の離相をとがざれば

無稱光佛となづけたり

因光成佛のひかりをば

諸佛の嘆するところなり

光明月日に勝過して

超日月光となづけたり

釋迦嘆じてなほつきす

無等等を歸命

せよ

彌陀初會の聖衆

は

算數のおよぶ

ことぞなき

淨土をねがは

んひとはみな

廣大會を歸命

せよ

安樂無量の大菩薩

薩

一生補處にいたるなり

普賢の徳に歸してこそ

穢國にかならず化するなれ

十方衆生のためにとて

如來の法藏あつめてぞ

本願弘誓に歸せしむる

(元祿板和讃)

大心海を歸命せよ

觀音勢至もろともに

慈光世界を照曜し

有縁を度してしばらくも

休息あることなかりけり

安樂淨土にいたるひと

五濁惡世にかへりては

釋迦牟尼佛のごとくにて

利益衆生はきはもなし

神力自在なることは

測量すべきことぞなき

不思議の徳をあつめたり

無上尊を歸命せよ

安樂聲聞菩薩衆

人天智慧ほがらかに

身相莊嚴みなおなじ

他方に順じて名をつらぬ

顯容端正たぐひなし

安樂國土の莊嚴は

釋迦無碍のみことにて

とくともつきじとのべた

まよふ

無稱佛を歸命せよ

已今當の往生は

この土の衆生のみならず

十方佛土よりきたる

無量無數不可計なり

阿彌陀佛の御名をきき

歡喜讚仰せしむれば

功徳の實を具足して

一念大利無上なり

たとひ大千世界に

みてらん火をもすぎゆきて

佛の御名をきくひとは

ながく不退にかなふなり

神力無極の阿彌陀は

精微妙軀非人

天

虛無之身無極

體

平等力を歸命

せよ

安樂國をねがふ

ひと

正定聚にこ

そ住すなれ

邪定不定聚く

にいなし

諸佛讚嘆したまへり

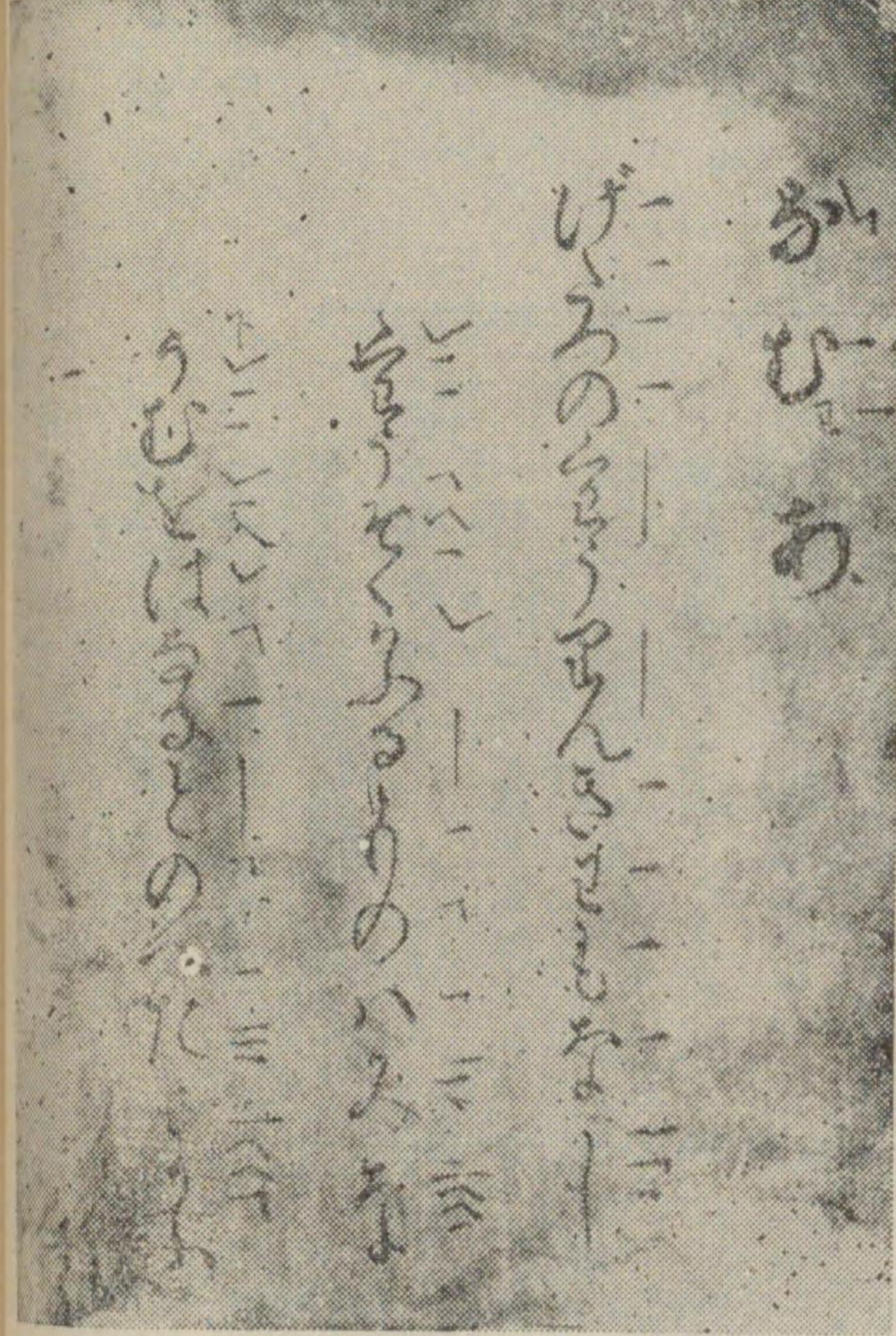
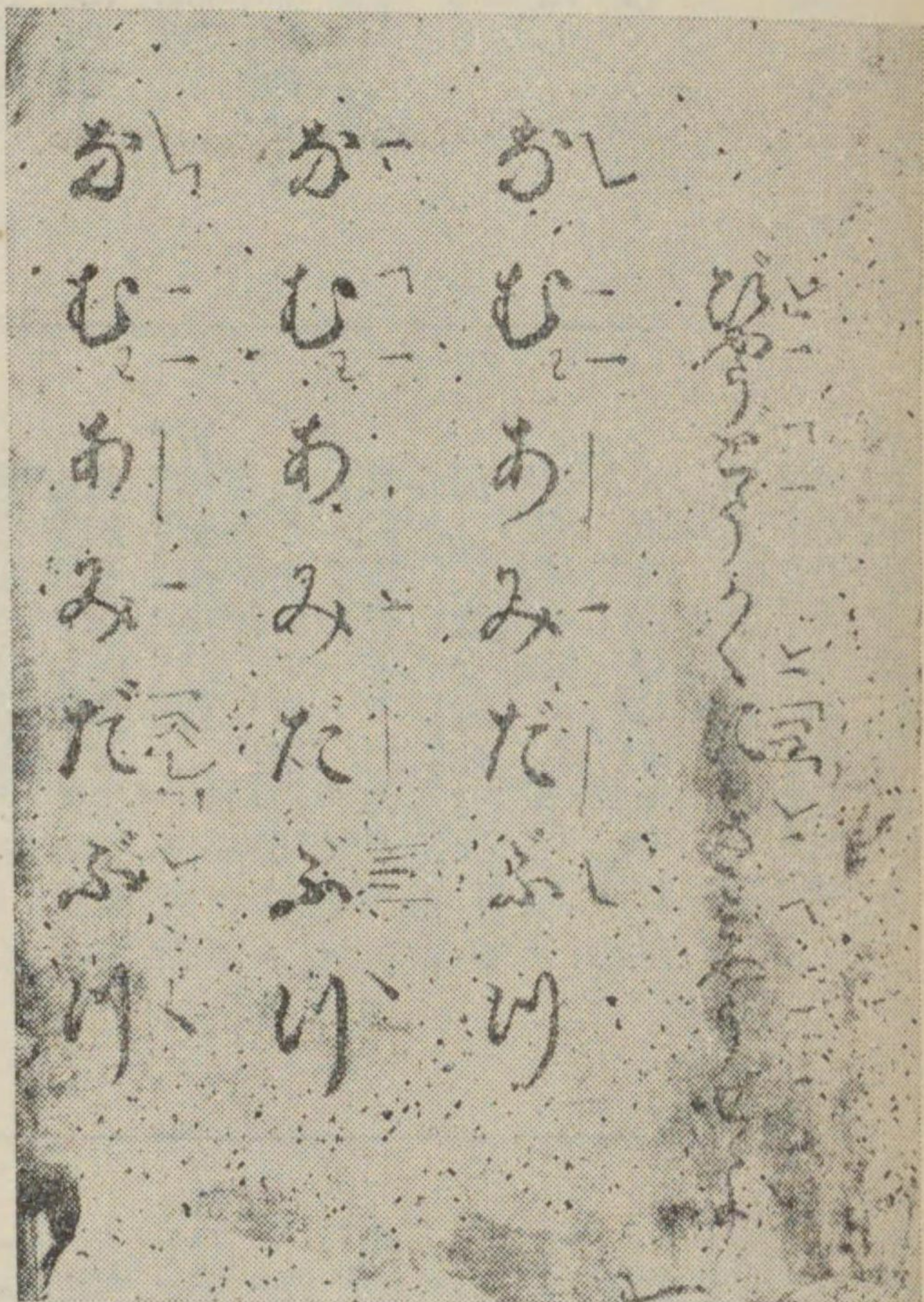
十方諸有の衆生は

阿彌陀至徳の御名をき

眞實信心いたりなば

おほきに所聞を慶喜せん

若不生者のちかひゆる



無量の諸佛ほめたまふ

東方恒沙の佛國より

無数の菩薩ゆきたまふ

自餘の九方の佛國も

菩薩の往觀みなおなじ

釋迦牟尼如來偈をときて

無量の功德をほめたまふ

十方の無量菩薩衆

徳本うるんためにとて

恭敬をいたし歌嘆す

みなひと婆伽婆を歸命せよ

七寶講堂道場樹

方便化身の淨土なり

十方來生きはもなし

講堂道場禮すべし

妙土廣大超數限

本願莊嚴よりおこる

清淨廣大觀受に

功德藏を歸命せよ

三塗苦難ながくとぢち

但有自然快樂音

このゆるる安樂となづけたり

無極尊を歸命せよ

十方三世の無量慧

おなじく一如に乗じてぞ

二智圓滿道平等

攝化隨緣不思議なり

彌陀の淨土に歸しぬれば

すなはち諸佛に歸するなり

一心をもちて一佛を

ほむるは無碍人をほむるなり

信心歡喜慶所聞

乃暨一念至心者

南無不可思議光佛

頭面に禮したてまつれ

佛慧功德をほめしめて

稽首歸命せしむべし

自利々他圓滿して

歸命方便巧莊嚴

こゝろもことばもたえたれば

不可思議尊を歸命せよ

神力本願及満足

明了堅固究竟願

慈悲方便不思議なり

眞無量を歸命せよ

寶林寶樹微妙音

自然清和の伎樂にて

哀婉雅亮すぐれたり

清淨樂を歸命せよ

七寶樹林くにみつ

光曜たがひにかやけり

華菓技葉またおなじ

本願功德聚を歸命せよ

清風寶樹をふくとときは

十方の有縁にきかしめん

信心すでにえんひとは

つねに佛恩報すべし

已上四十八首

阿彌陀如來

觀世音菩薩

大勢至菩薩

富樓那尊者

大目犍連

阿難尊者

章提夫人

耆婆大臣

月光大臣

阿闍世王

兩行大臣

守門者

尊者阿難座よりたち

世尊の威光を瞻仰し

生希有心とおどろかし

未曾見とぞあやしみし

淨土和讚

愚禿親鸞作

大經意

二十二首

如來の光瑞希有にして

阿難はなほだこゝろよく

如是之義ととへりしに

出世の本意あらはせり

大寂定にいりたまひ

如來の光顔たへにして

阿難の惠見をみそなはし

問斯惠義とほめたまふ

如來興世の本意には

本願眞實ひらきてぞ

難値難見とときたまひ

猶靈瑞華としめしける

彌陀成佛のこのかたは

いまに十劫とときたれど

塵點久遠劫よりも

ひさしき佛とみへたまふ

南無不可思議光佛

饒王佛のみもとにて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

佛慧功德をほめしめて

十方淨土のなかよりぞ
 本願選擇攝取する
 無碍光佛のひかりには
 清淨歡喜智慧光
 その徳不可思議にして
 十方諸有を利益せり
 至心信樂欲生と
 十方諸有をすゝめてぞ
 不思議の誓願あらはして
 眞實報土の因とする
 眞實信心うるひとは
 すなはち定聚のかすにいる
 不退のくらるにいらぬれば
 かならず滅度にいたらしむ
 彌陀の大悲ふかければ
 佛智の不思議をあらはして
 變成男子の願をたて
 女人成佛ちかひたり

至心發願欲生と
 十方衆生を方便し
 衆善の假門ひらきてぞ
 現其人前と願ひける
 臨終現前の願により
 釋迦は諸善をことごとくく
 觀經一部にあらはして
 定散諸機をすゝめけり
 諸善萬行ことごとくく
 至心發願せるゆゑに
 往生淨土の方便の
 善とならぬはなかりけり
 至心廻向欲生と
 十方衆生を方便し
 名號の眞門ひらきてぞ
 不果遂者と願ひける
 果遂の願によりてこそ
 釋迦は善本徳本を

彌陀經にあらはして
 一乗の機をすゝめける
 定散自力の稱名は
 果遂のちかひに歸してこそ
 おしへざれども自然に
 眞如の門に轉入する
 安樂淨土をねがひつゝ
 他力の信をえぬひとは
 佛智不思議をうたがひて
 邊地懈慢にとまるなり
 如來の興世にあひがたく
 諸佛の經道きゝがたし
 菩薩の勝法きくことも
 無量劫にもまれらなり
 善知識にあふことも
 おしふることまたかたし
 よくきくこともかたければ
 信することなほかたし

一代諸教の信よりも
 弘願の信樂なほかたし
 難中之難とときたまひ
 無過斯難とのべたまふ
 念佛成佛これ眞宗
 萬行諸善これ假門
 權實眞假をわかずして
 自然の淨土をえぞしらぬ
 聖道權化の方便に
 衆生ひさしくとゞまりて
 諸有に流轉の身とぞなる
 悲願の一乘歸命せよ
 已上大經意

觀經意 九首
 恩徳廣大釋迦如來
 韋提夫人に勅してぞ
 光臺現國そのなかに

安樂世界をえらばしむ
 頻婆娑羅王勅せしめ
 宿因その期をまたずして
 仙人殺害のむくひには
 七重のむろにとぢられき
 阿闍世王は瞋怒して
 我母是賊としめしてぞ
 無道に母を害せんと
 つるぎをぬきてむかひける
 耆婆月光ねんごろに
 是旃陀羅とはぢしめて
 不宜住此と奏してぞ
 闍王の逆心いさめける
 耆婆大臣おさへてぞ
 却行而退せしめつゝ
 闍王つるぎをすてしめて
 韋提をみやに禁じける
 彌陀釋迦方便して

阿難目連富樓那章提
 達多闍王頻婆娑羅
 耆婆月光行雨等
 大聖おのゝもろともに
 凡愚底下のつみびとを
 逆惡もらさぬ誓願に
 方便引入せしめけり
 釋迦章提方便して
 淨土の機縁熟すれば
 雨行大臣證として
 闍王逆惡興せしむ
 定散諸機各別の
 自力の三心ひるがへし
 如來利他の信心に
 通入せんとねがふべし
 已上觀經意
 彌陀經意 五首

十方微塵世界の

念佛の衆生をみそなはし

攝取してすてざれば

阿彌陀となづけたてまつる

恒沙塵數の如來は

萬行の少善きらひつゝ

名號不思議の信心を

ひとしくひとへにすゝめしむ

十方恒沙の諸佛は

極難信ののりをとき

五濁惡世のためにとて

證誠護念せしめたり

諸佛の護念證誠は

悲願成就のゆるなれば

金剛心をえんひとは

彌陀の大恩報すべし

五濁惡時惡世界

濁惡邪見の衆生には

大信心は佛性なり

佛性すなはち如來なり

衆生有礙のさとりにて

無碍の佛智をうたがへば

會婆羅頻陀羅地獄にて

多劫衆苦にしづむなり

已上諸經意

現世利益和讚

十五首

阿彌陀如來來化して

息災延命のためにとて

金光明の壽量品

ときおきたまへるみのりなり

山家の傳教大師は

國土人民をあはれみて

七難消滅の誦文には

南無阿彌陀佛となふべし

一切の功德にすぐれたる

大聖易往とときたまふ

淨土をうたがふ衆生をば

無眼人とぞなづけたる

無耳人とぞのべたまふ

無上上は眞解脱

眞解脱は如來なり

眞解脱にいたりてぞ

無愛無疑とはあらはるゝ

平等心をうるべきを

一子地となづけたり

一子地は佛性なり

安養にいたりてさとりべし

如來すなはち涅槃なり

涅槃を佛性となづけたり

凡地にしてはさとられず

安養にいたりて證すべし

信心よるこぶそのひとを

如來とひとしときたまふ

よるひるつねにまもるなり

南無阿彌陀佛となふれば

難陀跋難大龍等

無量の龍神尊敬し

よるひるつねにまもるなり

南無阿彌陀佛となふれば

閻魔法王尊敬す

五道の冥官みなともに

よるひるつねにまもるなり

南無阿彌陀佛となふれば

他化天の大魔王

釋迦牟尼佛のみまへにて

まもらんとこそちかひしか

天神地祇はことごとく

善鬼神となづけたり

これらの善神みなともに

念佛のひとをまもるなり

願力不思議の信心は

彌陀の名號あたへてぞ

恒沙の諸佛すゝめたる

已上彌陀經意

諸經のこゝろにより

て彌陀和讚 九首

無明の暗夜をあはれみて

法身の光輪きはもなく

無碍光佛としめしてぞ

安養界に影現する

久遠實成阿彌陀佛

五濁の凡愚をあはれみて

釋迦牟尼佛としめしてぞ

伽耶城には應現する

百千俱胝の劫をへて

百千俱胝のしたをいたし

したごと無量のこゑをして

彌陀をほめんになほつきじ

南無阿彌陀佛となふれば

三世の重障みなながら

かならず轉じて輕微なり

南無阿彌陀佛となふれば

この世の利益きはもなし

流轉輪廻のつみきえて

定業中天のぞこりぬ

南無阿彌陀佛となふれば

梵天帝釋 歸敬す

諸天善神ことごとく

よるひるつねにまもるなり

南無阿彌陀佛となふれば

四天大王もろともに

よるひるつねにまもりつゝ

よろづの惡鬼をちかづけず

南無阿彌陀佛となふれば

堅牢地祇は尊敬す

かけとかたちのごとくにて

大菩提心なりければ
天地にみてる悪鬼神

みなことごとくおそるなり

南無阿彌陀佛をとなふれば

観音勢至はもろともに

恒沙塵数の菩薩と

かけのごとく

に身にそへり

無碍光佛のひか

りには

無数の阿彌陀

ましくて

化佛おのゝ

ことごとく

眞實信心をま

もるなり

南無阿彌陀佛を

となふれば

勢至念佛圓通して

五十二菩薩もろともに

すなはち座よりたゝしめて

佛足頂禮せしめつゝ

教主世尊にまうさしむ

往昔恒河沙劫に

佛世にいでたまへりき

無量光とまうしけり

十二の如來あひつぎて

十二劫をへたまへり

最後の如來をなづけてぞ

超日月光とまうしける

超日月光この身には

念佛三昧おしへしむ

十方の如來は衆生を

一子のごとく憐念す

子の母をおもふが如くにて

衆生佛を憶すれば

高僧和讃 惡毒親鸞作

龍樹菩薩 付三釋 文一

十首

本師龍樹菩薩は

智度十住毘婆娑等

つくりておほく西をほ

め

すゝめて念佛せしめた

り

南天竺に比丘あらん

龍樹菩薩となづくべし

有無の邪見を破すべし

と

世尊はかねてときたま

ふ

本師龍樹菩薩は

大乘無上の法をとき

歡喜地を證してぞ

已上大勢至菩薩

源空聖人御本地
慶長四年己酉霜月日教如

大勢至菩薩の

大恩ふかく報すべし

已上大勢至菩薩

源空聖人御本地也

二六 高僧和讃

現前當來とを

からず

如來を拜見う

たがはず

染香人のその身

には

香氣あるがご

とくなり

これをすなは

ちなつけてぞ

香光莊嚴と

まうすなり

われもと因地にありしとき

念佛の心をもちてこそ

無生忍にはいりしかば

いまこの娑婆界にして

念佛のひとを攝取して

淨土に歸せしむるなり

ひとへに念佛すめける
龍樹大士世にいで

難行易行のみちおしへ

流轉輪廻のわれらをば

弘誓のふねにのせたまふ

本師龍樹菩薩の

おしへをつたへきかんひと

本願ころろにかけしめて

つねに彌陀を稱すべし

不退のくらゐすみやかに

えんとおもはんひとはみな

恭敬の心に執持して

彌陀の名號稱すべし

生死の苦海ほとりなし

ひさしくしづめるわれらをば

彌陀弘誓のふねのみぞ

のせてかならずわたしける

智度論にのたまはく

如來は無上法皇なり

菩薩は法臣としたまひて

尊重すべきは世尊なり

一切菩薩のたまはく

われら因地にありしとき

無量劫をへめぐりて

萬善諸行を修せしかど

恩愛はなはだちがたく

生死はなはだつきがたし

念佛三昧行じてぞ

罪障を滅し度脱せし

已上龍樹菩薩

天親菩薩

付釋文一

十首

釋迦の教法おほけれど

天親菩薩はねんごろに

彌陀成就のわれらには

これを廻向となづけたり

已上天親菩薩

曇鸞和尚

付釋文一

卅四首

本師曇鸞和尚は

菩提流支のおしへにて

仙經ながくやきすて

淨土にふかく歸せしめき

四論の講説さしおきて

本願他力をときたまひ

具縛の凡衆をみちびきて

涅槃のかどにぞいらしめし

世俗の君子幸臨し

勅して淨土のゆゑをとふ

十方佛國淨土なり

なにによりてか西にある

鸞師こたへてのたまはく

彌陀の弘誓をすめしむ

安養淨土の莊嚴は

唯佛與佛の知見なり

究竟せること虚空にして

廣大にして邊際なし

本願力にあひぬれば

むなくすぐるひとぞなき

功德の寶海みちみちて

煩惱の濁水へだてなし

如來淨華の聖衆は

正覺のはなより化生して

衆生の願樂ことふくく

すみやかにとく満足す

天人不動の聖衆は

弘誓の智海より生ず

心業の功德清淨にて

虚空のごとく差別なし

天親論主は一心に

わが身は智慧あさくして

いまだ地位にいらざれば

念力ひとしくおよばれず

一切道俗もろともに

歸すべきところぞさらになき

安樂勸歸のころざし

鸞師ひとりさだめたり

魏の主勅して並州の

大巖寺にぞおはしける

やうやくおはりにのぞみては

汾州にうつりたまひにき

魏の天子はたふとみて

神鸞とこそ號せしか

おはせしところその名をば

鸞公巖とぞなづけたる

淨業さかりにすめつ

立忠寺にぞおはしける

魏の興和四年に

へすなはち大悲をおこすなり

無上涅槃を證してぞ

願土にいたればすみやかに

この心すなはち他力なり

一心すなはち金剛心

金剛心は菩提心

信心すなはち一心なり

利他眞實の信心なり

度衆生の心はこれ

度衆生のころなり

願作佛の心はこれ

天親論主のみことには

一心に歸命するをこそ

盡十方の無碍光佛

報土にいたるとのべたまふ

本願力に乗すれば

無碍光に歸命す

遙山寺にこそうつりしか
六十有七ときいたり

浄土の往生とけたまふ

その時靈瑞不思議にて

一切道俗歸敬しき

君子ひとへにおもくして

勅宣くだしてたちまちに

汾州汾西秦陵の

勝地に靈廟たてたまふ

天親菩薩のみことをも

鸞師ときのべたまはずば

他力廣大威徳の

心行いかでかさともまし

本願圓頓一乘は

逆惡攝すと信知して

煩惱菩提體無二と

すみやかにとくさとらしむ

いつの不思議をこくなかに

他力の信とのべたまふ

盡十方の無碍光は

無明のやみをてらしつゝ

一念歡喜するひとを

かならず滅度にいたらしむ

無碍光の利益より

威徳廣大の信をえて

かならず煩惱のこほりとけ

すなはち菩提のみづとなる

罪障功徳の體となる

こほりとみづのごとくにて

こほりおほきにみづおほし

さはりおほきに徳おほし

名號不思議の海水は

逆謗の屍骸もとまらず

衆惡の萬川歸しぬれば

功徳のうしほに一味なり

盡十方無碍光の

念相續せざるなり

念相續せざるゆゑ

決定の信をえざるなり

信心不淳とのべたまふ

如實修行相應は

信心ひとつにさだめたり

萬行諸善の小路より

本願一實の大道に

歸入しぬれば涅槃の

さとりはすなはちひらくなり

本師曇鸞大師をば

梁の天子蕭王は

おはせしかたにつねにむき

鸞菩薩とぞ禮しける

已上曇鸞和尙

道綽禪師

付釋文一

無生の生なりければ

本則三三の品なれど

如來清淨本願の

無別道故ときたまふ

眞實信心ひとつにて

無上寶珠の名號と

安樂佛國にいたるには

治せんがためとのべたまふ

衆生虚誑の身口意を

畢竟平等なることは

諸佛三業莊嚴して

諸佛淨土をすゝめけり

無上の方便なりければ

畢竟成佛の道路にて

安樂佛國に生ずるは

智慧のうしほに一味なり

煩惱衆流歸しぬれば

大悲大願の海水に

煩惱衆流歸しぬれば

一一もかはることぞなき

無碍光如來の名號と

かの光明智相とは

無明長夜の闇を破し

衆生の志願をみてたまふ

不如實修行といへること

鸞師釋してのたまはく

一者信心あつからず

若存若亡するゆゑに

二者信心一ならず

決定なきゆゑなれば

三者信心相續せず

餘餘間故とのべたまふ

三信展轉相成す

行者こゝろをとむべし

信心あつからざるゆゑに

決定の信なかりけり

決定の信なきゆゑに

本師道綽禪師は

聖道萬行さしおきて

唯有淨土一門を

通入すべきみちととく

本師道綽大師は

涅槃の廣業さしおきて

本願他力をたのみつゝ

五濁の群生すゝめしむ

末法五濁の衆生は

聖道の修行せしむとも

ひとりも證をえじとこそ

教主世尊はときたまへ

戀師のおしへをうけつたへ

綽和尚はもろともに

在此起心立行は

此是自力とさだめたり

濁世の起惡造罪は

惡風驟雨にことならざる

これも雜修となつてぞ

千中無一ときらはるゝ

こゝろはひとつにあらねども

雜行雜修これにたり

淨土の行にあらぬをば

ひとへに雜行となづけたり

善導大師證をこひ

定散二心をひるがへし

貪瞋二河の譬喩をとき

弘願の信心守護せしむ

經道滅盡ときいたり

如來出世の本意なる

弘願眞宗にあひぬれば

凡夫念じてさとのるなり

佛法力の不思議には

諸邪業繫さはらねば

彌陀の本弘誓願を

増上縁となづけたり

世世に善導いでたまひ

法照少康としめしつゝ

功德藏をひらきてぞ

諸佛の本意とけたまふ

彌陀の名願によらざれば

百千萬劫すぐれども

いつゝのさはりはなれねば

女身をいかでか轉すべき

釋迦は要門ひらきつゝ

定散諸機をこしらへて

正雜二行方便し

ひとへに專修をすゝめしむ

助正ならべて修するをば

すなはち雜修となづけたり

一心をえざらんひとなれば

佛恩報するこゝろなし

佛號むねと修すれども

現世をいのる行者をば

ながく生死をすてはてゝ

自然の淨土にいたるなり

金剛堅固の信心の

さだまるときをまちえてぞ

彌陀の心光攝護して

ながく生死をへだてける

眞實信心えざるをば

一心かけぬとおしへたり

一心かけたるひとはみな

三信具せずとおもふべし

利他の信樂うるひとは

願に相應するゆゑに

教と佛語にしたがへば

外の雜縁さらになし

眞宗念佛きゝえつゝ

一念無疑なるをこそ

希有最勝人とほめ

正念をうとはさだめたれ

諸佛これらをあはれみて

すゝめて淨土に歸せしめり

一形惡をつくれども

專精にこゝろをかけしめて

つねに念佛せしむれば

諸障自然にのぞこりぬ

縱令一生造惡の

衆生引接のためにとて

稱我名字と願じつゝ

若不生者とちかひたり

已上道綽禪師

善導大師

付三釋文二

廿六首

大心海より化してこそ

善導和尚とおはしけれ

末代濁世のためにとて

十方諸佛に證をこふ

願力成就の報土には

自力の心行いたらねば

大小聖人みなながら

如來の弘誓に乗ずなり

煩惱具足と信知して

本願力に乗ずれば

すなはち穢身すてはてゝ

法性常樂證せしむ

釋迦彌陀は慈悲の父母

種種に善巧方便し

われらが無上の信心を

發起せしめたまひけり

眞心徹到するひとは

金剛心なりければ

三品の懺悔するひとゝ

ひとしと宗師はのたまへり

五濁惡世のわれらこそ

金剛の信心ばかりにて

本願相應せざるゆゑ

雜縁きたりみだるなり

信心亂失するをこそ

正念うすとはのべたまへ

信は願より生ずれば

念佛成佛自然なり

自然はすなはち報土なり

證大涅槃うたがはず

五濁増のときいたり

疑謗のともがらおほくして

道俗ともにあひきらひ

修するをみてはあだをなす

本願毀滅のともがらは

生盲闍提となづけたり

大地微塵劫をへて

ながく三途にしつむなり

西路を指授せしかども

自障障他せしほどに

化土にむまるゝ衆生をば

すくなからずとおしへたり

男女貴賤ことごとく

彌陀の名號稱するに

行住坐臥もゑらばれず

時處諸縁もさはりなし

煩惱にまなごさへられて

攝取の光明みざれども

大悲ものうきことなくて

つねにわが身をてらすなり

彌陀の報土をねがふひと

外儀のすがたはことなりと

本願名號信受して

寤寐にわすることなかれ

極悪深重の衆生は

他の方便さらになし

ひとへに彌陀を稱してぞ

淨土にむまるとのべたまふ

本師源信ねんごろに

一代佛教のそのなかに

念佛一門ひらきてぞ

濁世末代おしへける

靈山聽衆とおはしける

源信僧都のおしへには

報化二土をおしへてぞ

專雜の得失さだめたる

本師源信和尚は

懷感禪師の釋により

處胎經をひらきてぞ

懈慢界をばあらはせる

專修のひとをほむるには

千無一失とおしへたり

雜修のひとをきらふには

萬不一生とのべたまふ

報の淨土の往生は

おほからずとぞあらはせる

本師源空いまさすば

このたびむなしゝすぎなまし

源空三五のよはひにて

無常のことはりさとつゝ

厭離の素懷をあらはして

菩提のみにぞいらしめし

源空智行の至徳には

聖道諸宗の師主も

みなもろともに歸せしめて

一心金剛の戒師とす

源空存在せしときに

金色の光明はなたしむ

禪定博陸まのあたり

拜見せしめたまひけり

本師源空の本地をば

世俗のひとくゝあひつたへ

緯和尚と稱せしめ

あるひは善導としめしけり

曠劫已來もいたづらに

むなくこそはすぎにけれ

弘誓のちからをかふらすば

いづれのときにか娑婆をいでん

佛恩ふかくおもひつゝ

つねに彌陀を念ずべし

娑婆永劫の苦みすてゝ

淨土無爲を期すること

本師釋迦のちからなり

長時に慈恩を報すべし

已上善導大師

源信大師

付二釋文一

源信和尚のたまはく

われこれ故佛とあらはれて

化縁すでにつきぬれば

本土にかへるとしめしけり

已上源信大師

源空聖人

付二釋文一

本師源空世にいでゝ

弘願の一乗ひろめつゝ

日本一州ことごとく

淨土の機縁あらはれぬ

智慧光のちからより

本師源空あらはれて

淨土眞宗をひらきつゝ

選撰本願のべたまふ

善導源信すゝむとも

本師源空ひろめすば

片州濁世のともがらは

いかでか眞宗をさとらまし

曠劫多生のあひだにも

出離の強縁しらざりき

源空勢至と示現し

あるひは彌陀と顯現す

上皇群臣尊敬し

京夷庶民欽仰す

承久の太上法皇は

本師源空を歸敬しき

釋門儒林みなともに

ひとしく眞宗に悟入せり

諸佛方便ときいたり

源空ひじりとしめしつゝ

無上の信心おしへてぞ

涅槃のかどをばひらきける

眞の知識にあふことは

かたきがなかなほかたし

流轉輪廻のきはなきは

疑情のさはりにしくぞなき

源空光明はなたしめ

門徒につねにみせしめき

功德は行者の身にみてり

天竺

龍樹菩薩

震旦

曇鸞和尚

和朝

善導大師

源信和尚

已上七人

聖德太子

敏達天皇元年

正月一日誕生

當二佛滅後一千五百二十一年ニ

南無阿彌陀佛をとけるには

衆善海水のごとくなり

かの清淨の善身にえたり

ひとしく衆生に廻向せん

二七 正像末和讚

康元二歲丁巳二月九日夜

本師源空のおほりには

光明紫雲のごとくなり

音樂哀婉雅亮にて

異香みぎりに映芳す

道俗男女預參して

郷上雲客群集す

頭北面西右脇にて

如來涅槃の儀をまもる

本師源空命終時

建曆第二壬申歲

初春下旬第五日

淨土に還歸せしめけり

已上源空聖人

已上七高僧和讚 一百十七首

五濁惡世の衆生の

選擇本願信すれば

不可稱不可説不可思議の

寅時夢告云

彌陀の本願信すべし

本願信するひとはみな

攝取不捨の利益にて

無上覺をばさとするなり

正像末淨土和讚

愚禿善信集

釋迦如來かくれましゝて

二千餘年になりたまふ

正像の二時はおほりにき

如來の遺弟悲泣せよ

末法五濁の有情の

行證かなはぬときなれば

釋迦の遺法ことごとく

龍宮にいりたまひにき

正像末の三時には

彌陀の本願ひろまれり



有情の邪見熾盛にて
 叢林棘刺のごとくなり
 念佛の信者を疑謗して
 破壞瞋毒さかりなり
 命濁中天刹那にて
 依正二報滅亡し
 背正歸邪まさるゆる
 横にあだをぞをこしける
 末法第五の五百年
 この世の一切有情の
 如來の悲願を信ぜずば
 出離その期はなかるべし
 九十五種世をけがす
 唯佛一道きよくます
 菩提に到してのみぞ
 火宅の利益は自然なる
 五濁の時機いたりては
 道俗ともにあらそひて

念佛信するひとをみて
 疑謗破滅さかりなり
 菩提をうまじきひとはみな
 専修念佛にあだをなす
 頓教毀滅のしるしには
 生死の大海きはもなし
 正法の時機とおもへども
 底下の凡愚となれる身は
 清淨眞實のころなし
 發菩提心いかせん
 自力聖道の菩提心
 こころもことばもおよばれず
 常没流轉の凡愚は
 いかでか發起せしむべき
 三恒河沙の諸佛の
 出世のみもとにありしとき
 大菩提心をこそども
 自力かなはで流轉せり

像末五濁の世となりて
 釋迦の遺教かくれしむ
 彌陀の悲願ひろまりて
 念佛往生さかりなり
 超世無上に攝取し
 選擇五劫思惟して
 光明壽命の誓願を
 大悲の本としたまへり
 淨土の大菩提心は
 願作佛心をすめしむ
 すなはち願作佛心を
 度衆生心となづけたり
 度衆生心といふことは
 彌陀智願の廻向なり
 廻向の信樂うるひとは
 大槃涅槃をさとするなり
 如來の廻向に歸入して
 願作佛心をうるひとは

自力の廻向をすてはて、
 利益有情はきはもなし
 彌陀の智願海水に
 他力の信水いりぬれば
 眞實報土のならひにて
 煩惱菩提一味なり
 如來二種の廻向を
 ふかく信するひとはみな
 等正覺にいたるゆる
 憶念の心はたえぬなり
 彌陀智願の廻向の
 信樂まことにうるひとは
 攝取不捨の利益ゆる
 等正覺にいたるなり
 五十六億七千萬
 彌勒菩薩はとしをへん
 まことの信心うるひとは
 このたびさとひらくべし

念佛往生の願により
 等正覺にいたるひと
 すなはち彌勒におなじくて
 大槃涅槃をさとするべし
 眞實信心うるゆるに
 すなはち定聚にいりぬれば
 補處の彌勒におなじくて
 無上覺をさとするべし
 像法のときの智人も
 自力の諸教をさしおきて
 時機相應の法なれば
 念佛門にぞいらたまふ
 彌陀の尊號となへつゝ
 信樂まことにうるひとは
 憶念の心つねにして
 佛恩報ずるおもひあり
 五濁惡世の有情の
 選擇本願信すれば

不可稱不可說不可思議の
 功德は行者の身にみたり
 無碍光佛のみことには
 未來の有情利せんとして
 大勢至菩薩に
 智慧の念佛さづけしむ
 濁世の有情をあはれみて
 勢至念佛すめしむ
 信心のひとを攝取して
 淨土に歸入せしめけり
 釋迦彌陀の慈悲よりぞ
 願作佛心はえしめたる
 信心の智慧にいりてこそ
 佛恩報ずる身とはなれ
 智慧の念佛うることは
 法藏願力のなせるなり
 信心の智慧なかりせば
 いかでか涅槃をさとらまし

無明長夜の燈炬なり

智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり

罪障おもしろとなけかざれ

願力無窮にましますば

罪業深重もおもからず

佛智無邊にましますば

散亂放逸もすてられず

如來の作願をたづねれば

苦惱の有情をすてずして

廻向を首としたまひて

大悲心をば成就せり

眞實信心の稱名は

彌陀の廻向の法なれば

不廻向となづけてぞ

自力の稱念さらはるゝ

彌陀智願の廣海に

凡夫善惡の心水も

眞實信心うることは

末法濁世にまれなりと

恒沙の諸佛の證誠に

えがたきほどをあらはせり

往相廻向の廻向に

まうあはぬ身となりせば

流轉輪廻もきはもなし

苦海の沈淪いかゞせん

佛智不思議を信すれば

正定聚にこそ住しけれ

化生のひとは智慧すぐれ

無上覺をぞさとりける

不思議の佛智を信するを

報土の因としたまへり

信心の正因うることは

かたきがなかなほかたし

無始流轉の苦をすてゝ

無上涅槃を期すること

如來二種の廻向の

恩徳まことに謝しがたし

報土の信者はおほからず

化土の行者はかすおほし

自力の菩提かなはねば

久遠劫より流轉せり

南無阿彌陀佛の廻向の

恩徳廣大不思議にて

往相廻向の利益には

還相廻向に廻入せり

往相廻向の大慈より

還相廻向の大悲をう

如來の廻向なかりせば

淨土の菩提はいかゞせん

彌陀觀音大勢至

大願の船に乗じてぞ

生死のうみにうかみつゝ

有情をよばふてのせたまふ

彌陀大悲の誓願を

ふかく信ぜんひとはみな

ねてもさめてもへだてなく

南無阿彌陀佛をとなふべし

聖道門のひとはみな

自力の心をむねとして

他力の不思議にいりぬれば

義なきを義とすと信知せり

釋迦の教法ましますと

修すべき有情のなきゆるゑに

さとりうるもの末法に

一人もあらじときたまふ

三朝淨土の大師等

哀愍攝取したまひて

眞實信心すゝめしめ

定聚のくらるにいれしめよ

他力の信心うるひとを

うやまひおほきによるこべば

すなはちわが親友ぞと

教主世尊はほめたまふ

如來大悲の恩徳は

身を粉にしても報すべし

師主知識の恩徳も

ほねをくだきても謝すべし

已上正像末法和讚

五十八首

二八 疑惑和讚

不了佛智のしるしには

如來の諸智を疑惑して

罪福信じ善本を

たのめば邊地にとまるなり

佛智の不思議をうたがひて

自力の稱念このむゆるゑ

邊地懈慢にとゞまりて

佛恩報するこゝろなし

罪福信する行者は

佛智の不思議をうたがひて

疑城胎宮にとまれば

三寶にはなれたてまつる

佛智疑惑のつみにより

懈慢邊地にとまるなり

疑惑のつみのふかきゆゑ

年歲劫數をふるととく

轉輪皇の王子の

皇に つみをうるゆゑに

金鎖をもちてつなぎつゝ

牢獄に在るがごとくなり

自力稱名のひとはみな

如來の本願信ぜねば

うたがふつみのふかきゆゑ

七寶の獄にぞいましむる

信心のひとにおとらじと

はなはすなはちひらけねば

胎に處するにたとへたり

ときに慈氏菩薩の

世尊にまうしたまひけり

何因何緣いかなれば

胎生化生となづけたる

如來慈氏にのたまはく

疑惑の心をもちながら

善本修するをたのみにて

胎生邊地にとまれば

佛智疑惑のつみゆゑに

五百歳まで牢獄に

かたくいましめおはします

これを胎生とよきたまふ

佛智不思議をうたがひて

罪福信する有情は

宮殿にかならずむまれるば

胎生のもとよきたまふ

佛智を疑惑するゆゑに

胎生のは智慧もなし

胎宮にかならずむまるゝを

牢獄に在るとたとへたり

七寶の宮殿にむまれては

五百歳のとしをへて

三寶を見聞せざるゆゑ

有情利益はさらになし

邊地七寶の宮殿に

五百歳までいでずして

みづから過咎をなさしめて

もろもろの厄をうくるなり

罪福ふかく信じつゝ

善本修習するひとは

疑心の善人なるゆゑに

方便化土にとまるなり

彌陀の本願信ぜねば

疑惑を帯してむまれつゝ

佛智不思議の誓願を

聖德皇のめぐみにて

正定聚に歸入して

補處の彌勒のごとくなり

救世觀音大菩薩

聖德皇と示現して

多々のごとくすてずして

阿摩のごとくにそひたまふ

無始よりこのかたこの世まで

聖德皇のあはれみに

多々のごとくにそひたまひ

阿摩のごとくにおはします

聖德皇のあはれみて

佛智不思議の誓願に

すゝめいれしめたまひてぞ

住正定聚の身となれる

他力の信をえんひとは

佛恩報ぜんためにとて

二九 皇太子聖德奉讚

愚禿善信作

如來大悲の恩をしり

稱名念佛はけむべし

自力諸善のひとはみな

佛智の不思議をうたがへば

自業自得の道理にて

七寶の獄にぞいりにける

佛智不思議をうたがひて

善本徳本たのむひと

邊地懈慢にむまれるば

大慈大悲はえざりけり

本願疑惑の行者には

舍花未出のひともあり

或生邊地ときらひつゝ

或墮宮胎とすてらるゝ

如來の諸智を疑惑して

信ぜずながらなほもまた

罪福ふかく信じしめ

善本修習すぐれたり

自力の心をむねとして

不思議の佛智をたのまねば

胎宮にむまれて五百歳

三寶の慈悲にはなれたり

佛智の不思議を疑惑して

罪福信じ善本を

修して淨土をねがふをば

胎生といふとよきたまふ

佛智うたがふつみふかし

この心おもひしるならば

くゆるこゝろをむねとして

佛智の不思議をたのむべし

已上二十三首佛不思議の彌

陀の御ちかひをうたがふつ

みとがをしらせんとあらは

せるなり

如來二種の廻向を

十方にひとしくひろむべし

大慈救世聖德皇

父のごとくにおはします

大悲救世觀世音

母のごとくにおはします

久遠劫よりこの世まで

あはれみましますしるしには

佛智不思議につけしめて

善惡淨穢もなかりけり

和國の教主聖德皇

廣大恩德謝しがたし

一心に歸命したてまつり

奉讚不退ならしめよ

上宮皇子方便し

和國の有情をあはれみて

如來の悲願を弘宣せり

慶喜奉讚せしむべし

多生曠劫この世まで

あはれみかふれるこの身なり

一心歸命たえずして

奉讚ひまなくこのむべし

聖德皇のおあはれみに

護持養育たえずして

如來二種の廻向に

すゝめいれしめおはします

已上聖德奉讚
十一首

三〇 愚禿悲歎述懷

淨土眞宗に歸すれども

眞實の心はありがたし

虚假不實のわが身に

清淨の心もさらになし

外儀のすがたはひとごとくに

賢善精進現せしむ

貪瞋邪偽おほきゆる

奸詐もはし身にみてり

惡性さらにやめがたし

こゝろは蛇蝎のごとくなり

修善も雜毒なるゆゑに

虚假の行とぞなづけたる

無慚無愧のこの身に

まことのこゝろはなけれども

彌陀の廻向の御名なれば

功德は十方にみちたまふ

小慈小悲もなき身に

有情利益はおもふまじ

如來の願船いまさずば

苦海をいかでかわたるべき

蛇蝎奸詐のこゝろにて

自力修善はかなふまじ

如來の廻向をたのまでは

無慚無愧にてはてぞせん

佛法あなづるしるしには

比丘比丘尼を奴婢として

法師僧徒のたふとさも

僕従ものゝ名としたり

已上十六首これは愚禿が

かなしみなげきにして述

懐としたりこの世の本寺

本山のいみじき僧とまう

すも法師とまうすもうき

ことなり
釋親鸞書レ之

三一 善光寺如來和讚

善光寺の如來の

われらをあはれみましゝて

なにはのうらにきたります

御名をもしらぬ守屋にて

そのときほとをりけとぞまうしけ

五濁増のしるしには

この世の道俗ことごとく

外儀は佛敎のすがたにて

内心外道を歸敬せり

かなしきかなや道俗の

良時吉日えらばしめ

天神地祇をあがめつゝ

卜占祭祀つとめとす

僧ぞ法師のその御名は

たふときことゝきゝしかど

提婆五邪の法にて

いやしきものになづけたり

外道梵士尼乾志に

こゝろはかはらぬものとして

如來の法衣をつねにきて

一切鬼神をあがむめり

かなしきかなやこのころの

和國の道俗みなともに

疫癘あるひはこのゆゑと
 守屋がたぐひはみなともに
 ほとをりけとぞまうしける
 やすくすゝめんだめにとて
 ほとけと守屋がまうすゆるゑ
 ときの外道みなともに
 如來をほとけとさだめたり
 この世の佛法のひとはみな
 守屋がことばをもとゝして
 ほとけとまうすをたのみにて
 僧ぞ法師はいやしめり
 弓削の守屋の大連
 邪見きはまりなきゆるゑに
 よろづのものをすゝめんと
 やすくほとけとまうしけり

三三二 帖外和讃

四十八願成就して

正覺の阿彌陀となりたまふ
 たのみをかけしひとはみな
 往生かならずさだまりぬ
 極樂無爲の報土には
 雜行むまるゝことかたし
 如來要法をえらんでは
 專修の行ををしへしむ
 兆載永劫の修行は
 阿彌陀の三字にをさまれり
 五劫思惟の名號は
 五濁のわれらに付屬せり
 阿彌陀如來の三業は
 念佛行者の三業と
 彼此金剛の心なれば
 定聚のくらるにさだまりぬ
 多聞淨戒えらばれず
 破戒罪業さらはれず
 たゞよく念するひとのみぞ

已上帖外和讃

三三三 法華和讃

日蓮上人作

歸命妙法蓮華經
 一部八卷四七品
 迹門本門二ツにて
 序正流通分ちたり
 大恩教主釋尊の
 五十餘年の説法に
 法華は出世の本懐と
 顯はし説クこそ目出たけれ
 多寶如來無上尊
 在在世世に證明し
 其塔莊嚴あらたにて
 眼に雲路交はれり
 衆寶瓔珞露をたれ
 幡蓋風にひるがへる
 多摩羅跋香充滿し

喜見城には花ぞふる
 七寶塔の橋の下
 二世尊の御前にて
 一乘究竟ノ旨ナキ
 三德祕藏ノ教ナク
 隔歴三諦麤法也
 四十餘年異の方便
 圓融三諦妙法也
 法華眞實とこそ聞け
 一代五時の其中に
 一乘法華貴くて
 八萬寶藏にも勝れ
 已今當にも超過せり
 況や本門壽量の
 無數成道をとく事は
 一部の内にも猶祕して
 一會の衆にもはばかれり
 上行等の菩薩の

從地涌出せし時を
 補處の智惠ニハ誇ける
 彌勒だにも知らざりき
 千界塵數の菩薩の
 曠劫修行年久し
 其子頭の雪をつみ
 其父よはひさかなり
 百界千如萬法
 卽空卽假卽中
 三諦不思議の徳ありと
 説けるを妙法とは名ツク
 妙法更に外になし
 我等の一心とこそ聞ケ
 心佛衆生は一ツなる
 圓頓法華の妙理なり
 萬法一如と明すにぞ
 善惡更ニニツなき
 諸法實相と説くにこそ

十界共ニ一理なれ
 阿鼻の依正の苦ミにも
 毘盧の身土の樂ミにも
 圓融至極の法華には
 無二無別と説れたり
 然れば提婆が惡逆も
 天王如來となるときく
 龍女が五障の罪業も
 即身成佛するとみる
 開迹顯本本門に
 久遠成道するにこそ
 常在靈山事ふかき
 釋迦ハ久成ノ如來なれ
 在在處處の分身も
 世世番番の成道も
 釋尊一佛あはれみて
 三世の化導益廣し
 一念信解の功德は

常に三塗の惡道を
 栖としてのみ出やらす
 黒繩衆合に骨をやき
 刀山劍樹に肝をさく
 餓鬼となりては食にうる
 畜生愚癡の報もうし
 かゝる苦惱を受し身の
 しはらく三塗をまぬかれて
 たましく人身得たる時
 などが生死をいとほさる
 人の形に成たれと
 世間の希望たえすして
 身心苦惱することは
 地獄を出たるかひそなき
 物をほしかる心根は
 餓鬼の果報にたかはさる
 迭に害心おこすこと
 たゝ畜生にことならず

五波羅密の行ニこえ
 展轉五十の人モまた
 二乗ノ極果ニ勝れたり
 實に法華の眞文は
 あふ事うる事かたくして
 刹那も此經きく人の
 ひとりも佛にならぬなし
 慈尊三會の曉は
 五十六億はるかなり
 その程生死に輪廻して
 佛前佛後の衆生は
 一乘妙典たもたずば
 争でか出離の道をえん
 一度妙法きく人は
 三惡道のおそれなし
 大聖大慈大悲心
 思へば涙もとゞまらず
 大慈大悲大恩徳

此等の妄念おこしつゝ
 明ぬ暮ぬといそく身の
 五欲の絆につなかれて
 火宅を出すは憂かるへし
 千秋萬歳をくれとも
 たゝ電のあひたなり
 つなかね月日過行は
 死の期きたるは程もなし
 生老病死のくるしみは
 人をきらはぬ事なれば
 貴賤高下の隔なく
 貧富共にかれなし
 露の命のあるほとそ
 瑤の臺もみかくへき
 一度無常の風ふけは
 花のすかたも散はてぬ
 父母と妻子を始とし
 財寶所住にいたるまで

いつの劫にか報すべき
 ねがはくは此功德を
 普く自他にほどこして
 十界百界もろともに
 同ク佛道成就せん

三四 百利口語

一 遍上人作

六道輪廻の間には
 ともなふ人もなかりけり
 獨むまれて獨死す
 生死の道こそかなしけれ
 或は有頂の雲の上
 或は無間の獄の下
 善惡ふたつの業により
 いたらぬ柄はなかりけり
 然に人天善所には
 生をうることも有かたし

百千萬億皆なから
 此身をたにも打すてゝ
 たましの獨さらん時
 たれか冥途へをくるへき
 親類眷屬あつまりて
 屍を抱てさけへとも
 業にひかれて迷ゆく
 生死の夢はよもさめし
 かゝることはり聞しより
 身命財もおしからす
 妄境既にふりすてゝ
 獨ある身となり果ぬ
 曠劫多生の間には
 父母にあらざる者もなし
 萬の衆生を伴ひて
 はやく淨土にいたるへし
 無爲の境にいらんため
 すつるそ實の報恩よ

口になふる念佛を
普く衆生に施して
これこそ常の栖とて
いつくに宿を定めねと
さすかに家の多ければ
雨にうたるゝ事もなし
此身をやとす其程は
あるしも我も同じこと
終にうち捨ゆかんに
主かほしてなにかせん
本より火宅と知ぬれば
焼うすれとも騒かれず
荒たる處みゆれとも
つくろふ心さらになし
疊一疊しきぬれば
瘼とおもふ事もなし
念佛まうす起ふしは
妄念おこらぬ住居かな

よはるを痛む身ならねは
力のためとも願はれず
色の爲ともおもはねは
味たしむ事もなし
善惡ともに皆ながら
輪廻生死の業なれば
すへて三界六道に
羨ましき事さらになし
阿彌陀佛に歸命して
南無阿彌陀佛と唱ふれば
攝取の光に照されて
眞の奉事となるときは
觀音勢至の勝友あり
同朋もとめて何かせん
諸佛護念したまへは
一切横難おそれなし
かゝることはりしる事も
偏に佛の恩徳と

道場すへて無用なり
行住坐臥にたもちたる
南無阿彌陀佛の名號は
過たる此身の本尊なり
利欲の心すゝまねは
勸進聖もしたからず
五種の不淨を離ねは
說法せしとちかひてき
法主軌則をこのまねは
弟子の法師もほしからず
誰を檀那と頼まねは
人にへつらふ事もなし
暫く此身のある程そ
さすかに衣食は離ねと
それも前世の果報そと
いとなむ事も更になし
詞をつくし乞あるき
へつらひもとの願はねと

思へは歡喜せられつゝ
いよく念佛まうさるゝ
一切衆生のためならて
世をめぐりての詮もなし
一年熊野にまうてつゝ
證誠殿にまうせしに
あらたに夢相の告有て
それに任て過る身の
後生の爲に依怙もなし
平等利益の爲そかし
但し不淨をまろくして
終には土とすつる身を
信せん人も益あらし
謗せん人も罪あらし
口になふる名號は
不可思議功德なる故に
見聞覺知の人もみな
生死の夢をさますへし

僅に命をつくほとは

さすかに人こそ供養すれ
それもあたらずなり果は
飢死こそはせんすらめ
死して淨土に生れなは
殊勝の事こそ有へけれ
世間の出世もこのまねは
衣も常に定めなし
人の著するにまかせつゝ
わつらひなきを本とする
小袖帷子紙のきぬ
ふりたる蕤蕤のきれ
寒さふせかん爲なれば
有に任て身にまとふ
命をさゝゆる食物は
あたりつきたる其まゝに
死するを歎く身ならねは
病のためともきはれず

信謗共に利益せむ
他力不思議の名號は
無始本有の行體そ
始て修するとおもふなよ
本來佛性一如にて
迷悟の差別なきものを
そゝろに妄念おこしつゝ
迷とおもふそ不思議なる
然に彌陀の本誓は
まよひの衆生に施して
鈍根無智の爲なれば
智慧辯才もねかはれず
布施持戒をも願はれず
比丘の破戒もなげかれず
定散共に攝すれば
行住坐臥に障なし
善惡ともに隔ねは
惡業人もすてられず

雜善すへて生せねは
善根ほしともはけまれす
身の振舞にいろはねは
人目をかざる事もなし
心はからひたのまねは
さとのこゝろも絶果ぬ
諸佛の光明およはさる
無量壽佛の名號は
迷悟の法にあらされは
難思光佛とほめ給ふ
此法信樂する時に
佛も衆生も隔なく
彼此の三業捨離せねは
無礙光佛と申なり
すへて思量をとめつゝ
仰て佛に身をまかせ
出入息をかきりにて
南無阿彌陀佛と申へし

吾ガニハ不ト宣テ
夢殿局ヲ閉給ヒ
七日七夜音モセズ
八日ト云曉ニ
玉ノ机ニ經在ス
法師ニ告宣ク
是ナム實ノ持經ト
凡ソ入胎ヨリ始
慈顏隱レ給マデ
多ノ端相現ジテゾ
遠近見聞隨喜セシ
本是正法明如來
釋迦ニモ慈氏ニモ本師ナリ
十方ノ佛皆祖師
誰カハ所化ニ非ラム
安養界ニハ補處タリ
娑婆界ニハ無畏主
普賢塵數世界ニ

三五 聖德太子讚

思圓上人作

稽首大悲觀世音
隨類應現爲太子
降伏邪見興正法
稱利拔濟難思議
誕生シ給砌ニハ
光明西ヨリ來入リ
玉ノ姿ニ嚴シク
身ヨリ妙ナル香ゾ芬フ
始テ二ツニ成シ春
乳母ノ教ニ不隨ズ
首ヲ低テ手ヲ刃ヘ
南無佛トゾ唱ケル
童子ノ中ニ相交リ
形ヲ耶都志テシ御身ヲ
百濟國ノ賢聖僧

和光同塵量無シ
中ニモ日本國ノ内
佛教傳ハラザリケレバ
法水普クソソガムト
上宮門ニゾ出給フ
吾等ガ罪業重クシテ
五濁惡世ニ生レタリ
太子方便ナカリセバ
イカデカ縁ヲ結バマシ
歸命頂禮觀世音
無緣大悲能化ノ主
一言讚ムルヲ縁トシテ
引攝必垂給ヘ
願共諸衆生
往生安樂國
(延文四年權律師慶祐書寫本)

三六 眞言安心和讚

思圓上人作

座ヲ下リ庭ニ跪キ
救世觀音大菩薩
傳燈東方樂散王
恭敬禮拜スル時ゾ
人皆驚キ悟ヌル
推古王ノ御前ニテ
勝鬘大乘開演シ
碩學名徳問テ上ゲ
甚深奧義翳リナシ
講經畢ヘテノ夕ニハ
其地ニ蓮華雨リ敷テ
帝王彌ヨ信ヲ成シ
大臣公卿貴ビキ
法華ノ文字ヲ純ムト
妹子ノ卿ヲ使ニテ
大唐衡山般若寺ニ
昔ノ持經取ニ遣ル
妹子ガ渡セル經卷ハ

歸命頂禮大日尊
八葉四重の圓壇は
一切如來の祕要にて
衆生心地の曼荼なり
十方淨土の諸聖衆は
大日普門の萬徳を
開きて示せし尊なれば
密嚴國土の外ならず
青龍阿闍梨の教誠に
菩提を得るは易けれど
眞言祕密に逢ふことの
得がたきなりと演玉ふ
二佛出世の中間に
果報つたなく生るれど
いかなる宿世の種因にて
解脱の時を得たりけん
五濁惡世の此ごろも
上根勝慧の者ありて

如説に修行する時は
正像末のへだてなく
一念一時一生に
三密加持の不思議にて
無盡の功德圓滿し
即身成佛せらるなり
下根劣慧のともがらも
決定諦信いたしなば
一度神呪を唱ふるも
無明を除くと説玉ふ
一密おこたることなくば
増上縁の力にて
三密具足の時いたり
終には佛果を證すべし
過去に造りし報にて
盲聾暗啞の輩に
生れて法門きくことも
唱ふることもならぬ身は

一切衆生をことごとく
菩提の道にぞ入れ玉ふ
妙例の寶珠の利益には
此世をかけて未來まで
福壽意の如くにて
大安樂の身とぞなる
妙例唱ふるその人は
いかなる罪も消滅し
華の臺に招かれて
心の蓮を開くなり
香唱ふる光明に
無明變じて明となり
數多の我等を攝取して
有縁の淨土に置き玉ふ
妙例を唱ふれば
萬の願望成就して
佛も我等も隔なき
神通自在の身を得べし

諸佛の慈悲にも漏ぬべし
かゝる衆生を救ふには
他力の方便勝れたる
眞言陀羅尼にしくはなし
中にも光明眞言は
諸佛菩薩の總呪にて
一字に千理を含むゆる
無邊の功德備はれり
信じて唱ふるわれくは
口稱の功力を因として
往生淨土と一筋に
安心決定致すべし
南無大師遍照尊
南無大師遍照尊
南無大師遍照尊

三七 光明眞言和讚

思圓上人作

ふん字を唱ふる功力には
罪障深きわれくが
造りし地獄も破られて
忽ち淨土と成りぬべし
亡者の爲に呪を誦して
土砂をば加持し回向せば
極重惡のともがらも
速得解脱と説き玉ふ
眞言醍醐の妙教は
餘教超過の御法にて
無邊の功德具はれり
説くともいかで盡すべき
南無大師遍照尊
南無大師遍照尊
南無大師遍照尊

歸命頂禮大灌頂

光明眞言功德力

諸佛菩薩の光明を

二十三字に藏めたり

の一字を唱ふれば

三世の佛にことごとく

香華燈明飯食の

供養の功德具はれり

と唱ふる功力には

諸佛諸菩薩もろともに

二世の求願を得せしめて

衆生を助け玉ふなり

と唱ふれば

唱ふる我等がそのまゝに

大日如來の御身にて

説法し玉ふ姿なり

の大印は

生佛不二と印可して

三八 淨業和讚

目次 (卷上)

○晨朝 ○日中

○日没 ○初夜

○中夜 ○後夜

○補接 共惠心僧都撰

已上

晨朝讚

惠心僧都撰

初重遍數六時大同音調小異

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀

往生極樂コトバニハ
イヘドモ心ハトドマラズ

自カラココチニチガハシキ
一本脱ニ此句
コトニオモヒチ係ベシ
臨命終ノトキイタリ

西方界ノ虚空ヲ
ハルカニ見レバ大光雲

山ノゴトクシテオコラム
彌陀如來諸化佛

觀音勢至諸薩埵
無數ノ賢聖天人衆

ヒカリノ中ニミチミテリ
暮ノカゲノヒガシニ

ヤウヤク覆ガゴトクナリ
光雲ヤウヤク近ヅキテ

コエゴエ我ヲホメタマハム
ツヒニ引接シタマヒテ

金蓮臺ニ坐セシメ

スナハチ佛後ニシタガヒテ
安養淨土ニ往生セム

一日一夜ニハナヒラケ
一七日ニホトケチミ
三七日ニ了了ニ

見佛聞法具足セム
スナハチ本誓願ニヨリ

六時ニ佛事ヲ勤修セム
三小劫ヲ經テノチニ

百法明門サトルベシ
南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛

樂師瑠璃光佛

淨瑠璃淨土ニイタリテハ
マヅハ日光月光ノ

フタリノ大士ニ值遇セム
善德尊ノ國土ニハ
寶月童子ニ值遇セム

普賢尊ノ國土ニハ
無盡意ニ值遇セム

蓮華尊ノ國土ニハ
止蓋大士ニ值遇セム

滿月尊ノ國土ニハ
瑠璃光ニ值遇セム

須彌妙音無量聲
淨華宿王寶威德

須彌燈王不動智
吉祥普光妙藏佛

コレヲノ十萬億土ニモ
阿闍佛土ノゴトクセム

三重

第二日ニハ東南方

乃至十日上方界

光明國ニハ持法炬

衆香國ニハ無垢稱

梵音樹王廣衆德

十萬億佛マタオナジ

淨光界ニハ師子吼

照明界ニハ師子意

衆蓮華ニハ善住惠

雲雷音ニハ常啼等

金剛堅固歡喜佛

乃至賢德如來等

世界塵數ノ國土ニモ

普賢行願修習セム

願共諸衆生 往生安樂國

願共諸衆生 值遇彌陀尊

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

願以此功德 願平等施一切

同發菩提心 往生安樂國

長朝讚終

長朝引聲念佛

讚終念佛三遍日

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

願以此功德 願平等施一切

同發菩提心 往生安樂國

引聲念佛終

日中讚

念佛七遍如

他方界ヨリカヘリテハ

ツギニ飯食經行セム

アルヒハオノレガ坊ニマレ

アルヒハ衆會ノ堂ニマレ

七寶床座ヲナラベシキ

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

百味肴膳出現セム
迦葉尊者ノムロニモ
イマダミザル臥具シキ
賢護長者ノイヘニモ
アルコトマレナル飯食セム
上下ニツラナル人ハミナ
阿鞞跋致ノ大菩薩
十方佛土ニ名キコエ
無量劫ニモアヒガタシ
一子ノ慈悲平等ニ
他ノ利益ツチマズ
法師ノトガチアラハサズ
深法空ヲ愛樂シ
他ノ恭敬チガハズ
コレラノ功德ソナヘタリ
晝夜ニツチニアヒ見ツツ
コレラノ大士ヲトモトセン

念佛 七遍如
長朝

日沒讚

初重
念佛 七遍
如上
◎遊行スルコトヲハリテハ 常切アト呼古傳
◎晡時ニ住所ニカヘルベシ
トキニ世界コトゴトク
黄金ヒカリアラタナリ
所有ノコエニハオナジク
伽陀ヲトキテ讚テイハク
妙智清淨月
大悲無垢輪
一切悉施安
願垂照察我
コレラチアヤシミ思フホド
キケバヒトビト皆イハク

二重

念佛 七遍如
長朝

◎アルヒハ一ノ實地アリ
◎一生補處ノ大薩埵
菩薩衆會圍遶シ
念佛三昧トクトキニ
彌陀佛ノ所分身
十方界ニ遍滿シ
一切十方諸佛ノ
所有ノ分身マタオナジ
コノ法信樂スルモノハ
ナガク三途ノ苦ヲハナル
トキニソラニ聲アリテ
伽陀ヲ説テマウサマク
三重
往昔勤修多劫海
能轉衆生深重障
故能分身遍法界
悉現菩提樹王下

東方不動智佛ノ
金色世界ノ文殊師利
十佛世界微塵ノ
菩薩トモニ來至スト
イデテハルカニ見ヤレバ
金色相好圓滿シ
塵數ノ菩薩眷屬ハ
ソノカズ邊際ミエガタシ
コエゴエ天ノ樂奏シ
イロイロ寶ノハナ供ズ
トキニワレラ禮拜シ
合掌讚嘆シテイハク
二重
往昔在於娑婆國
遙聞大士大名稱
今見清淨功德身
是故一心歸命禮
句句ニシタガヒ數行ノ
ナミダハ雨ノゴトクフラム

アルヒハ一ノ實地アリ
一生補處ノ大薩埵
大小衆會圍繞シ
大小法門演說セム
坊坊ゴトニ所有ノ
宮殿樓閣人數等
七寶坊ニナゾラヘテ
多少儀式シルベシ
コレラノ五百億ノ坊
ヒトツノ界地ニツラナラム
コレラノ百千無數ノ界
極樂國ニミチミテラム
カクノゴトク處處チ經
大菩薩ニ親近シ
無數ノ佛法修學シ
無上道ニ増進セム
願共諸衆生 往生安樂國
願共諸衆生 值遇彌陀尊

南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
◎正士大悲觀世音
◎座ヨリタツテマウサマク
イマコノ大會ノ恆沙ノ衆
フカキココロニ渴仰セム
タダシホトケ大悲尊
大法雨チフリタマヘ
ホトケ時ヲシロシメシ
無數ノ法門トキタマハム
華嚴法界廣大教
隨機差別方等教
般若佛母實相教
平等大會一乘教
コレラノ法ヲトキタマヒ

乃至記シテノタマハク
 十方來正士
 吾悉知彼願
 志求嚴淨土
 受決當作佛
 通達諸法性
 一切空無我
 專求淨佛土
 必成如是刹
異無
 トキニ大衆法ヲキキテ
 イヨイヨ歡喜瞻仰セム
 目シバラクモステズシテ
 伽陀ヲ説テマウサマク
 面善圓淨如滿月
 威光猶如千日月
問有誦ニクヲラト右須レ檢
 聲如天鼓俱翅羅
 故我頂禮彌陀尊
コレヲノ無數ノ偈ヲモツテ

ホトケヲ讚ジタテマツラム
 スナハチトキニ自然ニ
 無數ノ妙花ミダレチリ
 一切天人コトゴトク
 タヘナル音樂奉奏セム
異作嬉
 所有ノ熙怡快樂等
 コトバチ以テノベガタシ
 ワレラモトモニ一座ニテ
 所作得益オナジカラム
 願共諸衆生 往生安樂國
 願共諸衆生 值遇彌陀尊
 念佛 如上
 日沒讚終

初夜讚 無中略

初重
 念佛 如上
見佛開法コトヲヘテ

①モトノ坊ニカヘルベシ
 アルヒハ金蓮華ノナカ
 金色淨土ノゴトクナリ
 アルヒハ瑠璃閣ノウチ
 淨瑠璃淨土ノゴトクナリ
 アルヒハ衆寶樓ノウヘ
 七寶淨土ノゴトクナリ
 寶帳臥具莊嚴等
 ココロノゴトク具足シ
 多少ネガヒニシタガヒテ
 天ノ童子給仕セム
 前後左右ニ無量ノ
 天人聖衆オホケレド
 タガヒニ一子ノゴトクシテ
 ココロニサカフルコトゾナキ

二重 五遍如 日沒

②ヤウヤク初夜ニナルホドニ

初夜讚終

中夜讚

初重
 念佛 七遍大同
 音調小異
 ①夜ノサカヒシヅカニテ
 ②ヤウヤク中夜ニイタルホド
 三五ノヒトビト共ニ出テ
 金繩階道アユミツツ
 衆寶國土ノ境界ノ
 寂靜安樂ナルヲ見ム
 ヒカリモコエモシヅカニテ
 ヒルノサカヒニコトナラズ
 琪樹ノシゲレルアヒダニハ
 宮殿ヒカリアキラケシ
 瑤池ノスメルソコニハ
 金銀イサゴテラセリ
 洲鶴ネブリテハルノミヅ

①佛法僧ヲ念ズベシ
 ハジメハホトケノ所有ノ徳
異作乘
 大定智慧神通等
 無數ノ佛事ヲオモフコト
 徳雲比丘ノゴトクセム
 ツギニハ甚深般若ノ理
ヒツキヤクワ
 讀誦思惟修習シ
 畢竟空ヲテラスコト
 善現比丘ノゴトクセム
 ノチニハ觀音大悲主
ゴフチリン
 三昧月輪現前シ
 衆生利益スルコト
恐幢乎
 海童比丘ノゴトクセム
 ホトケノ威神加被ニテ
 大悲般若相應シ
 無數ノ光明身ヨリ出テ
 十方國土ニ周遍セム
 光リノナカニハアマネク

一切色身變現シ
 所有ノ色身コトゴトク
 一切衆生利益セム
 三重
 アルトキニハ大勢至
 念佛三昧トキタマハム
一作衆
 アルトキニハ金剛手
 般若理趣トキタマハム
 アルトキニハ觀世音
 大悲法門トキタマハム
 カクノゴトキ大聖衆
シヤウジユ
 常ニキタリテ慰誘セム
 願共諸衆生 往生安樂國
 願共諸衆生 值遇彌陀尊
 ①南無阿彌陀佛
 ②南無阿彌陀佛
已上四遍齊ニ初夜時一
 南無阿彌陀
已下七遍如ニ通贊ニ故今略レ之
 ③南無阿彌陀佛

娑婆ノフルキサトニオナジシ
塞鴻ナキテアキノカゼ
閻浮ノムカシノ日ニ似タリ

二重 念佛 如長朝 七遍

①乃至靈山法華會

②ミルコト在世ノゴトクセム

六瑞記荊ヲハリテハ

多寶出現證明セム

三變淨土莊嚴シ

十方分身集會セム

異作踴又有誦地獄者音義須レ扱
地涌禮讚スルアヒダ

五十小劫經歷シ

久遠成道キクトキニ

利益供養希有ナラム

神力囑累シタマフニ

カウベチカタブケ聽受セム

妙音觀音普賢等

中夜讚終

後夜讚 無中略

初重 念佛 如上 七遍

①曉イタリテナミノオト

②コガネノ岸ニヨスルホド

アケナムトスレバ風ノオト

珠ノスダレチスグルアヒダ

後夜ノ時分キタリテハ

佛法僧ヲ念ズベシ

所有ノ行狀コトゴトク

初夜ノゴトクシルベシ

カクノゴトキ六時ノ行

大途タイヘバシカナリ

別縁アラムトキニハ

ホシキママニ行ズベシ

三重

國土ユタカニ民アツク

佛法サラニサカリニテ

タノシキコトヲウタヒイフ

安穩無垢ノ界ナラム

乃至彌勒樓至マデ

出世ニカナラズ值遇セム

念佛ヒトツノチカラニテ

コレラノコトヲ成ズベシ

ヨロゾノコトヲナグステテ

彌陀ヲ念ジタテマツラム

願共諸衆生 往生安樂國

願共諸衆生 值遇彌陀尊

念佛 如通讚 七遍

後夜讚終

往生極樂コトバニハ

至乃 百法明門サトルベシ

アシタニ定ヨリ出ルホド

ホノカニ天ノ樂キケバ

十方諸佛如來ノ

所有ノ功德ヲ讚嘆セム

定ヨリイデテ見ヤレバ

タカラノハチス空ニフル

黄金瑠璃ノニハニデテ

ヒトビト俱ニハナナトル

マヅハ教主世尊ノ

御マヘニマナリテサフラヘバ

ハジメテ定ヨリタチタマヒ

體相威儀イツクシク

紫磨金ノ尊容ハ

アキノ月ノクモリナク

無數ノ光明アラタニテ

國家アマネクアキラケシ

晨朝讚補接

補接者中略文也故
每贊揭上半及下半
首尾句以爲
符節應知

宮殿樓閣ヨロヅノイロ
タガヒニ照シカガヤケリ
アシタノ日ノ雲ヲ出テ
ハルカニテラスガ如クナリ
左右ノ觀音大勢至
無數ノ恆沙ノ大菩薩
一切聲聞賢聖衆
タフトク御カホテ瞻仰セム
ワレラ天ノハナチモテ
ホトケノ御ウヘニ供散セム
ソラノナカニミチミチテ
アマネク大會ニオヨボサム
ツギニ加被ヲカウフリテ
十方諸佛供養セム
アルヒハ五六十二
乃至百千結緣者
虚空界ヲトビスギテ
歡喜國ヲサシテユカム

コレラノオホクノ偈ヲ以テ
佛ノ功德ヲ讚嘆セム
トキニ佛ノタマハク
善哉善哉ナムダチト
スナハチタメニ法ヲトキ
示教利喜シタマハム
カノ會ノ大衆ミナイハク
イマミルコレラノ菩薩ハ
イヅレノ國ヨリキタレルゾ
カノクニイカナル國土ゾ
佛ツゲテノタマハク
ナムダチシラズヤコノ人ハ
西方極樂世界ノ
阿彌陀佛ノ弟子ナリト
ホトケワレラニ告タマハム
極樂淨土ノ相説ト
スナハチ佛ニマウサマク
ワレガ本師釋迦牟尼ノ

トキニソラニ聲アリテ
彌陀佛ヲ稱念セム
カシコニ到リテハリテハ
實地ヲアユミテススミユカム
ミチノアヒダノ左右ニハ
寶樹寶池宮殿寺
無數ノタカラヲ莊嚴シ
人天充ミチ往來セム
マズハ香象白香象
コレラノ大士ニ値遇セム
カウベヲカタブケ手ヲアザエ
禮拜讚嘆シテイハク
往昔在於娑婆國
遙聞大士大名稱
今見清淨功德身
是故一心歸命禮
句句ニシタガヒ數行ノ
ナミダハアメノ如クワラス

所説經法受持セリ
彼ヲキカバシリナムト
スナハチ今日受持スル
阿彌陀經ヲ誦スベシ
トキニ大衆歡喜シテ
意ニオモヒ口ニイハク
娑婆一作レ國ハイカナル國土ゾ
釋迦ハイマスヤイカニト
ホトケ告テノタマハク
娑婆ハ穢惡ノ國土ナリ
衆生三障オモクシテ
難化ノ衆生ミチミテリ
タ、シ釋迦大悲尊
カレラヲ教化シタマヘリ
釋迦ハ滅シタマヒニキ
所化ハ十方佛所ニアリ
オヨソ難化ヲ度スコト
カノ佛ニハオヨバズ

菩薩スナハチ我ヲヒキ

阿闍佛所ニイタラシム
スナハチ所持ノ花ヲモテ
如來大會ニ供散セム
五體ヲ地ニナゲ頂禮シ
ホトケヲ讚テマウサマク
敬禮天人大覺尊
恆沙福智皆圓滿
因緣果滿成正覺
住壽凝然無去來
衆生沒在生死海
輪回五趣無出期
善逝恆爲妙法船
能截愛流超彼岸
願於來世恆沙劫
念念不捨天人師
如影隨形不暫離
晝夜勤修於種智

乃至名字ヲキクモノモ
カナラズ阿鞞跋致ヲ得
カノトキ阿闍トイヒシハ
ワガ身スナハチコレナリ
カノ日ノ文殊等ハマタ
今ワガゴノ會ノ中ニアリ
トキニ大衆コレヲキキテ
オホヒニ歡喜シテイハク
善哉善哉大牟尼
難化能化大聖衆
所化利益無窮盡
大悲方便不可量
善哉汝等衆
隨順如來教
永離穢惡土
往生安樂國
トキニ彼會ノ人天等
佛ノ加被ヲカウフリテ

極樂淨土ニ往詣シ

彌陀佛ヲ供養セム

ワレヲ見キクコトヲハリテ

涙ヲ流シテ歡喜セム

佛ヲ百千匝メグリ

禮ヲナシテサルベシ

藥師瑠璃光佛ノ

至普賢行願修習セム

晨朝讚補接終

日中讚補接

他方界ヨリカヘリテハ

至コレヲノ大士ヲトモトセム

飯食スデニテハリテハ

座ヨリ立テ經行シ

オホクモスコシモオノガ志志

處處ニ徘徊遊戯セム

若法非法無妄想

推求諸法無所有

覺了名色如實性

彼行於世無染着

アルヒハ飛梯ニテモアレ

アルヒハ高樓ニテモアレ

コレヲノ音樂シラベツツ

無漏ノサカヒニ娛樂セム

天冠大樹迦葉等

トキドキ來リテ證成セム

アルヒハイサゴニタハブレテ

神通智慧ヲ顯現シ

三世ノ法ヲサトルコト

自在童子ノゴトクセム

アルヒハソラニ經行シ

讀誦思惟演說セム

天人恭敬スルコト

善住比丘ノゴトクセム

七重寶樹ノカゼニハ

一實相ノ理ヲシラベム

貪欲瞋恚及愚癡

空無相願悉平等

生死涅槃無差別

佛法僧寶亦無二

貪欲即是道

悲癡亦復然

如此三事中

無量諸佛道

八功德池ノナミニハ

無生滅ノ義ヲトナヘム

一切諸法本性淨

去來現在亦復然

若觀諸法無生滅

是人即得眞實智

諸法不自在

亦不從他生

アルヒハ林池ノアヒダニテ

菩薩集會ニアヒマジリ

神通說法禪定等

所有ノ事事ニ供奉セム

アルヒハ無數ノ賢聖等

トモニヤウヤク遊行セム

ムカフカタニハ億千歲

カヘラムコトモワスラレヌ

カクノゴトク處處ニ

遊戯快樂スルコトヲ

ハルカニタガヒニアヒ見ツツ

イヨイヨ歡喜欣悅セム

ムカシハ無常苦空ヲ

ワレモ人モウレヘキ

イマハ常樂我淨ヲ

チカクモトホクモウケタリ

ツギニヤウヤク坊坊ニ

ネガヒニ隨ヒイタリツツ

不共不無因

是故說無生

コガネノ濱ヨリアユメバ

鳥雁鴛鴦ナレタリ

玉ノウテナニオモムケバ

孔雀鸚鵡シタガヘリ

アルヒハ宮殿樓閣ニ

ノボリテ他方界ナミム

アルヒハ天人聖衆ニ

交リテ伎樂歌詠セム

香山カクセ大樹キナナ緊那羅ノ

瑠璃ノ琴ニナゾラヘテ

管絃歌舞ノ曲ニハ

法性眞如ヲトナフベシ

一切諸法向寂滅

無生無滅無毀壞

寂靜安樂無所得

如是異作百白法令顯現

菩薩大士ノ種種ニ

佛事ヲナスヲ見聞セム

アル地ハ七寶合成セリ

寶樹寶池宮殿等

所有ノ境界コトゴトク

無數ノ光明カガヤケリ

大寶殿ノナカニシテ

百ノ樓觀具足セリ

樓觀ゴトニモモノ臺

臺閣ゴトニナナツノ坊

坊室一作寶ゴトニ七菩薩

菩薩ゴトニ七眷屬

コノホカ人物マタオホシ

イクバクナリト知リガタシ

大寶殿ノウチニハ

一生補處ノ大薩埵

百千萬ノ菩薩衆

前後左右ニ圍繞シ

晝夜ニツネニ大乘ノ
不退轉ノ行ヲトカム
水鳥樹林羅網等
ソノコエ同クシラベトカム
ワレラハ大士ヲ頂禮シ
無數ノ功德ヲ讚嘆セム
大士ハワレヲ慈愍シ
無數ノ軟語ヲ宣暢セム
衆人問訊歷誘シテ
ススメテ法ヲキカシメム
ナホ彼七寶世界ニ
イタレルトキノ如クナラム
アル地ハモツバラ金ニテ
寶樹寶池宮殿等
所有ノ境界コトゴトク
金ノヒカリテリミテリ
一生補處ノ大菩薩
羅漢聖衆圍繞シ

四諦十六行ノ法

ネガヒニシタガヒ宣說セム
ナホカノ黄金世界ニ
イタレルトキノ如クナラム
アル地ハモツバラ白銀ノ
鮮白無垢ノヒカリアリ
頗梨雪山トイフトモ
タトヘトセムコト得ベカラズ
一生補處ノ大菩薩
支佛大衆圍繞シ
十二緣起ノ法門ヲ
ネガヒニシタガヒ宣說セム
ナホカノ白銀世界ニ
イタレルトキノ如クナラム
アルヒハ一ノ寶地アリ
一生補處ノ大菩薩
菩薩大衆圍繞シ
法性不二ノ理ヲトクニ

自界他方所有ノ
自身他身情非情
乃至草木樹林等
一切ミナコレホトケナリ
相好具シテ法ヲトキ
ソノ餘ノ色像目ニ見エズ
スナハチシリヌ諸法ハ
本ヨリスナハチ幻化ナリ
トキニソラニコエアリテ
伽陀ヲ説テマウサマク
法界體性無差別
森羅萬像即佛身
不見菩提外有法
是故我禮一切塵
アルヒハ一ノ寶地アリ
無上道ニ増進セム
日中讚補接終

日沒讚補接

遊行スルコトヲハリテハ
乃 ナミダハ雨ノゴトクフラム
至 アルヒハ國界コトゴトク
白銀ヒカリサカリナリ
所有ノコエニハオナジク
普賢行ヲ讚嘆セム
キケバヒトビトミナイハク
普賢大士來至スト
見レバ塵數ノ大菩薩
天龍八部圍繞シ
無數ノ華香供散シ
無數ノ伎樂奉奏ス
所有ノ威光儀式等
眼界ハルカニヘダタレリ
スナハチ禮讚スルコト
マヘノゴトクシルベシ

アルヒハ國界コトゴトク

無數ノ光明テリミテリ
所有ノコエニハオナジク
一生補處ノ行ヲ讚ム
キケバヒトビトミナイハク
娑婆世界兜率天
四十九重摩尼殿
一生補處ノ慈氏尊
塵數ノ菩薩天人衆
前後ニヒキキテ來至スト
アルヒハ國界コトゴトク
無數ノ大雲遍滿シ
一切人人自然ニ
如意寶珠ヲ手ニモテリ
所有ノコエニハオナジク
大士ノ行ヲホメテイハク
現作種種身
爲衆生說法

具足施功德

悲愍諸衆生
キケバ地藏大薩埵
無數ノ眷屬モロトモニ
聲聞出家ノカタチニテ
イマ亦ココニ來至スト
アルヒハ國界コトゴトク
虛空界ノゴトクナリ
タバシホトケノ所住ノ
大寶莊嚴堂ノホカ
宮殿林池情非情
一切色相ミナムナシ
所有ノ聲ニハオナジク
畢竟空ヲトキテイハク
陰人諸界如幻化
三界皆如水中月
衆生虛偽性如夢
以智分別說是法

キケバ西方香集界
 勝花敷藏如來ノ一作菩薩
 大虚空大薩埵
 無數ノ大士ト來至スト
 アルヒハ國界コトゴトク
 大水アマネク盈滿シ
 乃至カミハ色究竟
 ヒトツノ大海水トミユ
異無
 タゞシ所有ノ一切事
 衆生作業往來等
 ミナマタモトノ如クシテ一作ニ
 燒害スルコト全クナシ
 キケバ下方莊嚴國
 海智神通如來ノ
 海惠菩薩大薩埵
 無數ノ大士ト來至スト
 アルヒハ國界コトゴトク
異作レ普
 希有ノ神變示現ス

須彌ヲ芥子ノナカニイレ
 大千界ヲトホクナゲ
 恆沙ノ佛土ヲチカクミル
 コレヲノ希有ノコトオホシ
 所有ノコエニハオナジク
ジャクダケ
 上求下化ヲホメテイハク
異作レ離智
 雖知諸佛國
 及與衆生空
 而常修淨土
 教化於群生
 キケバ娑婆世界ノ
ナシシテ
 南瞻浮洲中天竺
 毘舍離城ニ住セリシ
 維摩居士來至スト
 オドロキイデテ見タトキニ
一作ス
 ヒトリノ老人行步ツツ
 カウベニ蓮花ノカウフリシ
一作ヌ
 身ニハアカキ衰ヲキ

テニハ白拂トリモチテ
ビヤクホフ
 ヒトリノ天人シタガヘリ
ニシニ
 人人尊重スルコト
フダシ
 普賢文殊ニコトナラズ
 トキニワレラコレヲ見テ
 禮讚スルコトマヘニオナジ
一作ニ如是如是
 カクノゴトク除蓋障
 藥王藥上跋陀婆羅
 扶掘花聚山海惠
 十方恆沙ノ大菩薩
 威儀形相任意ニテ
ギヤクウ
 ホトケノ御マヘニ雲集シ
ゲシジャウ
 自界塵數ノ賢聖モ
シフエ
 オナジクトモニ集會セム
 アルヒハ行路ノアヒダニモ
 アルヒハ集會ノナカニテモ
 自土他方諸聖衆
 タガヒニアヒ見テ恭敬セム

所有ノ名稱德行ヲ
 カタラヒアヒテマウサマク
 善哉ヒサシクキキツル
 コレヲノ大士ヲ今日ミルト
 爾時化主彌陀尊
 大寶蓮花ノ上ニシテ
 萬德恆沙由旬ノ
 身量眼モオヨバレズ
マナコ
 マユノアヒダノ白毫ハ
ビキクガワ
 イツツノ須彌ヲアツメタリ
 マナコノウチノ青蓮ハ
 四大海ヲタトヘタリ
 カウベヲメグルル圓光ハ
 百億三千界ノホド
 無數ノ化佛菩薩衆
 ヒカリノナカニミチミテリ
 身光無量無數ニテ
 十方界ヲテラセリ

億千萬ノ日月ヲ
 和合セルニモスギタリ
 一切菩薩大聖等
 相好光明具セレドモ
 ホトケノ御マヘニイタレバ
一作墨聚
 ナホシ聚墨ノゴトクナリ
 トキニ大衆一心ニ
 ホトケノ御カホテ瞻仰セム
センガウ
 アルヒハ極樂界ヲ見テ
 ワガ土モシカラムト願ハム
 正士大悲觀世音
シヨツトヤク
 至所作得益オナジカラム
 日沒讚補接終

中夜讚補接

夜ノサカヒシヅカニテ
 乃閣浮ノムカシノ日ニ似タリ
ヒニ
 ヤウヤク佛所ニチカヅキテ

目ヲアゲ瞻メグラセバ一本有リ字
一作ニ
 中臺高廣寶纒等
 無數ノ莊嚴具足セリ
 寶帳寶網寶幡蓋
 寶鐸寶鈴寶瓔珞
 コレヲヲメグリテ億千ノ
 宮殿樓閣莊嚴具
 上下四方重重ニ
 光明テラシカガヤケリ
 中央最上地ノウヘニ
 大寶蓮花王ノ座アリ
一作レト
 毘楞伽寶臺ヲナシ
 百寶色相葉ニ具セリ
 八萬四千葉アリテ
 無量妙寶ソナハレリ
 葉葉ゴトニ百億ノ
 大寶摩尼ヲカザレリ
 一一ノタマニハコトゴトク

千ノ光明テラセリ
 シルベシ八萬四千ノ
 大千界ノ日輪ヲ
 アツメタルガゴトクシテ
 無漏ノ萬德莊嚴ス
 如來コノ座ノウヘニシテ
 大寂定ニイリタマヒ
 相好圓滿シタマヒテ
 金山王ノゴトクナリ
 左右ノフタツノ寶座ニハ
 觀音勢至マシマサム
 ホトケノ加被ニアラズハ
 コノ地ヲ蹈モノアリガタシ
 ツギニメクリテ實地アリ
 普賢文殊虛空藏
 彌勒除蓋金剛手
 地藏千手觀世音
 等覺無垢ノ大眷屬

恆沙ノ衆會圍繞シ
 一生補處ニアラズバ
 コノ地ヲフムモノアリガタシ
 ツギニメクリテ實地アリ
 四十一地ノ内眷屬
 佛刹塵數ノ大菩薩
 重重恭敬圍繞セリ
 百法明門サトラズバ
 コノ地ヲフムモノアリガタシ
 ツギニメクリテ實地アリ
 地前賢聖天人等
 百千佛刹微塵ノ
 外眷屬衆圍繞セリ
 見佛聞法緣ナクバ
 コノ地ヲフムコトアリガタシ
 所有ノイロニハアマネク
 圓融法界アヒ現ジ
 所有ノコエニハコトゴトク

甚深妙法宣說セム
 三聚淨戒香熏ジ
 三解脱門カゼスズシ
 コノトキ心境自然ニ
 寂滅眞如ヒトツナリ
 坊坊莊嚴タヘナレド
 ホトケノ御前ニノゾムレバ
 善現宮ト日月ト
 タグヘテ見ルガゴトクナリ
 スデニ御前ニイタリテハ
 合掌恭敬瞻仰セム
 コエヲバタテズ心中ニ
 ホトケノ功德ヲ讚嘆セム
 烏瑟ミドリコマヤカニ
 空界ハルカニツラナレリ
 白毫ヒカリマトカニテ
 月輪タカクカカリタリ
 眼晴青蓮アザヤカニ

一作目
 面門頽婆ウルハシク
 寂靜安樂解脱ノ
 體相神德ヨリヨリニ
 イロイロ八萬四千ノ
 相好光明ホガラカニ
 十方界ノ念佛者
 ヒカリノナカニ攝取セリ
 大慈大悲コレ無緣
 衆生スナハチ一子ナリ
 大定大智コレ無際
 辨說スナハチ微妙ナリ
 普現色身無邊ニ
 六通自在無礙ナリ
 法報應化圓滿シ
 法報應化圓滿シ
 佛種法海具足セリ
 自ナク他ナク一異ナク
 是非言說遠離セリ
 オモヘバ心行オヨバレズ

瞻レバ眼路モキハマラズ
 ハチスノイトヲ大千ニ
 カケタルガゴトクノミ
 トキニ悲喜マジハリテ
 オツルナミダモトマラズ
 スナハチ禮讚ヲハリテハ
 ヤウヤウミチニカヘルベシ
 タガヒニマヘノコトチイヒ
 オナジク踊躍歡喜セム
 ムカシ娑婆ニアリシトキ
 師子吼ノ偈ヲ聞キニ
 我等無數百千劫
 修四無量三解脱
 今見大聖牟尼尊
 猶如盲龜值浮木
 オモヒキ佛ヲミムコトハ
 優曇花ニモスギタリト
 シラズワレラ往昔ニ

イカナル因緣アリテカハ
 一世ノ念佛力ニヨリ
 無量光ニアヘリト
 カヘルミチノ左右ニハ
 アヤシクタヘナルコトオホシ
 寶樹寶池宮殿等
 コレラノアヒダノ境界ニ
 念佛念法念僧衆
 コレラノ功德増進セム
 多百間ノタカラノ廊
 坊坊ゴトニメグレリ
 無數ノ天人賢聖衆
 内外ニ寶座ヲツラネタリ
 アルヒハ伎樂歌詠シ
 アルヒハ說法決擇シ
 アルヒハ寂然宴嘿シ
 隨意ノ所行コレオホシ
 アルヒハタカラノ樓ノウヘ

ヒトリノ大聖マシマサム
 アルヒハ二三十二
 多少コノミニマカセリ
 ワレラトモニイタリツツ
 禮拜恭敬尊重シ
 菩薩道ヲナラフコト
 善財童子ノゴトクセム
 異作哉
 イサゴノツツミ玉ノハシ
 所所ニ衆鳥和鳴ス
 アルヒハ伽陵頻伽等
 佛事ヲウタフ處アリ
 十力無畏三念住
 大慈大悲不共法
 アルヒハ孔雀鸚鵡等
 法門唱ルトコロアリ
 五根五力七覺支
 六度四攝無量法
 住處ニカヘリイタリテハ

タノシミ希有ノコト現ゼム
 アルヒハ寶樹寶蓋ニ
 釋迦ノ一化ヲ見ルコト得ム
 高山頓說華嚴教
 入法界會マデニイタリ
 一作哉
 善財大士ノ善知識
 文殊海童功德雲
 恐障乎
 明智寶髻毗目舍
 具足慈行婆須蜜
 勝熱無厭妙月等
 コレヲノ大士ニ親近セム
 アルトキハ現ズベシ
 鹿野苑ノ轉法輪
 一作レ
 麤弊垢膩ノ能化ノ相
 一作レ
 客作窮子ノ所化ノ行
 乃至靈山法華會
 乃阿難尊者ノゴトクセム
 中夜讚補接終

淨業和讚

目次 (中卷)

●來迎 常課	●別願	九日
●往生	●弘願	廿三日
●稱揚	●六道	廿七日
●寶蓮	●莊嚴	廿八日
●光陰	●大入	五日
●二教	●拾要	十一日
●小經	●前朔	十五日
●已上	●廿四日	廿八日

來迎讚

惠心僧都撰

初重
 南無阿彌陀佛
 南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

已上五遍似急忙一故今加三遍

南無阿彌陀佛

總統

伎樂歌詠ノカナリ

見レバミドリノ山ノハニ

光雲ハルカニカガヤケリ

此トキ身心ヤスクシテ

念佛三昧現前シ

毫光ワガミヲテラシテ

無始ノ罪障消滅セム

尊光雲ヤウヤク近ヅキテ

瞻仰スレバ彌陀尊

相好圓滿シタマヒテ

金山王ノゴトクナリ

内 觀鳥瑟ヲカクアラハレテ

ハレノ天ニミドリナリ

白毫ミギニメグリテ

マユノアヒダニカガヤケリ

外 管絃歌舞ノ菩薩ハ

雲ニソデテヒルガヘシ

持幡供花ノ莊嚴ハ

風ニマカセテミダレタリ

内 南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

二重

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

外 觀音勢至諸薩埵

外 ヒカリノ中ニミチミテリ

オノオノ威徳アラハシテ

コエゴエワレテ讚タマフ

内 眼ニミテル慈悲ノイロ

オツル涙モトドマラズ

耳ニキコユルノリノコエ

歡喜ノココロイクバクゾ

外 則チ紫雲タナビキテ

シバノトボソニタチメグリ

恒沙ノ衆會モロトモニ

前後左右ニチリタマフ

内 庵ノウヘニハ諸化佛

ホシヲツラネテ影向シ

コケノニハニハ諸聖衆

ヒカリヲナラベテ長跪セリ

外 伎樂ノ菩薩コノトキニ

踊躍歡喜ヤスカラズ

絲竹ノシラベ雲ヲワケ

徘徊ヨソホヒ地ヲテラス

内 ①時ニ大悲觀世音

ヤウヤクアユミ近ヅキテ

紫磨金ノ身ヲマゲテ

蓮臺カタブケヨセタマフ

外 ②次ニ勢至大薩埵

聖衆同時ニ讚嘆シ

大定智慧ノ手ヲノベテ

行者ノカウベチナデタマフ

内 南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

三重 南無阿彌陀佛

③南無阿彌陀佛

外 南無阿彌陀佛

内 南無阿彌陀佛

南無阿彌陀

④ツヒニ引接シタマヒテ

外 ⑤金蓮臺ニノセタマフ

内 輪廻生死ノフルキサト

コノトキ永クヘダタリヌ

外 ⑥昔ハ大悲ノ利益ヲ

ワツカニ傳ヘテキキシカド

内 今ハ彌陀ノ引接ヲ

ココロノママニカウフレリ

内外 異院此四句ヲシテ

⑦ワガ身ハ業障オモクシテ

戒光キエテヤミフカシ

佛日ハルカニテラサズバ

イヨイヨ長夜ニマヨハマシ

還 尊 ⑧彌陀觀音ネガハクハ

行者ノチカヒテ照見シ

大悲誓願アヤマタズ

來迎引接タレタマヘ

⑨願以此功德

⑩平等施一切

同發菩提心

往生安樂園

來迎讚竟

別願讚

增二句 九日
儀大同 廿三日

一遍上人撰

初重

⑪身ヲ觀ズレバミヅノアワ

キエヌルノチハヒトモナシ

イノチヲオモヘバツキノカゲ

イデイルイキニゾトドラヌ

⑫人天善處ノカタチヲバ

チシメドモミナタモタレズ

地獄鬼畜ノクルシミハ

イトヘドモマタウケヤスシ

マナコノマヘノカタチハ

メシヒテミユルイロモナシ

ミニホトリノコトノハハ

ミニシヒテクコエゾナキ

カチカギアデハヒナムルコト

二重

⑬自性清淨法身ハ

如如常住ノホトケナリ

マヨヒモサトリモナキユエニ

シルモシラヌモ益ゾナキ

萬行圓備ノ報身ハ

理智冥合ノホトケナリ

境智フタツモナキユエニ

心念口稱ニ益ゾナキ

斷惡修善ノ應身ハ

隨緣治病ノホトケナリ

十惡五逆ノ罪人ニ

無緣出離ノ益ゾナキ

三重

⑭名號酬因ノ報身ハ

凡夫出離ノホトケナリ

十方衆生ノ願ナレバ

ヒトリモモルトガゾナキ

⑮別願超世ノ名號ハ

他力不思議ノチカラニテ

クチニマカセテトナフレバ

コエニ生死ノツミキエヌ

ハジメノ一念ヨリホカニ

最後ノ十念ナクレドモ

オモヒチカサネテハジメトシ

オモヒノツクルチチハリトス

オモヒツキナンゾノチニ

ハジメチハリハナケレドモ

ホトケモ衆生モヒトツニテ

南無阿彌陀佛トゾ申スベキ

ハヤク萬事ヲナグステテ

一心ニ彌陀ヲタノミツツ

南無阿彌陀佛トイキタユル

コレゾオモヒノカギリナル

⑯コノトキ極樂世界ヨリ

彌陀觀音大勢至

無數ノ恒沙ノ大聖衆

乙 ⑰聖道淨土ノ法門ヲ

サトリトサトルヒトハミナ

生死ノ妄念ツキズシテ

輪廻ノ業トゾナリニケル

善惡不二ノ道理ニハ

ソムキハテタルココロニテ

邪正一如トオモヒナス

冥ノ知見ゾハヅカシキ

煩惱スナハチ菩提ゾト

キキテツミチバツクレドモ

生死スナハチ涅槃トハ

行者ノマヘニ顯現シ
 一時ニ御手ヲサヅケツツ
 來迎引接タレタマフ
 スナハチ金蓮臺ニノリ
 ホトケノシリヘニシタガヒテ
 須臾ノアヒダヲフルホドニ
 安養淨土ニ往生ス
 行者蓮臺ヨリオリテ
 五體ヲ地ニナゲ頂禮シ
 スナハチ菩薩ニシタガヒテ
 ヤウヤク佛處ニイタラシム
 大寶宮殿ニマウデテハ
 ホトケノ說法聽聞シ
 玉樹樓ニノボリテハ
 ハルカニ他方界ヲミル
 安養界ニイタリテハ
 穢國ニカヘリテ濟度セム
 慈悲誓願カギリナク

スナチアツメテアブラテ
 シボラムトスルニコトナラズ
 ホトケハ三達ノ長者ニテ
 衆生本來生死ナキ
 モトノ佛性サトリエテ
 正覺ヲ成ジタマヒシチ
 菩薩八十地已滿ノ
 法體マドカニ具足シテ
 悲智ナラベテカケザレハ
 不退ノクラキニ居シタマヒ
 戒定智慧ノ三學ト
 コトババカリニサヘヅリテ
 ソノ理ニマヨヘルワレラガ
 未來ノ生處ゾオソロシキ
 コノタビ出離ノ縁モナキ
 衆生ノタメニ法藏ノ
 チカヒテホトケニナリタマフ
 御名ヲトナヘバ六方ノ

長時ニ慈恩ヲ報ズベシ

別願讚竟

往生讚

具云往 十二日
 生淨土 廿七日
 他阿上人撰

初重
 吾等ガコノミノハカナサチ
 オモヒトクコソウカリケレ
 カレユククサニオクツユノ
 アダナルヨリモタノミナシ
 イノチヲモノニタグフレハ
 アキノスエノニヨワルナル
 ムシノウラミノコエマデモ
 ヨソノウレヒトオモハレズ
 ツキヒノツモルカズゴトニ
 イノチノトモニキエユクチ
 シラデスギニシムカシトハ
 ムナシキアトノナナリケリ

諸佛ノ加被ヲカウフリテ
 カナラズ淨土ニ生ズベシ
 シカルチ念佛スルヒトモ
 自力ノ徳ニホダサレテ
 他力ニ歸セザルユエニコソ
 往生ノ期モナカリケレ
 有心ハ平生ナリケレバ
 稱念ノウチニ臨終アリ
 シカレバ臨終平生ハ
 フタツナシトゾシラレケル
 南無トトナフルヒトコエハ
 歸命ノ一念ナリケレバ
 阿彌陀佛ト稱スルニ
 六字ノウチニ往生ス
 カネテ最後ヲシラザレバ
 念念スチハチ臨終ト
 サトレル智者ハオノヅカラ
 念佛相續オコタラズ

カ、ルハカナキミノウヘチ
 オモフココロニトモナヒテ
 アサユフモノニツナガレテ
 輪廻ノ業ヲゾムスビケル
 ヨルヒルツモルツミハミナ
 アリハテヌミチタスケムト
 ハシリハシリテイトナミチ
 ナセルココロニハタシケル
 過去無數ノ生死ノ因
 イマ現在ノ果トナレリ
 未來無窮ノマヨヒノ
 イツカハツクル期ナルベキ
 ココロノスマヌコトワリハ
 ニゴレルミヅニツキカゲノ
 ヤドルマジキガゴトクナリ
 マヨフココロヲシラズシテ
 ホトケヲエムトモトメムハ

善導和尚ノ解釋ニハ
 機ヲバ出離ノ縁モナキ
 凡夫トシメシテ本願ニ
 歸セシムルコソタクミナレ
 謗法無信八難ノ
 罪根フカキトモガラニ
 吾等ガココロヲヒトシメテ
 ウルホヒモナキ身トシレバ
 一心信樂弘願ノ
 往生ノ機トゾナリニケル
 マヨヘルココロノ煩惱ハ
 ウテドモサラヌイヘノイヌト
 シラバ和尚ノ内證ヲ
 ワヅガニモナドエザルベキ
 菩提ヲエムトモムレバ
 山ノカセギノマネクテニ
 トホザカリユクココロヲバ
 ツナギトドメムタヨリナシ

三業所修ノ行ヒトリ

報土ニウマレガタケレバ
發願行ヲタスケテゾ

サダメテ佛意ニカナフベキ

凡夫發起ノ願ヒトツ

淨土ニウマレガタケレバ

行マテ願ヲタスケツツ

願行所謂ヲ尅スナリ

臨終平生フタツナキ

機法相應ノ本願ニ

南無阿彌陀佛ト歸セムヒト

イカデカ往生トゲザラム

三重 他力不思議ノ名號ハ

五逆闍提破戒マデ

十聲一聲トナフレバ

カナラズ往生ウタガハズ

スデニテハリニノゾミナバ

タヒトスデニ阿彌陀佛ト

トナヘテイノチツキムトキ
ウテナノウヘニ乗スベシ

◎スナハチ◎淨土ニウマレテハ

ホトケノ說法聽聞シ

ココロノハナノヒラクレバ

御法ハヤスクサトラレヌ

中音 ◎マサニ◎諸法ヲサトリテハ

娑婆ノ恩所ニタチムカヒ

親ヨリ疎ニオヨブマデ

利益廣大無邊ナリ

往生讚竟

弘願讚 四九日 三祖上人撰

初重

◎生死ノ◎サトニウマレキテ

生死ヲサトルヒトハナク

無常ノサカヒニスムモノモ

無常ヲシレルコトゾナキ

ツユノイノチノワヅカナル
カゼマツホドノハカナサチ

シラデコノミチタノミケル

ココロノウチコソオロカナレ

ハナトサカエシヒトハミナ

射山ノアラシニナチノコシ

タケクイサメルモノモマタ

荒庭ノコケニゾクチニケル

カカルウキヨノコトワリノ

マナコノマヘニサヘギルチ

ヨソニミナシテ身ノウヘト

シラザリケルコソカナシケレ

◎ミシヨノ◎オホクノコトワザハ

サナガライメトナリハテテ

スギコシムカシノオモカゲハ

ココロノウチニミナムナシ

乙 ◎三界◎火宅トトキオケド

オドロクヒトコソナカリケレ

苦惱ノ娑婆ニ身ヲオキテ

タノシブココロゾウカリケル

親子オナジクシタシミテ

シタシム由來ヲシラザリキ

夫婦タガヒニ愛スレド

愛ノオコリヲアキラメズ

曠劫多生ノソノホドハ

迷悟ノココロヲステズシテ

善惡フタツノミチニノミ

メグリテイママデヤマザリキ

コノ身ヲオモフココロコソ

コノ身ノアダトナリニケレ

ハヤクコノ身ヲステハテテ

ツヒノコノ身ヲタスクベシ

タトヒマコトヲイタセドモ

ミヅニエガクゴトクナリ

サトルサトリハマヨヒニテ

曠劫ノアトヲゾカクシケル

自性ノ空ヲ觀ジツツ

妄ニヒカルルコトナカレ

モトヨリ所因ナキユエニ

ココロノミナモト寂スナリ

本無生死トイヒナガラ

生死ハココロニイトハシク

元是菩提トシリヌレド

菩提ヲ得ムトオモフカナ

サトレルヒトノ煩惱ハ

菩提トコソナリニケレ

マヨヒノココロニノゾムレバ

涅槃モスナハチ生死ナリ

◎自身◎是佛ノコトワリハ

ワヅカニソノ理ニソナハレリ

タトヘハ石火ノウタザレバ

タキギヲヤカザルゴトクナリ

コノユエ彌陀ハ六八ノ

大悲誓願オコシツツ

衆生ノ往生成ゼシニ

スナハチ正覺トリタマフ

諸佛ノ濟度ニモレハテシ

五逆謗法闍提モ

轉教口稱ニウマルルハ

超世ノ弘願ノ誓ヒナリ

本爲凡夫ノ名號ノ

不思議ハ諸佛モシリガタシ

ハチスノハナノ淤泥ヨリ

ヒラケイヅルニコトナラズ

三重 ◎聞唱◎不二ノ名號ハ

聲塵世界ナルユエニ

トナフル行者ノミナラズ

キクヒトスナハチ往生ス

凡夫往生スルノミカ

不退ノ菩薩モ生ルナリ

諸佛如來ノ正覺ハ

コノ名號ニ成ゼラル

四果ノ聖者モ珠ヲナホ
コロモノウラニゾワスレケル

十地高位ノ菩薩モ

ツキヲ羅殺ニヘダツナリ

イハムヤ垢障ノ凡夫ノ

イカデカ報土ニノゾムベキ

マサシク願ニ詫スレバ

五乘モヒトシクイリニケリ

歴劫未聞ノ名號ニ

アヘルヤ不思議ノ縁ナラム

ハヤク苦界ヲ厭離シテ

往生淨土ヲネガフベシ

アトナキカタチカヘリミテ

マタククスエテ期スレドモ

イマノ稱名タエズシテ

イノチヲハレバ往生ス

聲聲相續スルヒトハ

諸佛ノ護念ニアヅカリテ

業風ナミトタツトキハ

ホトケト衆生トコトナリキ

彌陀遍照ノ心月ハ

ニゴレルミヅニゾヤドリケル

衆生ノココロヲハナレネバ

平等ノ願ヲゾオコシケル

諸法ニスナハチ自性ナク

本來不生ノコトワリテ

ワヅカニサトリウルヒトモ

無始ノタメニハサヘラレキ

イハンヤ名利ニツナガレテ

造惡不善ノトモガラノ

娑婆ノ法忍エムコトハ

恒沙劫ニモ期シガタシ

乙 願本誓不思議ノ名號ハ

ヒトヘニ凡夫ノタメナレバ

十惡五逆モステズシテ

無緣ノ慈悲ヲゾタレタマフ

衆生本有トシルユエニ

娑婆ノ苦界ニカヘリイリ

塵數ノ沙界ニイタルマデ

無餘ノ有情ヲ利益セム

弘願讚竟

稱揚讚 三十一日 三祖上人撰

初重 本覺無爲ノミヤコヨリ

自性眞如ノ法性ノ

元品無明ニサソハレテ

流轉ノミチニゾイデニケル

シカルニ西方極樂ハ

別願修德ノ報土ナリ

ヒトタビ無爲ニ歸シヌレバ

生死ニカヘルコトゾナキ

ココロノイケノミヅスメバ

菩提ノ月カゲウカブナリ

如來ノ記莢ニアヅカリテ

オナジク淨土ニウマレケリ

釋梵護世ノ諸天モ

虚空ノアヒダニツラナリテ

名號不思議ノ法ヲキキ

無上ノココロヲオコシケリ

五障ノ女人ウマレズバ

ワレラモ往生セザラマシ

五逆謗法ステラレバ

凡夫ノ出離イカガセム

十方無量ノ諸佛モ

彌陀ノ名號稱セシム

ワレラ凡夫ノ境界ノ

イカデカ稱名セザルベキ

三重 如來要門ヒラキテゾ

別意ノ弘願ハアラハレシ

阿難付屬ノ名號ハ

在世未來ヲカネタリキ

三界流浪ノ恩愛ノ

タメニハイノチテステシミノ

彌陀大悲ノ恩徳ヲ

ムクハヌノミコソカナシケレ

タトヒ頭目ヲアタヘテモ

難行苦行ヲイタスベシ

一念口稱ノ易行ヲモ

オコタルココロゾオロカナル

法雨ヲモラサズソソギテハ

ミガケルイシヲモウルホシキ

慈雲ヲアマネクシキヌレバ

クチタルキニモハナゾサク

高山無垢ノ靈地ニハ

ココロノハチスハサカザリキ

卑濕ノイヤシキ淤泥ニハ

彌陀正覺ノハナヒラク

諸佛ノナカノ覺王ノ

妙觀察智ノ不思議智ノ

刀山劍樹ノ苦ニアハリ

殺盜淫酒ヲチカスモノ

サダメテコノ苦ニシヅムナリ

阿ルヒハホノホニムセビツツ

涌銅心腑ヲトホスナリ

アルヒハ風刀ミヲトキテ

虚空ノナカニ旋轉ス

妄語邪見ヲオコスモノ

コノカナシミヲウクルナリ

乙 中ニモ阿鼻ノ依正ハ

麤毒キハメテ無量ナリ

洞然猛火ニ身ヲコガシ

シバラクモヤムヒマゾナキ

五逆謗法ツクルモノ

カナラズコノ報感ズナリ

罪人勤苦ニタヘズシテ

羅刹ヲウラミカナシメバ

ツクリシツミノムクヒゾト

清淨無垢ノ寶池ニハ

八種ノ徳ヲホドコセリ

寂靜無漏ノ心水ノ

衆徳ニソナハル不思議ナリ

アルヒハ無我ノコエチキキ

アルヒハ不滅ノコエチキキ

アルヒハ無生ノコエチキキ

アルヒハ眞如ノコエチキク

ミナコレ彌陀ノ風大ノ

言語ニイデタル不思議ナリ

稱揚讚竟

十六日

六道讚 八頭偈四 句儀相同

三祖上人撰

初重

シヅカニ泥犁ノクルシミチ

オモヒトクソソカナシケレ

斫刺磨輪ニウレヘツツ

ナクナクソノコチ食スナリ

冷水キヨクナガルレド

ノママトスルニ猛火ナリ

コノミハハヤシニムスベドモ

トラムトスレバツルギナリ

三十四億ノ畜生ハ

禽獸虫ノタグヒナリ

オノオノタガヒニ殘害シ

身心オナジクヤスカラズ

信行トモニカケタレバ

手ナク足ナキカタチナリ

恭敬ノココロヲイタサネバ

ウヘチ仰ガヌ報ヲウク

一種ノ生ヲタクハヘテ

タゞ水草ヲオモヒツツ

餘ハシルトコロナキユエニ

出離ソノ期ヲウシナヘリ

占婆城ニスムハトハ

過去遠遠ヲオクリキ
祇菌精舎ノアリモマタ
未來永永ツクシケリ

二重
勝他ノ和タメニ身ヲアゲテ

瞋恚ノ見ヲオコスモノ
修羅ノ鬪諍タエズシテ
怨憎會苦ヲムスビケリ
アルヒハ須彌ノキタニスミ
アルヒハ巨海ノソコニアリ
ツネニ諸天ノタメニコソ
イノチヲウバヒトラレケレ
日日三時ニ苦ヲマネキ
ミヅカラソノ身ヲ害スナリ
種種ノ憂惱ヲウクルコト
タトヘテイハムカタゾナキ
過去ノ戒善力ニヨリ
タマタマヒトトナリヌレド
ココロハ鬼畜ニオナジクテ

慚愧ナキコソオロカナレ
名利ノクサリニツナガレテ
スナハチ邪道ニオチニケリ
財寶アマキ毒ナルヲ
ナメテ正路ヲウシナヘリ

紅顔ニホヒヲホドコシテ
世路ニホコリシヒトナレド
シロキカバネトクチハテテ
野原ノツチトゾナリニケル
ハカナキイロニフケリツツ
種種ノ不淨ヲワスレケリ
エガケルカメノソノナカチ
シラデ愛スルコトナカレ
種子不淨ノハジメヨリ
ヲハリ究竟ニイタルマデ
身心トモニコトゴトク
清淨ナルコトサラニナシ
二十五有ノチマタニハ

ウマレテ死セザルトコロナク
六道四生ノトボソニハ
キタリテサラザルコトゾナキ
天上タノシビオホクシテ
通力自在ニホコレドモ

業報スデニツキヌレバ
衰没ノ苦ヲマヌカレズ
不退ノ快樂ヲオモフトキ
ココロニ大苦ヲ生ズナリ
地獄ノ衆苦ヲアツメテモ
タトヘトスルニオヨバレズ
三重
四種ノ甘露ノアヂハヒハ
ネガヘドモマタエガタク
五妙ノタヘナル音楽ハ
キクコトモハヤタエニケリ
頭オヨソ四王忉利ヨリ
梵天非想ニイタルマデ
ミナコレ有爲ノ報ナレバ

カヘリテ無間ニシヅムナリ
タトヒ憂苦ナキ世ナリトモ
火宅トシリナバイトフベシ
イハムヤ生老病死ナリ
イカデカ淨土ニユカザラム

中音
十惡五逆謗法等

闍提破戒ノトモガラモ
一念口稱ニツミキエテ
スナハチカノ土ニ往生ス

六道讚竟

寶蓮讚 五日 七祖上人撰

彌陀十劫ノ正覺ニ
衆生ノ往生サダマリテ
トモニヒラケシ心蓮ハ
本願所成ノハナナリキ
彌陀トイヘルハ蓮華ナリ

蓮華コレマタ衆生ナリ
シカレハ生佛一如ニテ
正覺往生フタツナシ
十方三世ノ諸佛モ
彌陀一佛ノ弘誓ニ
オナジク乗ズルトキニコソ
正覺ノハナハヒラクナレ

六八弘誓ノ莊嚴ハ
蓮華所成ノ功德ナリ
コノユエ淨利淨土ニハ
寶池ニ寶華サキミテリ
寶池ノ中ノ寶蓮華
ワレラガフルキスミカナリ
イメイメマヨヒヲヒルガヘシ
コノタビ本家ニカヘリナム
乙 人人和娑婆ノ念佛ノ
コエニ應ジテ蓮華オフ
華華オナジクヒラクレバ

寶池ニ寶座ヲナラブナリ
シルベシ念佛ノ行者ヲバ
芬陀利華ニタトヘタリ
人中上人ナレバ
スナハチ佛果ニアヒオナジ
世間ノ中ノ欲塵ニ
染汚セラレヌヒトヲコソ
蓮華者即是如來トモ
マサシク經ニハトカレタレ
自性清淨法性ノ
如來淨華ノタネナレバ
卑濕ノ淤泥ニ生ズレド
ニゴレル水ニモケガサレズ

二重
如來淨華ノウテナニハ
念佛ノ行者ゾノボルナル
ホトケト衆生トヒトツニテ
正覺トリシニヨリテナリ
本有三身ノ佛性ハ

ナヲヨバレテ動搖シ
 心蓮臺ノ阿彌陀ハ
 コエニ乗ジテ出現ス
 觀音開華ヲササゲモテ
 行者ノマヘニヨセタマヒ
 勢至合華ノテヲノベテ
 オナジクカウベチナデタマフ
 コノトキウテナニ乗ジツツ
 ホトケノ座下ニイタルナリ
 蓮臺九品ニワカレツツ
 上中下輩ニカハレドモ
 一種不退ノ報土ニハ
 念佛ヒトリ往生ス
 ヒトタビ蓮華ニ託スレバ
 ナガク生死ヲハナルナリ
 心華スデニヒラクレバ
 サトラヌノリモナカリケリ
 三重 華合ノサハリアルヒトモ

タトヒ十二大劫ヲ
 オクルトイヘドモ三禪ノ
 樂ヨリモナホ超過セリ
 イハムヤ一日七日ニ
 蓮華ヒラケテ佛ヲミ
 百法明門サトリナバ
 ナニノウレヒカノコルベキ
 華開已後ノ得益ニ
 ソノ機ノ遲速ハカハレドモ
 釋迦ノ抑止ナリケレバ
 彌陀ノ攝取ハヒトツナリ
 彌陀ノ攝取ノ名號ハ
 善惡トモニステザレバ
 凡聖オナジク往生シ
 オノオノ佛座ニノボルナリ

寶蓮讚竟

莊嚴讚 十三日 具云莊嚴淨土 七祖上人撰

初重
 ①ソモソモ②西方極樂ハ
 四十八願成就シテ
 彌陀正覺ノ淨華ヨリ
 ヒラケイデタル報土ナリ
 極樂無爲涅槃界
 不生不滅ノトコロナリ
 畢竟逍遙離有無
 事理ノフタツモワケガタシ
 ③シカリト④イヘドモ極樂ハ
 色相莊嚴微妙ニテ
 諸佛ノ淨土ニクラレバ
 百千萬倍超過セリ
 衆寶莊嚴タヘナルモ
 娑婆ノ五欲ヲ厭離シテ
 カノ勝境ヲミナヒトニ

欣末セシメムタメナリキ
 瑠璃ノ寶地ニユクヒトノ
 カゲモスガタモウツロヒテ
 一念不生ノ面目ヲ
 カガミニミルガゴトクナリ
 乙 ⑤コガネノ⑥トボソノアケボノニ
 タマノスダレノヒマミエテ
 寶樹ヲカゼヤワタルラム
 御ハシノモトニハナゾチル
 二重
 ⑦七重⑧寶樹ニサケルハナ
 チレドモサラニツキモセデ
 トキハカキハノイロナレバ
 ハルトモアキトモイヒガタシ
 イマコノ娑婆ノハナノハル
 モミデノアキノ木ノモトニ
 カノ極樂ノ寶樹ヲバ
 イカガナラベテオモフベキ
 寶樹ヲカゼノナラストキ

寶華ニ種種ノシラベアリ
 イヅクニタレガナスコトト
 シラヌニ微妙ノ樂奏ス
 寶池ノホトリノ衆鳥ハ
 佛法僧ノ三寶ヲ
 オナジク念ジテトナフレバ
 タガヒニノリノコエチナス
 寶樹寶池寶樓閣
 ミレドモミレドモトコシヘニ
 長今ナル莊嚴ハ
 メシバラクモステガタシ
 虚空ノ莊嚴タヘナレバ
 ノボリテツネニ遊戯セリ
 雲路ニ高クカヨヘドモ
 サラニアヤウキコトゾナキ
 アルヒハ寶池ノハナノモト
 フネニサチサス童子アリ
 アルヒハ飛梯ノクモノウヘ

ウテナニノボル菩薩アリ
 アルヒハ法性常寂ノ
 ハナチナガムル理土モアリ
 アルヒハ寂而常照ノ
 月ニウソブク智身アリ
 誦經念佛ノミギリニハ
 空ニ乗シテ來賓シ
 坐禪工夫ノトボソチバ
 トヘドモヒトリ宴默ス
 海衆朝宗ノ大會ニハ
 輻湊トキタリアツマレリ
 樓閣メグルル中央ニ
 巍巍タル寶座ウヅダカシ
 寶座ニ覺王マシマセバ
 觀音勢至左右ニ侍ス
 菩薩聲聞モロトモニ
 禮拜恭敬瞻仰シ
 天人聖衆アヒマジリ

妓樂歌詠讚嘆シ

往生スルヒト十方ヨリ

トキアメノゴトクニシゲケレド

生佛不増不減ニテ

迷悟タエタル國土ナリ

三重 本家ニイザヤカヘリナム

コノ魔境ニハトドマラジ

シルベシ西方極樂ハ

ワレラガフルキ住處ナリ

◎コノタビ◎本家ニカヘリナバ

淨土不退ノヒトタラム

不更惡趣ノ願ナレバ

還作衆生ノオソレナシ

中音 ◎タトヒ◎惡趣ニカヘルトモ

衆生ニカハリテ濟度セバ

地獄ノナカノクルシミハ

ウケテウケザルミナルベシ

莊嚴讚竟

光陰讚 二日 七祖上人撰

初重

◎トシサリ◎トシハカヘレドモ

ヲシムニトマルハルハナク

ヒユキツキユキウツレドモ

シタフニノコルアキハナシ

◎ヤマノ◎カスミノカズカズニ

クモモケブリモタチソヒテ

ワスレヌハルノオモカゲニ

イツノムカシヲノコスラム

トシドシハルノクサオヒテ

ミチノペフルキツカノマモ

タレテワスレズアトトヒテ

イママタヒトノカヨウラム

アダナルハナノヨナリトハ

ミルヒトガラニシラレケリ

アヒアフトモモハテハマタ

チリテワカルルハカナサヨ

妓樂歌詠讚嘆シ

往生スルヒト十方ヨリ

トキアメノゴトクニシゲケレド

生佛不増不減ニテ

迷悟タエタル國土ナリ

三重 本家ニイザヤカヘリナム

コノ魔境ニハトドマラジ

シルベシ西方極樂ハ

ワレラガフルキ住處ナリ

◎コノタビ◎本家ニカヘリナバ

淨土不退ノヒトタラム

不更惡趣ノ願ナレバ

還作衆生ノオソレナシ

中音 ◎タトヒ◎惡趣ニカヘルトモ

衆生ニカハリテ濟度セバ

地獄ノナカノクルシミハ

ウケテウケザルミナルベシ

莊嚴讚竟

光陰讚 二日 七祖上人撰

初重

◎トシサリ◎トシハカヘレドモ

ヲシムニトマルハルハナク

ヒユキツキユキウツレドモ

シタフニノコルアキハナシ

◎ヤマノ◎カスミノカズカズニ

クモモケブリモタチソヒテ

ワスレヌハルノオモカゲニ

イツノムカシヲノコスラム

トシドシハルノクサオヒテ

ミチノペフルキツカノマモ

タレテワスレズアトトヒテ

イママタヒトノカヨウラム

アダナルハナノヨナリトハ

ミルヒトガラニシラレケリ

アヒアフトモモハテハマタ

チリテワカルルハカナサヨ

寸陰ウツリヤスクトモ

コレヲバカロクスベカラズ

三重 ◎光陰◎ヲシムベシ

トキヒトヲマタザレバ

タトヒオイセヌミナリトモ

イノチニチノタノミナシ

生死事オホシ

無常迅ニハヤシ

タマ山水ノユクガゴト

サリテカヘラヌヨナリケリ

時光遷流轉

五更ノ天トナリニケリ

無常念念至

ツネニ死王ト居ストカヤ

◎念念◎無常トシリヌレバ

念念稱名オコタラズ

念念相續スルヒトハ

念念ゴトニ往生ス

一重

◎電光◎朝露ノトキノマハ

イメマボロシノヨナリケリ

ナスコトナクテイタヅラニ

オイトナルコソカナシケレ

芭蕉ノキノアキカゼニ

ヤブレテモロキツユノミノ

イノチオモヘバアダシヨハ

イツノイツトモタノマレズ

オイノヨハヒノカタブキテ

ナホヤマノハニアリアケノ

アリハテマジキスエノヨチ

オモヒヤルコソホドナケレ

キシノウエキノカタブケル

オヒテアヤウキタグヒカナ

アキノハモロキヤマカゼニ

ユフベノソラヤシグルラム

中音 唯端^{タテ}的ノ急要ハ

コノ名號ノカガミナリ

本來ノ面目クモレドモ

攝取ノヒカリハアキラケシ

光陰讚竟

大和讚

具云無 廿日 上大和

七祖上人撰

初重

諸佛^ニ出世ノ本懷ハ

彌陀一佛ノ名號ヲ

十方衆生ニホドコシテ

往生セシメムタメナリキ

マサシク^ニ出世ノ本懷ハ

コノ名號トキクトキゾ

諸教ニホムルトコロハ

彌陀ニアリトモシラレケル

海徳初際ノ如來ヨリ

即身成佛タヘナレド

無印無明ノ往生ハ

念佛コトニスグレタリ

大日遍照覺王ノ

大悲善巧ノ說法モ

妙觀察智ノ慧光ヨリ

名號具德チアラハセリ

二重

シルベシ^ニ念佛法華ハ

同名佛慧ナルユエニ

讀誦妙行ノヒトナレド

トモニ淨土ノ機トナレリ

コノ法乘ニ乗ジテモ

直至道場ハルカナリ

カノ寶國チ期スレドモ

當坐道場トホカラズ

後五百歲中

妙道イヨイヨカスカナリ

末法萬餘年

念佛マスマスサカリナリ

念佛即是無上ノ

甚深禪定ナリケリト

シレラムヒトノイカデカハ

工夫ノチカラヲツヒヤサム

阿彌陀佛ヲ念ズルモ

スナハチ無念ニソムカズ

淨土ノ往生ネガフモ

スナハチ無生ニタガハズ

シルモシラヌモオノヅカラ

クチニ御名ヲトナフレバ

コエニ無生ノ益チエテ

第一義空ヲサトルナリ

一聲^{一作稱}念ノ名號ノ

功德チイヘバ恒河沙ノ

金銀瑠璃ノ妙塔ヲ

成滿セルニモスグレタリ

十惡五逆謗正法

第一古讚集

乃至釋迦諸佛マデ

ミナコレ弘誓ニ乘ジツツ

悲智雙行シタマヘリ

乙^ニシラズヤ^ニ教主釋尊モ

五濁惡世ノナカニシテ

コノ難事チ行ジテゾ

阿耨菩提チエタマヘル

淨飯王ノタメニコソ

釋迦モコノ法トキタマヘ

シカレバ眷屬七萬ノ

釋種モオナジク往生ス

諸法般若諸波羅蜜

禪定乃至諸佛ノ

法報應化ノ身マデモ

念佛ヨリシテ生ズナリ

コノユエ諸法ノ王ナリト

文殊ハ念佛チホメタマフ

三密瑜伽三菩提

闍提破戒ノトモガラモ

一口一稱ノ名號ニ

八十億劫ノツミ滅シ

カヘリテ八十億劫ノ

功德チウルゾ不思議ナル

三重

別願^{一本無}酬因ノ報身ノ

十劫正覺ノ名號ノ

一念無上ノ大利チバ

諸佛モイカデカハカルベキ

ヨロコバシキカナ極惡ノ

最下凡夫ノタメニトテ

伽善最上ノ法ヲトク

ワレライカデカ歸セザラム

報土ニ無生ノ往生ハ

アルベカラザルコトナレド

タダコレ悲願ニヨリテナリ

中音

カカル^ニ不思議ノ本願ニ

即身成佛タヘナレド

無印無明ノ往生ハ

念佛コトニスグレタリ

大日遍照覺王ノ

大悲善巧ノ說法モ

妙觀察智ノ慧光ヨリ

名號具德チアラハセリ

二重

シルベシ^ニ念佛法華ハ

同名佛慧ナルユエニ

讀誦妙行ノヒトナレド

トモニ淨土ノ機トナレリ

コノ法乘ニ乗ジテモ

直至道場ハルカナリ

カノ寶國チ期スレドモ

當坐道場トホカラズ

後五百歲中

妙道イヨイヨカスカナリ

末法萬餘年

イマハタアヘルウレシサラ

オモヘバホトケノ恩徳ハ

報ジテモマタ謝シガタシ

大和讚竟

十一日

二教讚 具云二

尊教 廿六日

無礙光^ニ如來ノ願ニヨリ

一心ニ歸命スルコトチ

天親論主ノコトバニハ

願作佛心トノベタマフ

願スナハチ^ニ願作佛心ハ

度衆生心ヲソナヘタリ

シカルニ度衆生心ハコレ

發菩提心ヨリ生ズ

乙^ニ信心^ニスナハチ一心ナリ

一心スナハチ金剛心

一三一

金剛心ハ菩提心

コノ心スナハチ他力ナリ

願土ニイタレバスマイヤカニ

無上涅槃ヲ證シツツ

スナハチ大悲ヲオコシテゾ

回向ノココロヲ成ジケル

本願圓頓ドク一乘ハ

逆惡攝スト信知シテ

煩惱菩提體無二ト

スマヤカニコソサトルナレ

二重 ①イッツノ不思議トクナカニ

佛法不思議ニシクハナシ

佛法不思議トクコトハ

彌陀ノ弘願ニヨリテナリ

無礙光ノ利益ヨリ

威徳廣大ノ信ヲエテ

カナラズ煩惱ノコホリトケ

スナハチ菩提ノミヅスメリ

マコトニ邪見ノイタリナリ

乙 ①如來ノ教ハノコレドモ

行證タエタル末世ナリ

一念不生ノ本源ヲ

タレカハヒトリサトルベキ

他力不思議ヲタノマズハ

業惑イカデカ滅スベキ

コノ一門ニアハザレバ

生死チイヅルニミチゾナキ

二重 ①シルベシクシヤウ口稱ノ一行ニ

恒沙ノ功德ソナヘタリ

タダコレ大願業力ノ

カマヘイダセルユエナリキ

三重 ①彌陀ドク淨國ニ生スレバ

見思ノ煩惱斷ゼネド

一時ニ娑婆ヲステハテヌ

コノユエ横截トナヅケタリ

淨土ニオモムクヒトハミナ

自然ハスナハチ報土ナリ

證大涅槃ウタガハズ

中音 ①娑婆ドク永劫ノ苦ヲステテ

極樂無爲ヲ期スルコト

釋迦ノ遺教ナリケリト

長時ニ慈恩ヲ報ズベシ

二教讚竟

拾要讚 前

朔 日

二十四日

十四祖上人撰

初重 ①ワレラシシダ信外ノ凡夫ノ

ココロチモノニタグフレバ

カゼニシタガフ輕毛ノ

東西スルガゴトクナリ

①煩惱具足ノ衆生ノ

妄執フカキココロニテ

ホトケニヒトシトオモヒナス

清淨寶珠ナルユエニ

衆生マヨヒノ濁心ニ

コレテナグレバツミキエヌ

過去未來現在ノ

三世ノ諸佛モコトゴトク

念佛三昧學シテゾ

無上菩提ヲ證シケル

彌陀ノ功德讚嘆ヲ

不信毀謗スルヒトハ

五劫地獄ニ墮シテコソ

ツブサニ衆苦ヲ受ベケレ

モハラ彌陀ヲ念ズレバ

觀音勢至常隨シ

捨命ニ諸佛ノイヘニイル

スナハチ淨土コレナリキ

往生求願セムヒトノ

無上大利ノ名號ノ

ホカニ小利ノ餘行ヲバ

イカデカコレヲ修セシメム
ソレヒト彌陀ヲトナフレバ
諸佛ノ守護ニアヅカリテ
コノ身現世ノ父母ノミカ
前後七代往生ス

①無量壽佛ノ名ヲキ、テ
一念歸依ノヒトハミナ
コレ大乘ノナカニシテ
第一弟子トトカレタリ

②彌陀ノ威神光明ハ
最尊第一ナルユエニ
諸佛如來ノ光明ノ
オヨブトコロニアラザリキ

中音
③十惡五逆ノトモガラノ
臨終ニ猛火現ズレド
南無阿彌陀佛ト稱スレバ
コエヲタヅネテ來迎ス
拾要讚前

シルベシ極樂世界ニハ
コレラノ功德成就セリ
マタカノホトケノ國土ニハ
種種奇妙ノ衆鳥アリ
白鶴孔雀鸚鵡等
乃至迦陵頻伽ナリ
コノトリミナコレ彌陀佛ノ
變化所作ノトリナレバ
コノコエキクモノ自然ニ
三寶念ズルココロアリ
微風寶樹ヲウゴカセバ
寶華ニ種種ノヒビキアリ
タトヘバ萬種ノ音樂ヲ
同時ニナスガゴトクナリ
④コノコエキクモノ自然ニ
念三寶ノココロナス
シルベシ極樂世界ニハ
コレラノ功德成就セリ

小經讚 本云阿十五日
彌陀經 廿八日

初重

①コレヨリ西方十萬億
佛土ヲスギテ世界アリ

彌陀トイヘルハ教主ナリ
イマ現在ニノリヲトク
②ソノ土ノ衆生一人モ
衆苦アルコトサラニナシ

タダモロモロノ樂ヲウク
コノユエ極樂國トイフ
七重寶樹ト木ヲナヅケ
八功德池トイケヲイフ

寶樹珠網ニカザラレテ
寶池ハ金沙ニカガヤケリ
乙③四邊ノ階道コトゴトク
金銀瑠璃ヲ合成シ

ウヘニ樓閣カサナリテ
ミナマタ七寶マジヘタリ

彌陀佛ノ光明ハ
十方世界ヲ照耀シ
サフルトコロナキユエニ
號シテ阿彌陀佛トイフ
マタカノホトケノ壽命ハ
無量無邊阿僧祇劫
人民オナジクナガケレバ
號シテ阿彌陀佛トイフ
成佛已來ヲカゾフレバ
十劫スデニヘタマヘリ
無數ノ聲聞弟子アリテ
阿羅漢道ヲ成ジタリ
大菩薩衆オホクシテ
ソノカズサキノゴトクオリ
シルベシ極樂世界ニハ
コレラノ功德成就セリ
極樂世界ノ衆生ハ
ミナコレ阿鞞跋致ナリ

イケノナカニ蓮華アリ
車輪コレヲタトヘトス
青黃赤白一ニ

イロトヒカリトトモナラム
清淨衆德無量ノ
妙香アリテ莊嚴ス
シルベシ極樂世界ニハ
コレラノ功德成就セリ

マタカノホトケノ國土ニハ
ツネニ天ノ樂ヲナス
晝夜六時ニ微妙ノ
曼陀羅華フリクダル

ソノ土ノ衆生人天ハ
清旦ゴトニハナヲモテ
他方界ノ諸佛ニ

供養歷事親近ス
スナハチ食時ニナリヌレバ
本土ヘカヘリテ飯食ス

一生補處ニイタルモノ
トクトモトクトモツキガタシ
衆生コレヲキキエツツ
カノ土ノ往生ネガフベシ
カクノゴトキノ善人ト
一處ニ會シテアレバナリ
タビシ無爲ノ界ナレバ
少善ウマル、コトカタシ
彌陀ノ名號執持シテ
一日七日ミダレザレ
ソノ人命終スルトキニ
ホトケト聖衆ト顯現シ
コノトキ身心ヤスクシテ
スナハチカノ土ニ往生ス

三重

④六方恒沙ノ諸佛モ
舌相テイダシテ證誠ス
ナムダチ衆生ミナマサニ
イマコノ所説ヲ信受セヨ

①コノ説②カノナチキクモノハ

諸佛如來ニ守護セラレ

阿耨菩提ノナカニシテ

ナガク不退轉チエム

スデニウマレイマウマル

未來モカナラズ生ズベシ

若男若女ネガハクハ

イメイメオコタルコトナカレ

中音

③如來④出世セシコトハ

コノ法トカムガタメナリキ

衆生信ジガタケレバ

難信ノ法トナヅケタリ

小經讚竟

悲母ノ彌陀ハネムゴロニ

ワレラガタメニ願チタツ

⑤彌陀⑥超世ノ大願ハ異本

ワレラガタメニオコストモ

釋尊コレヲススメズバ

イカデカ淨土ニウマルベキ

⑦タトヒ⑧釋尊ヨニイデテ

難化ノ衆生ヲススメトモ

彌陀ノ本願ナカリセバ

報土ニウマレムコトカタシ

二重

⑨專念⑩彌陀ノ教ヒトリ

サトリヤスクテイリヤスシ

五濁ノワレラガタメニトテ

釋迦ハコノ法ヒロムナリ

⑪イソゲヤ⑫イソゲヨモノヒト

タマタマ彌陀ノチカヒアリ

⑬釋迦⑭在世ハスギサリヌ

彌勒ノ出世ハハルカナリ

淨業和讚

目次(卷下)

⑮恩徳 <small>小</small> 常課	⑯恩徳 <small>大</small> 退田
⑰無常	⑱滅罪
⑲末法	⑳釋迦
㉑五緣	㉒八相
㉓涅槃	㉔拾要 <small>後</small>
㉕迎接	㉖極樂 <small>本</small>
㉗極樂 <small>末</small>	㉘光明
㉙寶海	㉚心品
㉛本願	㉜懺悔
㉝十四行偈	㉞古本雖存此讚與玄義分全同故今且略之而已
㉟踊躍 <small>附合喚磬儀等</small>	
己上	

恩徳讚

小常課初重念佛五遍 博士相似六時讚

初重

①恩徳廣大釋迦尊ハ

②我見是利トトキタマヒ

③安養能化ノ彌陀佛ハ

④常念我名トノベタマフ

⑤諸佛⑥同時ニ釋迦ヲホム

⑦五濁惡世ノナカニシテ

⑧信ジガタキ法ヲトキ

⑨アマネク念佛ススメルト

⑩彌陀ハ⑪ワレラガタメニトテ

⑫微妙ノ淨土ヲ莊嚴シ

⑬釋迦ハワレラヲススメムト

⑭難信ノ法ヲトキタマフ

⑮慈父ノ⑯釋迦ハマノアタリ

ワレラガタメニ法ヲトキ

釋尊慈父ノススメタル

西方淨土ノ教行ハ

出離ノミチニマヨヒタル

ワレラガ目足トコソキケ

釋迦ハ慈父ノゴトクシテ

穢土ノ生死ヲ濟度セリハ異本

彌陀ハ悲母ニオナジクテ

淨利菩提ニ引導ス

萬行ソノカズオホケレド

スミヤカナルハ淨土門

本師釋迦ノ説ノミカ

十方ノ諸佛ミナ證ス

五濁惡世ノ衆生ノ

釋迦ノ遺教彌陀ノ願

信ゼズイカガ六方ノ

諸佛ノ舌相ヤブルベキ

ホトケ阿難ニ附屬シテ

コノ法カナラズタモツベシ

タモツトイヘルハ彌陀佛ノ御名ヲタモチテワスレザレ今日アヘル要法ヲ

イノチヲハラム其期マデ堅固ニタモチテワスレザレソレゾ佛恩報ズベキ

乙 貪瞋 ①フタツノナガレヲバナミチシノギテワタルベシ中路ノ白道セマケレド

オクリムカフル指南アリ釋迦ハコノ方ヨリ發遣シ彌陀ハ彼國ヨリ來迎ス

二重 ①自信 ②教人信

釋迦ノ大恩山タカク難中轉更難 彌陀ノ弘願ハウミフカシ

人ノイノチトドマラズ山水ヨリモハナハダシワヅカニケフマデタモテドモ

アスノイノチ期シガタシ月日ノツモルニシタガヒテツヅムルイノチヲシラヌカナ

乙 東岱 ①前後ノユフケブリ

キノフモタナビキケフモタツ北邨朝暮ノクサノツユオクレサキダツタメシアリ

輪王クラキタカケレド七寶ヒサシクトドマラズ天上タノシビオホケレド

五衰ハヤクゾキタリケル 初利天上億千歳 大梵王宮ノ深禪定

出離生死ノ要道ヲキクニイヨイヨカナシキハ大師釋尊廣大ノ

恩徳イカデカ報ズベキ諸佛ノ大悲ハヒトツニテ方便化門カハラネド

三重 ①歸命 ②頂禮釋迦尊

釋迦ハ無勝ノ土チステテ閻浮ニ八相示現ス 五濁惡世ノ能化ノ主

中音 ①二尊ノ大悲ヲツタヘテ

極樂界會ノ能化ノ主タトヒ罪業オモクトモ來迎引接タレタマヘ

コレラノタノシミ皆ナガラツヒニ三途ニシタガヒヌ人天有爲ノタノシミハ

電光朝露ノゴトクナリ須臾ニ三途ニカヘリナバ長時ノクルシミイカガセム

輪迴生死ノアヒダニハイタラヌトコロゾナカリケル

梵天初利ノ樂モウケ 刀山劍樹ノ苦モウケキ 流浪三界内

二重 ①イマコノ ②娑婆世界ハ

生已歸老死イカデカコレラノ苦チイデムアルマジカリケルトコロカナ

恩徳讚大

無常讚 十日 廿日

初重 ①人間 ②忽タルコトハ

衆務チイトナムユエゾカシ日夜ニイノチノサルコトヲサトラザリケルハカナサヨ

ワガミノ無常チカヘリミズ老少トモニサキダテド不定ノサカヒニオドロカズ

人身フタ、ビウケガタシ佛敎アフコトマタカダシミナヒトコロコトヒトツニテ

彌陀ノ名號トナフベシ無常須臾ノアヒダナリ日暮イツトカワキマヘム

ワレラモ人モネガハクハ頭然チハラフガゴトクセヨ長夜ノネフリヒトリサメ

五更ニイメオドロキテシヅカニコノヨテ觀ズレバワヅカニ刹那ノホドゾカシ

三界スベテ無常ナリ 四生イツレモ幻化ナリ

コノナカニスムヒトハミナタトヘバイメニゾニタリケル ①オヨソ ②生ヨリ死ニイタリトキトシテナホヤスカラズ

四慢タガヒニアラソヒテ

三毒相續マタタエズ

①流轉②生死イタヅラニ

六道三途ヲメグルミノ

イカナル宿縁モヨホシテ

超世ノ悲願ニアヒヌラム

①過去ノ②宿善アリケレバ

コノタビカカルミテエタリ

チシヘノゴトク修行セバ

如來ヲミムコトカタカラジ

無常讚竟

減罪讚 六日 廿一日

①事理ノ②懺悔ヲ修セネドモ

彌陀ノ名號トナフレバ

一念須臾ノアヒダニモ

無量生死ノツミキエヌ

大悲利生ノアキノカゼ

塵沙ノクモヲヤハラフラム

攝取不捨ノヨルノツキ

無明ノヤミヲゾテラシケル

スベテ業障深重ノ

闍提破戒ノモノナレド

大悲方便メグラシテ

引接カナラズタレタマフ

衆生稱念スルユエニ

多劫ノ重罪須臾ニキユ

ホトケト聖衆トキタルトキ

諸邪業繫サフルナシ

衆生稱念即除多

劫罪命欲終時佛

與聖衆自來迎接

諸邪業繫無能礙

者故名増上縁也

多劫ノ重罪須臾ニキユ

ヒトタビ南無トトナフレバ

法性ノ身ヲ證シケル

乙①懺悔モ②回向モ發願モ

クチニハイヘドモマコトナシ

安養能化ノ彌陀尊

他力ヲタレズバイカガセム

ソモノモ彌陀ノ名號ノ

功能オモフゾタノモシキ

四重五逆モミナ滅シ

九品ノウテナニイタルナリ

本願清涼ノ風フケバ

生生世世ニハレガタキ

女人五障ノクモキエテ

眞如ノ月カゲヤドルナリ

①十聲②專稱カゼフケバ

五逆重罪クモキエヌ

一念深信ツキスメバ

三有長夜ノヤミハレヌ

①最後ノ②稱名コエスマテ

化佛菩薩ヲミルノミカ

十惡五逆クモキエテ

日輪マデカクカガヤケリ

減罪讚竟

末法讚 七日 廿二日

①如來②舍衛國ニシテ

二十五年ヲヘシカドモ

九億ノイヘノ三億ハ

キカズシラデゾヤミニケル

①シルベシ②見佛聞法ノ

因縁ハナハダアヒガタシ

マシテ三途ニシヅミナバ

ワガミノハテコソカナシケレ

儒童菩薩ハアナガチニ

半偈ノタメニミチナゲテ

常啼菩薩ハスミヤカニ
 般若ヲモトメテキモテサク
 菩薩大聖ナホシカリ
 イハムヤ濁世ノ凡夫ヲヤ
 舍衛ノ三億ミズキカズ
 イハムヤ滅後ノ衆生ヲヤ
 罪業イカナルクモナレバ
 眞加ノ月ヲバカクスラム
 生死イカナルサトナレバ
 如來スムコトナカルラム
 乙 ① 忉利ノ安住九十日
 ソレニモワレラハアハザリキ
 提河ノ滅度ハ二千年
 ワヅカノスエニゾウマレタル
 如來ノ滅度ヲタヅヌレバ
 二千餘年ヲヘダテタリ
 正法ヒビニ沈淪シ
 賢聖ナガクヘダタリヌ

正像ハヤククレハテテ
 生死ノスミカヤミフカシ
 末法ステニイタリツツ
 菩提ノミチコソハルカナレ
 二重
 ① 種種ノ法門ミナトモニ
 解脱ハイヅレモオトラネド
 末代惡世ノ根機ニハ
 念佛往生スグレタリ
 末法マサニトキイタリ
 惡世ハ五濁サカリナリ
 淨土ノ一門バカリコソ
 ワレラガイルベキミチトキケ
 金容梵音ミズキカズ
 在世ノ正機ニモレタレド
 聖教ニアヒ御名ニアフ
 ナホコレ宿縁アサカラズ
 釋迦ノ末世ニウマレキテ
 彌陀ノ名願キクモノハ

一四二
 シルベシ往生淨利ノ
 根機熟セルヒトナリト
 ワレラハココロ愚癡ニシテ
 曠劫流轉ノ身ナレドモ
 タマタマ釋尊末法ノ
 遺教ニコソアヒニケン
 末法萬年スギテナホ
 コノ經百歲トドマラム
 ソノトキヒトタビキクヒトモ
 ミナカノクニニウマルベシ
 彌陀ノ名號ナカリセバ
 釋尊ナニチカトドメマシ
 末法一萬年
 餘經悉滅後
 阿彌陀一教
 利物偏増盛
 當來之世經道滅盡
 我以慈悲哀愍持留

此經止住百歲其有
 衆生值斯經者隨意
 所願皆可得度
 彌陀ノ一教トドマリテ
 三重
 ① 五濁ノウキヨニウマレタル
 ウラミハカタガタオホケレド
 念佛往生キクトキゾ
 カヘリテウレシクナリニケル
 ① 西方淨土ノ眞門ハ
 アヒガタクシテイリヤスシ
 他力難思ノ本願ハ
 愚ヲモ惡ヲモ憐愍ス
 中音
 ① 十惡トイヘドモ引接シ
 一念ナレドモ感應ス
 シルヤコレラノ悲願ハ
 タダ彌陀ノミゾオコシケル
 末法讚竟

釋迦讚 滅二句 八日
 儀少異 晦日
 初重 一本作寶
 ① 法藏佛ノミモトニテ
 五百堅固ノ願ヲタツ
 難化ノ娑婆ニトドメシモ
 ヒトヘニワレラガタメナリキ
 ① 三僧祇耶劫ノウチ
 難行苦行オコタラズ
 三千大千界ノウヘ
 身命ステヌトコロナシ
 諸佛ニコエタル萬行モ
 ヒトヘニワレラガタメナリキ
 乙 ① 百劫衆相圓滿シ
 光明神通具足シテ
 八相一期ノ變現モ
 ヒトヘニワレラガタメナリキ
 實成五百ノムカシヨリ
 娑婆ノ化導タエズシテ

二重
 ① 地獄鬼畜ノナカニシテ
 罪苦ノ衆生ニカハリツツ
 塵點劫數ヲオクリシモ
 自ニ此句斜向ニ中位ニ是爲ニ小異
 ヒトヘニワレラガタメナリキ
 ワレラガヒサシキ輪轉ハ
 カナシビテモマタカギリナシ
 如來ノフカキ恩徳ハ
 報ジテモナホアマリアリ
 初成道ノアシタヨリ
 入涅槃ノユフベマデ
 説オキタマヘル教行モ
 ヒトヘニワレラガタメナリキ
 三重
 ① 日日三時ニ身ヲステテ
 百千劫ヲバオクルトモ
 兩肩頭頂ニ荷戴シテ
 恒沙劫ヲバカサヌトモ 已上急調

已下緩聲以爲ニ少異一
念一時ノ恩徳ヲ

中音

報謝セムコトナホカタシ

カミハ有頂ノクモノウヘ

シモハ阿鼻ノソコマデモ

一本作界
苦海ノ羣類コトゴトク

釋迦讚竟

五縁讚 増二句 十四日
儀少異

初重
念佛修行ノ三業ト

彌陀如來ノ三業ト

カレコレカナラズヒトツナリ

コノユエ親縁トナヅク

彌陀ヲ見タテマツラムト

オモヘバスナハチミエタマフ

ヒビキトコエトノゴトクナリ

ナガク生死ヲハナレタリ

五縁讚竟

八相讚 増讚八頭 二月十五日
拍子亦異

初重
鶴林雙樹ノハルノソラ

二月十五ノアカツキニ

聲光アマネク十方ノ

五十二類ヲオドロカス

憐愍救護衆生者

大慈大悲ノ能化ノ主

涅槃ノ時分イタリツツ

今日滅シタマフベシ

トキニ菩薩人天衆

乃至禽獸魚蟲等

オノオノ供具ヲササゲツ、

雙樹ノアヒダニ雲集ス

幢幡寶蓋諸妙具

第一古讚集

ホトケモ聖衆モミエタマフ

コエニ應ジテ現ズレバ

自此句斜向中位是爲小異

見佛増上縁トイフ

臨終ニ聖衆來迎シ

須臾ニカノ土ニ往生ス

名號不思議ノチカラニテ

最後ノ引接タレタマフ

大乘廣智ノ功ナレバ

攝生増上縁トイフ

聖衆ノ華臺ニ坐スル時

スナハチ無生ヲ證得ス

不退ノクラキニイルコトハ

無等無倫ノサトリナリ

已下緩聲以爲少異

最上勝智ノ益ナレバ

證生増上縁トイフ

西方極樂世界ハ

大乘善根界ナレバ

無苦無惱ノトコロニテ

三轉四徳ヲ證スベシ

我今涅槃ニイリヌトモ

ナムダチカナシブコトナカレ

戒定智慧ヲ修學セバ

在世ニコトナルコトアラジ

一期ノ化導コノトキニ

機縁ステニキハマリヌ

八音哀雅ノノリノコエ

聽聞ケフチカギリトス

ヤウヤク中夜ニイタリツツ

涅槃ノ時分チカヅケバ

紫金ノムネテアラハシテ

大會ニシメシテノタマハク

往昔塵點劫海中

衆生ノタメニ勤苦シテ

イマコノ清淨殊妙ノ

相好色身成就セリ

諸行ハカナラズ法爾ナリ

一四五

生滅サラニトドマラズ

コヨヒ滅度シテハリナバ

ナガクフタ、ピアヒガタシ

二重

◎大衆◎ココロヲヒトツニテ

最後ノ相好禮ムベシ

メシバラクモステズシテ

愍重恭敬ヲイタスベシ

トキニ大會涕泣シ

合掌恭敬讚嘆ス

スナハチ法衣ヲヒキオホヒ

ヤウヤクトコニフシタマフ

青蓮ノマナジリナガクトヂ

丹菓ノクチビルイキタエヌ

大慈大悲ノ恩徳ノ

ヘダチヌルコツカナシケレ

阿泥盧頭ソノトキニ

衆會ニツゲテノタマハク

大覺世尊イマスデニ

別離ノヒビキアラタナリ

拔提銀河ノナミノイロ

悲惱ノオモヒゾアラハルル

三重

◎スナハチ◎紫磨ノ色身ニ

淨妙細疊マトヒツツ

阿難羅云モロトモニ

金棺ニコソオサメケレ

◎妙高◎樓ヲ莊嚴シ

聖棺コレヲササゲオク

梅檀香ヲツミキトシ

如來ノ身ヲ茶毘ス

◎七日◎七夜フルホドニ

闍維ノタキギミナツキヌ

三十二相ノ妙體ハ

無餘ノケブリトノボリニキ

八相讚竟

涅槃讚

中乙

常住壽命ヲキキシカド

却後ミツキニオドロキヌ

住闍堂ノ轉法輪

ナミダヲモヨホスモトヒナリ

イツシカ雙樹林ノモト

純陀長者ガ施ヲウケテ

最後ノ法門トキシニゾ

闍王ハ無根ノ信ヲエシ

最後ノ度者ノ須跋陀羅

如來ノ涅槃ヲカナシビテ

世尊ヲトドメサキダチテ

ミヅカラススミ滅度シキ

阿難尊者ハ迷悶シ

已滅不滅モシラザリキ

阿泥盧頭ニススメラレ

ナミダヲヌグヒテ請問ス

如來滅度ノノチニハ

タレヲカ師トハタノムベキ

諸經ノハジメノコトバニハ

ナニトカコレヲトナフベキ

ホトケ阿難ニノタマハク

波羅提木叉ヲ師トスベシ

諸經ノハジメノコトバチバ

如是我聞ト安ズベシ

滅後ノ遺誠ネムゴロニ

一日一夜ニトキハテヌ

僧伽梨衣ヲヒキオホヒ

マクラヲキタニゾフシタマフ

四雙ノウエキカレハテテ

エダチナラベテタレオホフ

跋提河ニハミヅムセビ

耆闍崛山ニハクサカレヌ

頻婆羅軻ノアケボノニ

クサキノカレシチアヤシミテ

迦葉尊者ハ座ヲタチテ

ハルカニ佛所ニオモムキヌ

曼陀羅華ヲモツ人ノ

ミチニアヘルニタヅヌレバ

シラズヤホトケノ入滅ニ

諸天ノチラスルハナナリキ

迦葉尊者ハコレヲキキ

ナミダニムセビ地ニフシヌ

ヤウヤクダチテユクホドニ

六群比丘ニマタアヒヌ

迦葉イヨイヨカナシビテ

佛所ニイタリテ禮スレバ

紫金ノスガタハメニミエズ

悲泣ノコエゾミミニアル

金棺バカリヲメグリツツ

最後ノ相好ノゾミシニ

千輻輪ノ印文ヲ

イダシテ迦葉ニミセシメキ

三重中二
如來無上ノ大慈悲

ココロモコトバモオヨバレズ
イヘバナミダチモヨホシテ
戀慕ノココロゾマサリケル
釋尊カクレマシマシテ
二千餘年マデニナル
正法ヒビニ沈淪シ
賢聖ナガクヘダ、リヌ
十惡サカリニ流行シテ
功德ノハヤシモカレハテヌ
自界他方ノ諸聖衆
イカナルクモニカクレニシ
如來化導コトヲヘテ
沙羅林樹ニカクレシニ
衆生ノ明眼キエハテテ
長夜ノヤミゾイトフカキ
如來在世ノソノカミハ
八天大會コトゴトク

生死ノ牽獄ステハテテ
解脱ノミヤニゾアソビケル
ワレラソノトキシラザリキ
イカナル惡趣ニシヅミテカ
廣大慈悲ノ利益ニモ
モレテハヒトリトドマレル
オモヘバ須菩提士ガ
昏迷闕絶ヤスカラズ
ホトケノ滅度ニサキダチテ
スナハチ涅槃ニイリニシモ
最後ノ化導ニアヅカリテ
第四應果ニサダマリヌ
カレナホ悲涕啼泣ス
ワレラナニチカタノムベキ
僧伽梨衣ヲヌギサケテ
紫磨ノ相好ミセシヨリ
三千界ノ地ノウヘニ
八十種好カクレニキ

中

ワレラハ生死ノ凡夫ナリ
一句一偈ノ縁アレド
解脱ノミチニチカラナク
カヘリテ三途ニイリヌベシ
阿難ノ七夢アラハレテ
生死ノ苦相顯現ス
コヒネガハクハ無上尊
ワレラチスツルコトナカレ
冥ヨリ冥ニイリヌレバ
佛法僧ニアヒガタシ
釋尊大刹ホドコシテ
コノタビカナラズヌキタマヘ
四重中三
鶴林中夜ノハルノハナ
二千餘年ノカスミワケ
龍華下生ノアキノツキ
五十六億クモヘダツ
鷲峰ノノリニモハヤクモレ
龍華ノアカツキハルカナリ

中

コノ中間ニ生テウケ
ナガク出離ノ縁ゾナキ
戀慕ノオモヒタグヒナク
恐孤平
狐露ノウレヒサリガタシ
常在靈鷲トキオケド
相好色身ナドヤミヌ
涅槃讚 竟

拾要讚 後 十四祖上人撰

イノチハツユノゴトクニテ
ユフベノカゲヲ期シガタシ
身ハマタシモノオナジクテ
アシタノヒヲモマチガタシ
タダコノ地水火風ノ
四大ヲカリニ和合シテ
我見我愛ノ煩惱ノ
ワガミトオモヘルオロカサヨ

衆生ハ心性愚癡ニシテ

恩愛貪欲アルユエニ
無始ヨリイマニイタルマデ
輪回ノ業ヲマヌカレズ
名利ノココロオホクシテ
長時ノ苦因ヲワスレタリ
コノヨノ榮華ニフケリツツ
未來ノ樂果ヲウシナヘリ
三毒五欲ノ焰色ハ
マナコノマヘニ對スレド
サラニミザルガゴトクナル
ココロノウチコソカナシケレ
六道三途ノ愁聲ハ
ミニノホトリニチカケレド
カツテキカザルゴトクナル
コノミノハテチイカガセム
所愛有縁ノ法ニヨリ
解脱ノ門ニイルヒトモ

コトバトココロト相違シテ

機教ソムケバ益ゾナキ
未得謂證ノココロニテ
罪障空如トオモヒツツ
妄境惡縁オソレズハ
サダメテ無間ニシヅムベシ
有無ヲハナレヌココロニテ
穢土ヲ淨土トオモヒナバ
生死ノイメノサメヤラデ
長夜ノネブリゾウカルベキ
聖道門ノ諸行ハ
大小權實ミナナガラ
斷惡證理スルユエニ
惡世ニイカデカサトルベキ
コノユエ今時難證ト
祖師ハ釋義ヲナサレタリ
イマコノ淨土ノ教門ハ
十念酬因ノ報身ノ

覺月ニシニイデシヨリ
 カゲ濁水ニヤドルナリ
 スデニ果徳ノ名號ヲ
 東上ノ衆生ニホドコシテ
 逆惡闡提破戒マデ
 ミナコトゴトク往生ス
 シルベシ彌陀ノ一教ハ
 本爲凡夫ノタメナレバ
 易行ノナカノ易行ニテ
 功德衆善ニ超過セリ
 境細心麤ノ衆生ノ
 觀行成ジガタケレバ
 心念工夫ヲカラズシテ
 口稱ノコエテススメタリ
 ワレラハ行業アシナエテ
 戒定慧解ニメシヒタリ
 彌陀弘誓ノフネナクバ
 生死ノ大海コシガタシ

彌陀別意ノ名號ハ
 重罪麤強ノミナレドモ
 ナガク惡趣ヲステハテテ
 極樂無爲ノイヘニイル
 元來六字ノ願行ハ
 自力ノ功德ニアラザレハ
 觀念シバラクトドメツツ
 モハラ御名ヲトナフベシ
 十方無量ノ諸佛モ
 一代教主ノ釋尊モ
 彌陀ノ名號念ジテゾ
 スナハチ正覺ナリタマフ
 イハムヤ無根聾盲ノ
 ワレラ悲願ヲタノマズバ
 イカデカ淨土ニ生ズベキ
 彌陀如來ノ萬徳ハ
 本願力ニヨルユエニ
 ミナ名號ニ具足シテ

一五〇
 コエノウチニゾアラハルル
 衆生ホトケヲ念ズレバ
 ホトケ衆生ヲ憶念ス
 タガヒニ念ジテステザレバ
 彼此ノ三業ヒトツナリ
 諸教所讚ノ名號ノ
 功能ゾマコトニ思議ナル
 己身一如ノ法ナレド
 シカモコノ身ニ禮セラル
 言語ノオヨバヌ法ナレド
 クチニ稱名セラレケリ
 心行所成ノ法ナレド
 シカモココロニ念ゼラル
 念念連稱スルヒトハ
 佛力不捨ノ誓光ノ
 ナカニ往セルミニナリテ
 天魔波旬ノオソレナシ
 マサニ命終スルトキニ

拾要讚 後竟

迎接讚

南無阿彌陀佛ト、ナフレバ
 名體不二ノ佛身ノ
 コエニ應ジテ來現ス
 三尊來迎シタマヘバ
 化佛菩薩モ影向ス
 行者モハナニノリテコソ
 須臾ニ寶池ニイリニケレ
 臨命終ノトキイタリ
 彌陀ノ御名ヲトナフレバ
 ホノカニ音樂シラベツツ
 タヘナル歌詠讚嘆ス
 ハルカニミレバ西方ノ
 ソラニハ紫雲タナビキテ
 彌陀如來能化ノ主

金色相好アラタナリ
 ナカニモ白毫マドカニテ
 アキノツキニコトナラズ
 イロイロヒカリカガヤキテ
 行者ノ室ヲゾテラシケル
 觀音勢至諸薩埵
 ヒカリノナカニミチミテリ
 無數ノ賢聖諸天衆
 クモノアヒダニミエタマフ
 紫雲ヤウヤクチカヅキテ
 異香カツガツニホヒツツ
 スデニナノメニオリキテハ
 コエゴエワレテホメタマフ
 ソラニハ妙華フリクダリ
 地ニハ聖衆ツラナリテ
 伎樂歌詠コエスミテ
 栴檀沈水ニホヒマス
 彌陀如來諸聖衆

行者ノマヘニ顯現シ
 觀音ウテナヲヨセタマヒ
 勢至カウベチナデタマフ
 ツヒニ大悲觀世音
 金蓮臺ニ坐セシメ
 大勢至モテチサヅケ
 オナジク引接タレタマフ
 トキニ聖衆コトゴトク
 威儀ヲワスレテ歡喜セリ
 ホトケモエミチフクミテゾ
 ヤウヤクカヘリタマヒケル
 スナハチ佛後ニシタガヒテ
 コレラノ大會モロトモニ
 輪廻ノサトヲワカレツツ
 安樂國ニ往生ス
 永離身心惱
 内外ノ受樂ヒマモナシ
 大乘善根界

タレカ機嫌ノ名ヲキカム
 イロミナマコトノイロニシテ
 花葉モチリニケガサレズ
 キクコエサナガラ法ナレバ
 衆生ノサトリヲヒラクナリ
 イロヲミコエヲキクモミナ
 見佛聞法縁ヲナシ
 香ヲカギアヂハヒナムルコト
 發心修行ノタヨリナリ
 臨終ノ正念ナルユエニ
 音樂異香來現シ
 臨終ノ正念ナルユエニ
 彌陀諸聖來迎ス
 臨終ノ正念ナルユエニ
 無生ヲサトリテハナニ坐ス
 臨終ノ正念ナルユエニ
 彈指ノアヒダニ往生ス
 三十二相具足シテ

迎接讚 竟

極樂讚本

莊嚴端正殊妙ナリ
 六通三明サトリエテ
 ココロノゴトク自在ナリ
 サキニ往生セシヒトハ
 神通自在ノ身トナリテ
 苦海ニカヘリキタリツツ
 イソギテワレラナムカフベシ

スデニ淨土ニウマレタル
 無爲無漏ノタノシミハ
 輪王釋王梵王モ
 タトヘトスルコトウベカラズ
 ムカシ娑婆ニテキキシモ
 イマミルトコロハ超過セリ
 イマダミザルヲミルノミカ

イマダキカザルノリヲキク

歷劫已來ニイマダミズ
 西方淨土ノ寶莊嚴
 地上虚空ニミチミチテ
 珠羅寶網カサナレリ
 寶樹ノモトニハコトゴトク
 諸佛ノ淨土顯現シ
 宮殿ノナカニハミナナガラ
 彌陀ノ三尊ミエタマフ
 七重寶樹ツラナリテ
 常樂我淨ノカゼスズシ
 八功德水キヨクシテ
 苦空無我ノナミトナフ
 樓殿林池照曜シ
 表裏タガヒニカガヤケリ
 鳧雁鴛鴦ムラガリテ
 微妙ノ法門サヘヅレリ
 ノリチトナフル衆鳥ハ

イケノホトリニ逍遙シ
 ハナチチラセル諸天ハ
 ソラノナカニミチミテリ
 アルヒハ空殿樓閣ニ
 ノボリテ他方界ヲミル
 アルヒハ人天聖衆ニ
 マジリテ伎樂歌詠セリ
 目ニハタヘナルイロヲミル
 耳ニハ解脫ノコエヲキク
 百寶千寶具足セル
 七重寶樹ノモトゴトニ
 化佛菩薩マシマシテ
 不退ノ法文トキタマフ
 八方上下無央數ノ
 諸佛國土ノソノナカニ
 極樂世界ノ莊嚴ハ
 最尊第一ナラビナシ
 シカルニ彌陀ノ淨土ハ

快樂不退ノトコロニテ

壽命モ無量ニナガケレバ
 タノシビツクルコトゾナキ
 ワレラモカノ土ニウマレナバ
 コレラノ妙果ニホコルベシ
 コレラノ妙果ヲエンコトハ
 シルベシ念佛ノチカラナリ
 出離生死ノカタキコト
 オモヒモシラヌココロニテ
 本願易往ノ不思議ヲモ
 オモフホドニハヨロコバズ
 ハヤク萬事ヲナグステテ
 一心ニ彌陀ヲ念ズベシ
 悲願サダメテフカケレバ
 引接ナニチカウタガハム
 一日七日ツトムレバ
 ウテナニノリテ娑婆ヲイヅ
 ウレシキノリニモアヘルカナ

無爲ノ法性證シテム

極樂讚 本 竟

極樂讚 末

誓到彌陀安養界
 還來穢國度人天
 願我慈悲無際限
 長時長劫報慈恩
 十方三世ノ諸佛モ
 一切ノ諸菩薩モ
 八萬藏ノ聖教モ
 阿彌陀ノ三字ニチサマレリ

極樂世界ニユキヌレバ
 ナガク苦海ヲコエスギテ
 輪廻ノフルサトヘダ、リテ
 歡喜ノココロイクバクヅ
 大寶空殿ニマウデツツ
 彌陀ノ威光ヲ禮スレバ

金蓮臺座ノウヘニシテ
不退ノ法忍トキタマフ
左右ノフタツノ寶座ニハ
觀音勢至マシマサル七異
ホトケノ加被ニアラズバ
コノ地ヲフムモノアリガタシ
ハジメテコノ會ヲ見キクニ
歡喜ノナミダトドマラズ
解脫ノタモトヲウルホシテ
無始ノ罪垢モスガレヌ
ムカシハ無常苦空ヲ
ワレモヒトモウレヘキ
イマハ常樂我淨ヲ
チカクモトホクモウケニケリ
盡虚空界ノ莊嚴ハ
マナコ雲路ニマガヒツツ
轉妙法輪ノ音聲ハ
キキ寶刹ニミチミテリ

イケニハ衆鳥ムラガリテ
微妙ノ法文サヘヅレリ
ソラニハ散華ノ天ミチテ
教主ヲ供養シタテマツル
イケノホトリノ梅檀樹
行行葉葉アヒツゲリ
枝葉華菓ミナトモニ
七寶ヲモテ合成スガワビヤウ
百千萬種ノ寶蓮花
イケノオモテニサキミダレ
微風ヤウヤクフキスギテ
ヒカリモニホヒモ亂轉ス
アルヒハ樓ノウヘニシテ
十方ヲノゾムモノモアリ
アルヒハ空殿ニ乗ジツツ
虚空ニ坐スルヒトモアリ
空殿番番オホクシテ
瑠璃ノトボソニハナヒラケ

極樂讚

末竟

樓閣重重カサナリテ
瑠璃帳ニツユチタル
空殿ヲユケバ空殿アリ
林池ヲユケバ林池アリ
カクノゴトクヘメグルニ
サマサマ微妙ノトコロアリ
說法衆會ノニハモアリ
入定坐禪ノマドモアリ
伎樂歌詠ノウテナアリ
神通遊戲ノミギリアリ
八功德池ノ蓮華ニハ
往生人コソヤドルナレ
オノオノ半座ニトドマリテ
閻浮ノトモヲゾマツトキク
シカルニカノ土ノ衆生ハ
見聞ココロニマカセタリ
マナコニホトケテ瞻仰シ
耳ニ微妙ノノリチキク

光明讚

果得涅槃常住世
壽命延長難可量
千劫萬劫恒沙劫
兆載永劫亦無央
泥洹無爲ノクニナレバ
トコロニ災モナカリケリ
聖衆ヲ伴侶トスルユエニ
退緣退境サラニナシ
彌陀如來ニ奉仕シテ
不退ノクラキヲ證得シ
ホトケノ加被ヲカウフリテ
有緣ノ衆生ヲミチビカム
阿彌陀佛ヲ念ズレバ
自行自然ニ増進シ
有緣ノ衆生ヲミチビケバ
利他速疾ニ圓滿ス
曠劫來流轉
解脫ノコロモチキザリシニ

速證無生身
瓔珞細軟ミニマトフ
ウテナニ忍辱ノコロモシキ
帳ニ解脫ノカザリアリ
寶座寶衣コトゴトク
莊嚴七寶ヲモテナセリ
淨土十方ニオホケレド
罪人ウマルルコトカタシ
ホトケハ三世ニマシマセド
カカル悲願ハイマダナシ
トコロハ不退ノトコロニテ
三途八難オソレナシ
イノチハ無量ノイノチニテ
生老病死ノウレヒナシ
教主世尊ノ梵音聲
キケドモキケドモアク期ナク
觀音勢至ノ妙轉言
フカクキモノゾ銘ジケル

彌陀ノ光明アマネク
十方無量世界ノ
念佛ノ衆生ヲテラシテ
不捨攝取シタマヘリ
正坐十劫ノムカシヨリ
慈光世界ヲテラスナリ
光觸カウフルトモガラハ
塵勞滅シテ往生ス
稱名念佛ノ行者ヲバ
攝取ノヒカリゾテラスナル
護念擁護ノチカラニテ
邪魔惡鬼ニチカサレズ
彌陀ノ光明無邊ニテ
イタラヌトコロゾナカリケル
三途恐動惡苦ノソコマデモ

光明テラシテツミキエヌ
 攝取不捨ノ光明ハ
 念ズルトボソテラスナリ
 觀音勢至ノ來迎ハ
 コエテタヅネテムカフナリ
 光明十方ヲテラシテ
 念佛ノ行者ヲ皆攝シ
 蓮臺九品ニワカレテ
 破戒罪人ナチ生ズ
 彌陀ノ名號トナフレバ
 攝取ノヒカリゾ身ヲテラス
 煩惱サヘテミエネドモ
 大喜カナラズ生ズナリ
 ワレネガハクハ生生ニ
 ホトケニチカヅキ法ヲキキ
 ナガク生死ノ苦ヲイデ、
 彌陀ノ淨土ノヒトタラム
 彌陀攝取ノ光明ハ

光明讚竟

餘ノ行者ヲバテラサズ
 觀音大士ノ蓮臺モ^{ニ異}
 念佛ノモノヲゾノセタマフ
 光明攝取ノ名號ノ
 功能オモフゾタノモシキ
 四重五逆モミナ滅シ
 九品ノウテナニイタルナリ
 彌陀ノ威神光明ハ
 最尊第一ナルユエニ
 諸佛如來ノ光明ノ
 オヨブトコロニアラザリキ
 臨終ニ彌陀ヲ念ズレバ
 慈光キタリテミテラス
 本願力ニノリテコソ
 タカラノウテナニイリニケレ

寶海讚 具云寶海梵士

寶海梵士ハ釋尊ノ
 初發道位ノ名字ナリ
 法異 寶藏如來ノミモトニテ
 ワレラテ度セムトチカヒテキ
 一千餘人ノ新發心
 オノオノコノ土チステシトキ
 寶海梵士ハ啼泣シ
 如來ニマウシテマウサマク
 世尊ワガ身ウゴクコト
 緊手樹林ノ葉ノゴトシ
 ココロモウレヘ身モヤセヌ
 娑婆ヲアワレブ菩薩ナシ
 ワレイマチカフ苦ノ衆生
 一子ノ慈悲ヲホドコシテ
 菩提ノミチヲシヘテ
 六道生死ヲ濟度セム
 トキニ大地震動シ
 ツキヒモサラニヒカリナシ
 ソラヨリ種種ノハナフリテ
 タヘナルコエゴエ讚嘆ス
 夫人モ王モモロトモニ
 イノチチステムトカナシビキ
 群臣諸民コトゴトク
 悲啼涕泣カギリナシ

寶海讚竟

心品讚

八苦充滿ノサカヒニテ
 生テウケケルハジメヨリ
 内外身心コトゴトク
 苦ナラズトイフコトゾナキ
 シヅカニワレラガアリサマチ
 オモヒトクコソカナシケレ
 萬劫煩惱フカクシテ

三業所修ノ福善ヲ
 罪苦ノ衆生ニ廻向シテ
 カレラノ衆生ノ苦患ヲバ
 ワレコレヒトリツグノハム
 天上人中コトゴトク
 ナシヘニナビキシタガヒキ
 輪廻ノ苦患ヲマヌカレテ
 成佛得道サダマリヌ
 多生曠劫ヘシカドモ
 大悲ノチカヒハオコタラズ
 頭目屍骨王位等^{ノモテ}
 衆生ノネガヒニシタガヒキ
 ハトニカハリテ尸毘王ノ
 ハカリノウヘニノボリシニ
 三千界モ震動シ
 十方ノ諸天悲啼シキ
 長壽大王ミテホドコシテ
 讎敵ノ害ヲウケシトキ

長生太子ニ遺誡ス

アダナムクフルコトナカレ
 薩埵王子竹林ニ
 ウエタルトラチアハレビテ
 ユキノハダヘチホドコシテ
 トラノマヘニゾフシタマフ
 王子ノ慈恩ヲヨロコベト
 ウエテハチカラモツキヌレバ
 ハダヘチネブリ目ヲノベテ
 カタチヲヤブルコトヲエズ
 王子イヨイヨアハレビテ^{異作ニ憐或怒或矜}
 カレタルタケチカタナトシ
 ミヅカラハダヘチサシキリテ
 ソノ血ヲトラニゾノマシメシ
 身肉ヤウヤクツキヌレバ
 コロモハタケニゾトドマレル
 ミドリノカミハノコレトモ
 タマノスガタハカクレニキ

三途沈没ヲハリナシ
過去無數ノ諸佛ノ
六道四生ニヘダテナキ
大慈大悲ノ利益ニモ
モレケムコトコソカナシケレ
三業ミナコレツミナレバ
諸佛ノ方便チカラナク
四威儀モ惡縁ナルユエニ
衆聖濟度ヲウシナヘリ
ワレラ下界濁惡ノ
ワヅカノスエニウマレキテ
ココロハ中道頓教ノ
ツキノヒカリゾナホクラキ
下界濁世ニ生レキテ
中道頓教ツキクラク
一生ノ希望ツキザレバ
永劫流轉イカガセム
一日一夜ヲフルホドニ

八億四千ノオモヒアリ
念念ゴトニナストコロ
ミナコレ三途ノ業トナル
三惡道ノ因縁ハ
マナコノマヘニ増長シ
出離生死ノ慧業ハ
ココロノホカニトホザカル
縁務ハトドメガタクシテ
流轉ノ因トゾナリニケル
修善ニココロモノウクテ
出離ノ縁ナキワレラナリ
妄念シバシバウツリキテ
ハルノナミニコトナラズ
邪執シキリニツモリテ
フユノユキニアヒニタリ
オモヒトオモフコトハミナ
流轉生死ノ業トナル
ナゲキトナゲクコトゴトニ

後世ノツトメハヒトツナシ
イヅレノトキニカ永劫ノ
フカキネブリチサマスベキ
イヅレノ生ニカ長夜ノ
ムナシキイメノオドロカム
ワレラコノタビイカニシテ
生死ノキヅナチハナレマシ
煩惱業苦ノ三障ニ
ツナガレタルコソカナシケレ
ワレライカナルミチモチテ
ノリノタメニハチシムラム
コトモナノメニオモヒテハ
マタモアフベキ御ノリカハ
カカル罪業オモキミノ
ワヅカノ臨終ノ一念ニ
無爲ノ淨土ニイラムコト
オモヘバ過分ノ巨益ナリ
凡夫淨土ニユキヌレバ

心品讚 竟

本願讚

曠劫塵沙ノツミキエテ
六通具足シ自在チエ
老病無常ノ苦ヲハナル
ワレヨニコエタル願チタツ
カナラズ無上道チエム
コノ願満足セズバワレ
無上正覺成就セジ
四十八ノ誓願ハ
衆生ノタメニオコシキ
僧祇劫ノ苦行モ
ヒトヘニワレラガタメナリキ
五劫思惟ノ本願ノ
大智ノ光明ホガラカニ
十念成就ノトモガラノ
ココロノヤミヲテラスナリ

四十八願ネムゴロニ
濁世ノ衆生ヲヨバフナリ
願ニ乗ジテウマルレバ
罪福多少モエラバレズ
弘誓ハ四十八ナレド
念佛バカリチアラハシテ
ホトケモカヘリテ念ジツツ
念ズルヒトナゾシロシメス
彌陀ノ因地ノ本願ハ
ソノカズ四十八ナレド
一一誓願ミナトモニ
念佛往生トコソキケ
彌陀ノ本願オホケレド
第十八コソスグレタレ
五劫思惟ヲタヅヌレバ
タゞ十念ノチカヒナリ
シカルチ彌陀ノ本誓ハ
破戒重罪ナホステズ

三念五念モ縁ニヨリ
カナラズ來迎タレタマフ
ワレモシ成佛セムトキニ
ワガナチ稱セム諸衆生
十聲マデモウマレズバ
正覺トラジトキタマフ
縱正覺ナルベクハ
大千界ヲ感動シ
虚空ノ諸天コトゴトク
タヘナルハナチフラスベシ
トキニ大千感動シ
微妙ノ寶華ミダレチリ
ソラニ自然ノコエアリテ
決定成正覺トイフ
凡夫引接ノ思惟ハ
ハルカニ五劫ヲオクリキ
本願成就ノ正覺ハ
イマ十劫ヲヘダテタリ

法藏行因トホクシテ
 乃往過去ノムカシヨリ
 彌陀證果ノフカキコト
 十劫已來ノイマナラム
 本願大悲ノ大地ニハ
 瓦礫モアヘテキラハレズ
 十惡五逆ノ草木モ
 無漏ノ花葉生長ス
 平等大悲ノ本願ハ
 利益末法ノトキヲサス
 衆生ノ根機ヲエラバネバ
 五逆闍提モミナウマル
 コノユエワレラ本願ニ
 歸シテ御ナヲ稱念ス
 佛語ニ虚妄ナキユエニ
 臨終ノ來迎ウタガハズ
 上ハ一形至十念
 三念五念モ來迎ス

戴角被毛ノ報ヲエム
 釋尊遺教ノナカニシテ
 剃髮染衣ノミナレドモ
 ムナシク沙門ノナヲカリテ
 一切衆生ヲ誑惑ス
 信戒施聞慧慚愧
 無上ノ聖財ナリケレド
 失此法財ノワレラニテ
 ヒトツモコレヲタクハヘズ
 孝養父母ノココロナク
 奉事師長ノミチモナシ
 カクノゴトクノ世善ヲモ
 ツトメザルコソカナシケレ
 コノミハ九孔ヨリ不淨ノ
 河海ノゴトクナガルレド
 薄皮ヲオホヒツツメルテ
 清淨ナリトオモヒツツ
 愛河マスマスフカクシテ

直ニ彌陀ノ弘誓ハ
 凡夫ノ念コソ生ズナレ
 本願讚竟

懺悔讚
 本師釋尊能化ノ主
 十方如來諸薩埵
 彌陀觀音大勢至
 懺悔ヲ證明ナシタマヘ
 ソモソモワレラ無始ヨリモ
 累劫世世ニ生テウケ
 貪瞋等ノヒノタメニ
 知慧善根ヲ焚燒ス
 アハレナルカナカ、ル身ノ
 ヒサシク娑婆ニトドマリテ
 功ナクイノチヲスツルコト
 塵沙劫ニモスギヌラム
 三業四威儀ニナストコロ

貪欲ノナミナホヤマズ
 慚愧ノココロナカリセバ
 魔王ノ僕使トナリハテテ
 六道四生ニメグリテハ
 イツヲ期スベキミナラマシ
 コノタビ彌陀ノ要法ニ
 タマタマアヒテトナヘズバ
 長劫生死ノ苦患ヲバ
 タレニナゲキテノガレマシ
 彌陀本誓ノ名號ハ
 ヒトヘニ無緣ノ慈悲ナレバ
 業海苦輪キハモナキ
 ワレラモ生死タイデヌベシ
 シルベシ逆罪ノ闍王モ
 彌陀ノ功德ヲキキエツツ
 一念歡喜スルユエニ
 如來ノ記莂ニアヅカリヌ
 闍王ノ作佛ノミナラズ

三途八難ノ因ヅカシ
 アシニノヅメル獄火ヲバ
 シレドモサラニオドロカズ
 殺盜淫酒妄語等
 八戒十戒十善戒
 乃至威儀ニイタルマデ
 ナカサヌ戒ヤナカラマシ
 邪見惡見人我ノ見
 嫉妬憍慢弊懈怠
 謗法無信ヲコトトシテ
 ヒトツモ修善ノココロナシ
 名聞利養ノタメニシテ
 ムナシク信施ヲウクルミノ
 不淨ニ法ヲトクトガハ
 サラニノガレムミチゾナキ
 ツラツラコレヲ案ズレバ
 作着人皮ノワレラナリ
 驢胎馬腹ノナカニイリ

太子ト五百ノ長者子ト
 オナジク作佛セムコトハ
 阿彌陀佛ニコトナラジ
 タゞ一念ノ妄心ニ
 生死ノサカヒニイリシヨリ
 無明ノヤマヒニメシヒツツ
 本覺ノミチヲワスレタリ
 ホトケハ大悲ノ醫王ナリ
 良藥ノ法ヲサヅケツツ
 正見ノマナコヲヒラカシメ
 淨土ニ引接タレタマヘ
 念念不捨ノ名號ハ
 念念懺悔ノ法ナレバ
 五逆謗法闍提モ
 廻心皆往ウタガハズ
 名號不思議ノ滅罪ハ
 千歲ヘヌル閻室ニ
 ワヅカニイタルトモシビノ